

東方創操録 更新停止

火の大精霊

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

おっす俺智、なんか気づいたら死んでて目が覚めたら目の前に女神様がいた
そしたら転生させてくれるってさ

マジで？まあ、もとの世界は案の定無理だよな

じゃあ東方だな。でも転生したはいいものの転生先が古代・・・だと！

まあなんとかなるだろ（思考放棄）

考えるの面倒臭いしな

この作品は普段は面倒臭がりやるときにはやる主人公が特典でもらった能力を駆使して幻想郷まで生き残るものです

そしてこれは作者にとつて処女作です

至らない点があると思いますが、暖かい目で見守ってくださいれば幸いです
自分的にはネタ多目にしたかと思っております

なお、この主人公は東方を知っています。それと私は原作未プレイなのでおかしなところがあると思いますが、そこは暖かい目で見守ってやってください

8 / 5 あらすじ変更

目次

第0章 転生

第1話 転生	1
--------	---

第1章 古代の都市編

第1話 能力	5
--------	---

第2話 住居と修行	9
-----------	---

第3話 出会い	13
---------	----

第4話 都市と神様	17
-----------	----

第5話 軍と護衛	25
----------	----

第6話 人妖大戦	34
----------	----

杉本智の設定	39
--------	----

第二章 諏訪の国編

第1話 都市跡と洩矢	43
------------	----

第二話 洩矢神社	49
----------	----

智の語り壺 永琳との生活	56
--------------	----

第三話 諏訪の国	68
----------	----

第四話 宴会	78
--------	----

第五話 諏訪の国の日常	89
-------------	----

第六話 宣戦布告	99
----------	----

第七話 神と人の修行・一	111
--------------	-----

第八話 神と人の修行・二	133
--------------	-----

智の語り壺 人妖大戦・裏	141
--------------	-----

第九話 神と人の修行・三	150
--------------	-----

第十話 諏訪大戦	156
----------	-----

第十一話 大戦後、スキマに会う	168
-----------------	-----

			智の設定2	諏訪大戦編	——	176
			第参章	妖怪の山編		
		184	第壹話	その少女、名は八雲紫		
			第貳話	青年、弟子を持つ	——	189
			第参話	青年、少女に修行をつける		
194			第肆話	青年、天狗に出会う	——	204
			第伍話	青年、山に住む	——	211
			第陸話	青年、鴉と喧嘩する	——	219
			第漆話	青年、鬼と戦う	——	226
235			第捌話	青年、鬼と戦う	後編	
			第玖話	旅再開、去らば妖怪の山		
		243	智の設定	妖怪の山編	——	248
			第肆章	竹取物語編		
			第壹話	到着、なんと綺麗な平城京		
		253	第貳話	再開、蓬莱山輝夜	——	258
			第参話	始動、陰陽屋春風	——	262
			第肆話	戦闘、獣型人喰い妖怪		
		270	第伍話	戦闘、花妖怪・風見幽香		
			第陸話	和解、花妖怪・風見幽香		
		281				

第伍章 平安編	設定 竹取編	344	第拾弍話 追え！藤原妹紅の涙	328	第拾壹話 出発、不死の山	322	第玖話 再開、月の頭脳・八意永琳	315	第捌話 虐殺、月からの使者	298	第柒話 難題、求婚した貴族の末路	288
	355		夜									
			第六章 中世ヨーロッパ・紅魔館編	398	設定 平安編	391	第参話 邂逅、白面金毛九尾・玉藻前	376	第肆話 看破、玉藻前の正体	384	第弍話 到着、鳴くよウグイス平安京	361
			第一話 おい、妖怪の山の門番だけ堅	406								
			物じゃねえかby. 智	406								

第0章 転生

第1話 転生

俺は杉本智、高2だ。まずは俺の現状を説明すると真っ白な空間にいた。

杉「ここは何処だ？」

なんでこんなところにいんだ？

？「ここは生と死の境界です」

突然、俺の後ろから声が聞こえた

杉「!?あんたは誰だ？」

神「私はあなた達の言葉で言うくと神になります」

瞬間、俺の思考回路が一時停止した

杉「・・・はあ!?あんたが神!?それマジで言ってるのか!？」

俺は声を荒らげる。当然だいきなり私は神だとか言われても信じれるわけがない
神「それはそうでしょう私がもしあなたの立場なら信じられないでしょう」

!!今、俺の心を!?・・・なるほど神と言うのもあながちまちがいじゃないかもな

杉「それであんたは俺に何のようだ？」

神「はい・・・まず最初に謝っておきますすみませんでした」と言いながら神は頭をさげた

俺は困惑した、何故神が頭を下げるのかわからなかったからだ

杉「ちよつと待ていろいろ理解できないまず何故あんたは謝っている？」

神「はい、まずあなたは死にました」

・・・なん・・・だと俺が・・・死んだ？

杉「そんなはずない第一俺はこうして・・・!?」

神「気付きましたかだから言ったのですここは生と死の境界だと」

そうか俺は本当に死んだんだな

杉「!?」

俺は驚いた何故なら神が俺を抱きしめていたからだ

杉「なっ!? あっあんた何してんだ!?」

俺は抜け出して神の方を見ると・・・まだ何か言いたそうだった

杉「まだなんかあんのか？」

神「っ!? はっはい実はあなたが死んだのは私のせいなんです」

杉「・・・!? は、え、どつど言うことだよ」

神「あなたは本来あと80年は生きるはずでした。しかし私のミスで間違つてあなた

の書類か破れてしまいあなたは何もないとところからトラックが出てきて死にました」

杉「そうか・・・まあやっちゃったもんは仕方ない受け入れるとするか」

神「怒っていないのですか？」

杉「怒ってないって言ったら嘘になる」

神「でしたら「だけど」!？」

杉「過去のことは変えられない。まっ、現実受け入れていくとするよ」

神「・・・でしたら、あなたを転生させます」

杉「・・・えつでできるの？」

神「はい、元の世界には無理ですが二次元の世界にならいきます」

杉「そうか・・・だったら東方 projectの世界に行きたい」

神「分かりましたでは特典として3つお願いできます」

杉「んっそうか、じゃあ能力でありとあらゆる物を創造する程度の能力とありとあらゆる物を操る程度の能力をくれ」

神「分かりました。他には？」

杉「それと、能力で操った物をコントロールする強靱な肉体もくれ」

神「分かりました。では転生させます準備はよろしいですか？」

杉「ああ、いいぜ」

と、返事をしたと同時に浮遊感を感じ、下を見ると・・・空間に穴が空いていた
杉「じゃあな」

そして俺は空中に放り出された

第1章 古代の都市編

第1話 能力

前回のあらすじ

杉「俺、転生して空からおちてまふ＼（・o・）／」

やあ、俺は杉本智、転生者だ。現在紐なしバンジーしてるとこだ。さあてどうしようかな・・・！！そうだ、地面と俺の間の引力を操って体を浮かせよう

杉「そうと決まれば実行あるのみ成功しろよ」

俺は能力を発動して体を浮かせようとしたがいつまでたっても周りの景色が止まらない。

杉「どうなってんだよ!!」

俺は地面に激突して意識が飛んだ

♪数分後♪

杉「・・・ううん・・・!!ここはそうか俺地面に激突して気絶してたのか」

とりあえず能力を試してみよう。まずは創造の方をやろう

杉「うーん何を創ろうかな・・・!! そうだとりあえず霊力と魔力を創ろうか」

俺は自分の体の中にとっても弱い何かが流れるのを感じた

杉「・・・どうやら成功したみたいだな霊力と魔力ってどうやって出すんだろうか・・・とりあえずは霊力を球の形にしてみようかな」

俺は右手に丸い球があるのをイメージしたすると

杉「おお、できたへえ霊力って青白いんだな。じゃあ魔力はどうだろう」

今度は魔力を左手に集中させて丸い球があるのをイメージした

杉「おお、こっちはなんか紫っぽいなよしじゃあ撃ってみよう」

俺は近くにあった岩に両方の球を撃ってみたしかし

杉「あれ? 何でだあすぐ消えちゃうなあ。ううん練習あるのみかな」

杉「よし、次は操る方を試してみようって言ってもどうしようかとりあえず近くに川があるから水を操ってみよう」

俺は自分の右腕に水が集まるように操った

杉「まあ成功だな。次は・・・血液かないや・・・!! そうだ自分の生命力の限界を操って半不老不死になろう。それとこの先何があっても動じないように精神力も

操っておこう」

そして俺は本当に半不老不死になったかを確かめるためカッターを創造して手首を切つたすると瞬く間に治つていった

杉「すげえなほとんど一瞬じゃねえか」

ちなみにどのくらいあげたかと言うと十分あれば骨折が治る位にはなつたかな

杉「改めて考えるとすでに人間じゃねえな」

俺はふと思つたことがある。そr? 「がああああああ!!」

杉「な、なんだこの声は?!」

さっきの声が聴こえてから茂みのほうから異形の怪物が現れた

杉「!!なるほどこれが妖怪か気味が悪いな」(さて、どうするか)

能力があるとはいえまだ回復が早すぎる一般人であるなので必然的に逃げるしか選択肢はないのだ

俺は脚力の限界を操つてその場から逃げ出した

杉「まさか転生初日に妖怪に会うとは驚いたぜ」(さてと、これからどうするか)

おそらく都市はまだないだろうというか永琳すら産まれていないだろう

杉「どうするか」

俺の冒険は始まったばかりだ

第2話

住居と修行

前回のあらすじ

杉「能力、試していたら妖怪が出てきて逃げ出したったwww」

杉「というわけで住む場所決めて修行しよう」

て言っても何すればいいんだろうなあ

杉「とりあえず、霊力と魔力増やそうかな。まあ使つてれば増えるだろ」

まず霊力と魔力でどれくらいの弾幕が出せるか試してみよう

で、結果から言うとまだ10個が限界だった。これ以上使えば動けなくなるからな

杉「じゃあ、家建てるか」(もちろん能力でな)

というわけで一階建の家ができた

杉「ふあゝあ今日は疲れたからもう寝るかな、おやすみ」

そして俺は床についた

く翌朝く

杉「ううん・・・ふあゝあよく寝たもう朝か」

どうやらもう朝が来たようださつき寝たような錯覚をおこすな

杉「とにかく今日も修行だななんか体の中に感じる力も大きくなっているしな。じゃあ今日も限界を調べるとするか」

今日の限界は18個だった

杉「おお昨日より8個増えてるなこの調子でどんどん増やしていこうかのもう昼かよし狩りを始めよう」

そうして俺はもりに入っていった。ちょうど近くにイノシシがいたにでそいつを食べることにした

杉「此奴結構でかかったなおかげで何日かは持ちそうだな」

「あ、そういえば能力で火が出せることを発見したんだ。これで調理もできるな。ついでに水や土や雷、風も創り操れるようだ。」

杉「マジで便利な能力だな。選んでよかったよ」

そんなこんなで50年後

杉「転生してからもう50年かかなりの年月が過ぎたなまだ原作キャラ出てこねえな」『この時点では智君は転生した年代は知りません』

杉「まあ、そのうち出てくるだろ気長に待つさ」

さあて何しようかな♪あ、ちなみに霊力と魔力はあれから増えて、今じゃ弾幕は100個は余裕で出せる。ん、なんでそんなに出来るかって、家の中で弾幕を張って霊力と魔力が底をつくほど作ってぶっ倒れたりしてたからなあ

杉「さて、今日は何しようかな」

? 「ぐがああああああああ」

杉「!?何だ?!何の声だ?」

何をしようか考えていると茂みの方からめちあくちやでかい蠮螋が出てきた

杉「成る程妖怪かでつけえ蠮螋だなあ3、4mはあるんじゃないか」

しやあない倒すとするか

杉「さあ、行くぜついでこれるか」

俺は刀を出して臨戦体制に移る。さてどうやって倒そうかな♪

杉「まずは鎌から斬り落とすかな。お前はどれだけ耐えられるかな♪」

俺は足と刀に霊力を集中させて走り出す。その速度は音を越える。蠮螋の妖怪はどんどんばらばらになっていく

杉「何だ意外と呆気ないんだな。拍子抜けだぜ」

精神力を操ったとは言え一人はやはり寂しいものだたと50年の間に気付いた事だ

続
く

第3話 出合い

前回のあらすじ

杉「家建てて妖怪を退治した。やっぱり一人は寂しいね（・▽・）」

またあれから50年が過ぎた

杉「飛んでたら何か見つけたから見に行こう」

俺は羽をはやして見つけた方角に飛んでいった

? 「きやあああああああ」

杉「!?何だ、今の声は?!」

声の方に飛んでいくと・・・女の子が妖怪に襲われていた

（??side）

くっ不覚だったわまさか妖怪に襲われるとわ思わなかったわ
どうしましょう矢もなくなったしこのまま死ぬのかしら

そう思った瞬間空から羽をはやした人が降りてきた。

〈智side〉

杉「何とか間に合ったみたいだな。おい、その嬢ちゃん」

？「えっ?!私かしら？」

杉「そう、そのあんただ。怪我はねえか」

？「ええ、怪我はないわ」

杉「そうか、ところでこいつ殺っちゃっていいかな？答えは聞いてないけど」

そう言う俺は蜘蛛の妖怪を惨殺した

杉「ふう、大丈夫か？」

？「ええ、大丈夫よ、問題ないわ」

杉「俺は、杉本智ってんだよろしくな」

永「私は、八意**よ。呼べなかつたら永琳でいいわ」

わあーまじすか原作のキャラじゃないですかーやだー。助けなかつたら原作崩壊してたねよかつたよかつた

杉「そうかじゃあ永琳この近くに住む所ねえか」(まあ、本当はそこに行こうとしてた

杉「おおい大丈夫かあ永琳」

永「え、ええ、だ、大丈夫、よ」

杉「いや、大丈夫に見えないんだが、本当に大丈夫か？」

永「大丈夫だから行きましょう」

杉「あ、ああ、そうだな♪」

そうして俺たちは中に入っていった

杉「すげえな、これ。誰が造ったんだ？」

永「全部私が造ったわ」

へえー、これ全部永琳が造ったのかーって！

杉「これ全部永琳が造ったのか!?マジで?!」

永「ええ、おおマジよ♪」

杉「ほえー、すっげえーなあ」

永「さあついてきて」

俺は永琳についていった。そこで俺は凄いものを見た！

第4話 都市と神様

前回のあらすじ

杉「妖怪殺すべし、慈悲はない」

杉「前回、永琳についていったと言ったな・・・あれは嘘だ」

？「貴様、何をごちやごちや言っている！」

とまあ、なんか都市の警備の人が邪魔してきて、中に入れないんだよね

どうしたもんかね、実力行使っていうのもいいけど・・・、あまりやりたくないんだ

よな

永「ちよつと、彼は私を助けてくれた恩人よ！」

警「大丈夫ですよ、八意様、こんなやつ、我々がすぐにやつつけてあなた様を解放してさしあげますから」

何を言ってるんだこいつらは、どうやら、俺が永琳に何か脅しのようなものをしてこ
うなっていると思っっているらしい・・・、

杉「どうしてそうなった」

疑うまではわかる、だけど脅しまではさすがにいかないだろ

警「いくぞ、妖怪め！」

永「だから違うの y 『うおおおおお』」

永琳の抗議もむなしく、警備のやつらは俺に向かつてきた……まあ無駄なんだが
な

警「な、なぜだ!？」

警備の一人が声をあげる、当然だ、なぜなら……さつきから俺とあいつらの距離
が縮まらないからだ

永「!?ど、どうして」

杉「俺の能力だよ、俺は『何でも操る』ことができる」

これは、つまり人の感情をも操れるということだが、まあいいだろう

警「何でも、ということは一つ、言っておくぞ、お前らは『だつたら人も操れるじゃないか』と思っっているだろう、しかし俺の能力は、人間を操ろうとするには、かなり力を込めねばならん、つまり今現在では、俺は永琳を操ることができないということだ」
そうなのだ、この能力は人も操れる、しかし自分より、力が弱いもの限定でだ、だから『今の』俺ではできないということだ

警「そうなのか、ならば本当に・・・なるほど、すまない疑って悪かった」

杉「いや、いいさそれよりも、後方注意だぜ？」

警「え？ぐぼあ!？」

振り向く前に、警備のやつ（兜みたいなもの）に突如、矢が刺さった、警備のやつは無事だったが衝撃で気絶している、矢を放った犯人は・・・

永「・・・・・・・・（怒）」

かなりご立腹の永琳だった、後ろに何かこの世のものとは思えない何かがある気がするが、気のせいだろう、幻覚であってほしい

永「行きましょう、智」

杉「へーい、了解、了解」

こうして俺は、今度こそ都市の中に入っていった

く都市く

杉「すげえな、これ。ここって前までは何もなかったんだろ？誰がここまで仕上げたんだ？」

永「私よ」

杉「へー、そうなんだ・・・、って、はあ!？」

俺は思わず声をあげる。当たり前だ、これを全部永琳が？マジかよ

永「な、何よ急に大きな声出して」

杉「なあ、これホントに永琳が全部造ったのか？」

永「ええ、本当よ」

俺は少しの間ぼけーと、アホみたいにぼーとしてた

永「ちよつと、何してるの早く来なさい」

杉「あ、ああ」

俺は永琳の声で、引き戻された。そして、俺は永琳についていった

く二時間後く

永「此処よ」

ついていくこと、約二時間、案内されたのは、物凄くでかいビルであった

杉「すげえ、周りより一回りも二回りもでけえ」

こういうところには、偉い人が誰かがいるのかな？

杉「なあ、永琳」

永「？なにかしら？」

杉「ここってさ、誰がいるの」

永「この都市の守り神、『ツクヨミ』様よ」

杉「そ、そうなのか」

どうりで、なんか神々しい力を感じるはずだよ

永「さあ、行くわよ」

杉「行くって、どこに」

永「決まってるでしょ、ツクヨミ様のところによ、失礼のないようにね」

く五分後く

永「ツクヨミ様、入ってもよろしいでしょうか」

？「ああ、入ってもよいぞ」

永「失礼します」

こういって、俺は部屋の中に入った

ツ「よく来たな永琳、そのそいつは誰だ？」

永「彼は、杉本智と言って、私は彼に危ないところを助けてもらいました」

ツ「そうか・・・、すまないな、智とやら、私の名はツクヨミ、この都市の守り神のようなものだ」

杉「どうも、永琳の言う通り、俺は杉本智だ」

永「ちよ、ちよっと、ツクヨミ様に向かってなんて「よいよい」!？」

ツ「私に敬語を使わないやつは初めてだよ、それで用件は？」

杉「住むところがなくてだな、この都市に住まわせてもらえないか」

ツ「フム、まあよいだろう」

杉「そうか、よかつて「ただし」？」

ツ「お前は、永琳の家でだ」

は、どう言うことだ、つまりなんだ、俺は都市にいてもいいけど、永琳の家で生活をしろってことか・・・

『はあああああああ!?!』

ツ「?何を叫んでいる?ほら、早く出た出た、おっと、智は残ってくれよ少し話があ

る」

こうして、俺は永琳の家に住むことになった

永琳の退出後、俺はツクヨミに止められて、話をしている

ツ「さて、智」

杉「なんだ、ツクヨミ」

ツ「単刀直入に言うぞ、お前に永琳の護衛をしてもらいたい」

杉「!?ど、どういうことだ? 第一、俺は永琳よりも弱いんだぜ? 護衛なんて「お主が力を封じているのは分かっている」! へえ、気づいてたんだ」

ツ「当たり前だ、私の神力に耐えられるものは、永琳しかいないのでな、最も、永琳も完全には言えないがな」

杉「へえ、そうなのか」

ツ「ああ、だからこそ頼んでいる」

杉「・・・、はあ、よしわかった、引き受けよう、住まわせてくれるんだしな」

ツ「そうか、よかったよかった、それじゃあ、もう行っていいよ」

そう言われるがままに部屋を出た、出る際にひとつ言っておいた

杉「お前、口調変えてたんだな」

〈智の退出後〉

私は驚いていた、あいつと話すのが長引くにつれて、口調が碎けて行っていた
ツ「それにしても、何故・・・」
そんなことを考えながら、仕事をするツクヨミ様だった

第5話 軍と護衛

前回のあらすじ

杉「ツクヨミに会って、住む許可を得たよ。だけど、永琳と住むことになったよ」
（^o^）？ナンテコツタイ

杉「ということで、一緒に住むことになったから、これからよろしく頼む」

永「何が、というわけよ。全くツクヨミ様も急なんだから」

どうやら、前にもこんな急なことがあったらしい。

杉「大変なんだな、永琳も」

永「ええ、本当に」

杉「で、俺は何をすればいいんだ」

永「……、え？」

杉「いや、なんだ、その、いくら一緒に住むことになったからとはいえ、居候の身だしな」

永「……………」

杉「だから……、その……」

永「……………」

杉「……………」

永「……………」

杉「?ど、どうしたんだ?／＼／」

永「い、いえ、ごめんなさい、あまりにも、おもしろかったものだから、あははは、ふふ」

杉「な、なんだよそれ／＼」

こんなことが、ツクヨミに会った後に交わされた会話である

杉「あれから、何年経ったかな」

今、俺は都市の近くの森にいる。なぜなら、永琳に薬草の採取を頼まれたからだ。

なんで、自分で行かないのかと聞いたら

永「だって、めんど、ゲフン、仕事が忙しいのよ」

と、言っていたが

杉「まあ、八割方めんどくさいだけだろうな」

自分でめんどくさいっていいかけてたしな。

杉「まあ、薬草もとつたし帰るかな」

と言ったその時！

妖「ぐがあああああ」

妖怪が襲ってきた

杉「はあ、めんどくせえな」

俺は刀を創造して、妖怪と対峙する。

妖怪が突進してくる、が俺は避けながら、妖怪を切りつける。

妖「ぐぎやあああああ!？」

妖怪が叫びながら、のたうちまわる。が、すぐに体制を立て直して、また、とびかかってくる。

杉「一刀流剣技、壹乃型」

俺は刀を、剣道のように構えると・・・、刀が炎を纏う。そして、

妖「ぎやうん!!」

妖怪の突進に合わせて、切り上げて、一気に飛び上がり、切り下げる。

杉「龍炎閃！」

地面につくと、妖怪は燃え尽きていた。

杉「ふう、よし、終了。さて、帰るとするかな。」

軍1「あ、杉本隊長！おかえりになられたんですか」

杉「ああ、ついさっきな・・・、都市周辺の妖怪の様子はどうだ」

軍1「はい、特に妖怪の姿は確認できません、それよりも」

杉「うん？どうした」

軍1「ただ、妖怪が出てこなすすぎで、逆に不気味なくらいです」

杉「そうか、まあ、警戒は解くなよ、いつ襲ってくるかわからないんだからな」

軍1「了解です」

ついに、この時期がきたか、『人妖大戦』、そろそろ俺も覚悟を決めなきやな

杉「おおい、永琳、ただいま」

永「あら、智、おかえり。薬草はちゃんと採れたかしら？」

杉「ああ、そりやあもうばつちりだ」

永「そう、ならいいわ・・・ところで、智」

杉「うん？なんだ？」

永「実はね、結構前から『月移住計画』っていうのが、計画されててね、それで聞きたいんだけど、智、あなたは月にくるわよね」

ついにここに質問がきたな、この問いに、俺は

杉「ああ、そうだな、俺も一緒に月に行くよ」

嘘をついた。

永「・・・そう、ならいいわ、じゃあ、最後の買い物に行きましょう。じつは出発は明日なのよね」

杉「随分と急だな」

永「ええ、だから、早く行きましょう」

杉「ああ、そうだな」

〈数時間後〉

永「はあー、いっぱい買ったわね。」

杉「はあー、俺の金が」

永「いいじゃない、どうせ使わないんだし」

それはそうなのだが、なんかこう、テンションが下がるといふかなんというかなんか
そんなことをしていると、

不1「おうおう、可愛い姉ちゃんじゃあねえか、おい俺らと遊ばねえか？」

前方から不良が三人寄ってきた。俺などいないもの扱いで

永「・・・はあー、あなたたちは私の隣にいるやつは無視なのね」

不2「ああん、こんなやつよりも、俺らといた方が、百倍いいって」

杉「ほう、だったら試してみるか」

不3「ああん、てめえ舐めてんのか、一対三でどう見てもお前の負けじゃねえか」

杉「・・・物事に、百パーセントはあり得ない」

不1「ああん、なに言ってるんだよ、てめえ」

杉「誰が、いつ、俺がお前らに負けると決めた？」

不2 「んなもん、見れば一目瞭然じゃあねえか」

杉 「ならばかかってこい、相手をしてやる」

不3 「ふざけてんじゃねえぞ、てめえ」

不良3の言葉と同時に、全員が突っ込んできて、俺とすれ違おうと、ドサツ×3

不良は全員、倒れていた。

杉 「ほら、帰るぞ、永琳」

永 「すごいわね、一体何をしたの？」

杉 「簡単なことだ。この三人の首にすれ違い様、手刀を入れたただけだ。」

永琳宅

永 「それにしても、相変わらず強いわね」

杉 「そんなことはないさ、まだまだ俺は弱いよ」
そんな会話しているうちに、日は沈んでいった。

翌日

永「いよいよね、月に行くのも」

杉「・・・ああ、そう、だな」

永「どうしたの？ さとs『ウーーーーー！? な、なに?』」

『緊急事態発生、緊急事態発生、現在、都市の正門から百キロの地点に妖怪の群れが、都市に向かって接近中！ その数なんと』

一億

とにかく至急、ロケットに乗り込んでください』

杉「くそっ！やっぱりか、予測はしていたが、そんなにくるとは思わなかったぜ」
俺が、ロケットとは正反対の「都市の正門」に向かおうとすると、

永「待って、どこに行くの？智」

杉「決まっているだろ、妖怪の足止めのだ」

永「!!?駄目よ、絶対に行かせない」

杉「大丈夫だ、永琳、俺は何があろうと、死にはしないさ、じゃあな、永琳、また会おう」

俺は永琳とロケットの距離を操って、永琳をロケットの中に飛ばした
杉「さてと行くとしますか」

人妖大戦勃発

妖怪

一億対人類

五百人

第6話 人妖大戦

前回のあらすじ

杉「ごめんな、永琳、一緒に月に行けそうにないや」

杉「お前ら、今の状況は？」

軍1「あ！隊長！現在は妖怪に向かおうとしていたところですよ」

杉「そうか、それじゃあ行くぞ！ロケットのカウントが始まったら、後退していくぞ」
軍『了解!!』

みんなは、光線銃などを持って、遠距離から妖怪を撃っているが、俺は刀を二本持つて突撃している。

杉「行くぞ、妖怪ども、これが俺の古代編ラストバトルだ！」
まずは、正面にいる妖怪を蹴散らしに行く

杉「二刀流劍技、壹乃型」

そういうと、二本の刀に風が集中してくる、

杉「剛風劍!!」

二本の刀を同時に振ると、集中していた風が一気に開放されて、まるで台風のように妖怪に襲いかかる

妖『があああああああああ』

よしこれで、かなり減らせたが・・・、せいぜい千匹くらいだろう、

杉「くそつ、まだまだ足りない、二刀流劍技、壹乃型」

今度は、刀に水が集まってくる。そして

杉「水月閃!!」

刀をクロススの字に振ると、水が刃のように飛んで行き、妖怪どもを切り裂いた

妖『ぐがああああ』

しかし、絶命に至るまでの、傷ではない。

杉「くそつ、どうすれば・・・そうだ! いい方法がある」

俺は、自分の後ろ以外の方向に銃を展開した

杉「全砲門一斉射! 撃てえええい!!」

その声と同時に、弾が発射される。アサルトからマシンガン、ミサイルやロケランな

どのあらゆる武器の弾だ

妖『ぐがああああああ』

それのおかげで、少しは減らせたな。けど、まだまだいるなく、どうするかな

杉「よつしや、じゃあれだ！二刀流剣技 壱乃型」

刀を構えると、刀が炎に包まれる。

杉「龍炎乱舞!!」

そのまま、妖怪の中に突っ込んでいって、手当り次第に斬りつけていく

『間もなくロケットが発射されます。カウント、開始』

杉「良しきた、みんな戻るぞ!!」

軍『了解!!』

俺たちは、ロケットに向かっていているが途中で妖怪に囲まれてしまった。

軍『くう、ここまでか』

仕方ない、最終手段を使うことになるわな

杉「お前ら全員、よく聞け！最後の隊長命令だ！」

軍『?』

みんな、何を言っているのか解らないと言った顔だ

杉「全員、生きろ!!」

軍『!!?』

俺はそういうや否や、軍のみんなとロケットの距離を零にした

次の瞬間には、ロケットが発射した

杉「よし、あとはこいつらを始末すればいいんだな、いくぜ、二刀流劍技、式乃型」
俺の刀に風が集まってくる

杉「風龍劍舞!!」

俺はその場で回転して、竜巻を発生させる。

妖『ぐぎやああああ』

妖怪共は、鎌鼬で斬られている。

杉「よし、止んだな・・・、いくぜ!」

俺は、宙に浮いた妖怪を、斬っていく。

そのあとは、都市から、できるだけ遠くに行けるように全力で飛ぶ

杉（俺の記憶が正しければ、核ミサイルが落ちてくるはずだから、距離をとって、結界を張って凌ぐべきだろう）

俺は、核が見えるとその場で結界を張って、耐える
すると、何かが光ると同時に、俺は意識を手放した

永琳 s i d e

そう、あなたはそういうやつだったわね、みんなを送るために、一人だけ残って…、馬鹿みたい

そんなことを思っていると、突然、智の軍がロケットに入ってきた

永「何で、あなたたちが、ここにいるの？」

軍「それが、隊長は『最後の隊長命令だ！』と言って、我々をロケットに…」

そんな…それじゃあ、もう…二度と会えないの？

永「絶対に死なないって、あいつは言ったわ」

だから、私も精一杯生きよう

また、会いましょう、智

杉本智の設定

杉本智

年齢・・・17歳

高校二年

種族・・・まだ人間

性格：・・・いたって冷静で物事をちやんと客観的に見れる。しかし、妖怪に対して（人間に友好的なもの以外）には、構わずに斬り捨てる。

改心するならば、見逃すやつである。

また、かなり礼儀正しく人の家に世話になるなら何か手伝わないと気がすまないやつ

少々ツンの多いツンデレのようなもの（普段とのギャップがすさまじい）
容姿・・・TOX2の主人公・ルドガーの髪を黒色にした感じ。体は細いが、力はそれなりにある。

瞳の色は、赤色である。身長は175cm、筋肉ムキムキじゃなく、ガリガリというわけでもない

例えるなら史上最強の弟子ケンイチの甲越寺秋雨師匠みたいな感じ

服装・・・TOX2のユリウスの服を黒くして、中に来ている服は、暗い赤色にした感じ。

戦闘スタイル・・・基本的には、なんでも使うが主に刀などの軽い武器を使う。

銃などの遠距離からの攻撃はあまり好まない。

能力を使って、自己流の技を作った。また、ティルズの技を使うことがある

使う属性は炎、水、風、雷、氷、土、光、闇、木である。

能力・・・『ありとあらゆる物を操る程度の能力』

その名の通り操る事ができる。炎や銃、力を込めれば、人も操れるようになる。

しかし、自分より力のない者は力を込めなくても操れる。

霊力と合わせて技を使う。

因みに、生命力と回復力は、大戦が始まると、一分で骨折は治るようになっている。

『ありとあらゆる物を創造する程度の能力』

二次創作にはありがちな、能力。

なんでも創れる。刀や銃、やなども創れる。

智のこの能力は能力も創れるが、目にしか能力を宿すことができない。が、滅多に能力は創らない。

劍技・・・全七属性伍乃型まである智の使う技。(属性順)

『二刀流劍技 壹乃型 龍炎閃』

刀や劍を正面に構えると、刀や劍が炎を纏い、敵が突撃してきた際に勢いを利用して、切り上げる。体を捻って飛び上がり、一気に切り下げる。

『二刀流 壹乃型 龍炎乱舞』

二本の刀に炎を纏わせて、相手に突撃していく。一対一でやる場合は、百回斬りつける。多対一の場合は、突っ込んでいって、斬っていく。相手は斬られた場所から、燃えていく

『二刀流劍技 一乃型 剛風劍』

刀を二本構えると、風が集まってくる。それを、前に押し出す感じで、刀を振ると、台風のような風が発生して、敵を切り裂く。

『二刀流劍技 壹乃型 水月閃』

二本の刀を構えると、水が集まってくる。その刀を振ると、水の刃が出てきて、敵を斬る。刃の形は三日月のような形。

『二刀流剣技 式乃型 風龍剣舞』

刀を構えると、風が集中する。そして、その場で回ると、竜巻がおこる。竜巻の中に入ると、たちまち体中斬られる。そのあと、竜巻の消滅と同時に、空中に浮いた敵を斬っていく。

『全砲門一斉射』

能力で出した、銃系統の武器を前方180度方位に展開して、一斉に発射する。

第二章 諏訪の国編

第一話 都市跡と洩矢

前回のあらすじ

杉「核を投下された。この後どうなるんだろうなあ」

杉「ううん・・・、うぐう・・・、っ！」

ふとしたとき俺は目が覚めた。とりあえず状況整理だな。

杉「ええと、360度見渡しても更地だな、まあ、当たり前か」

それはそうだ、なにせ核が落ちたんだから。まあなんにせよ無事でよかつた。

杉「ううん、このあとどうするかなあ、諏訪子出てくるまで暇だよな。」

とりあえず、都市の場所を見に行こう

杉「やっぱり、何もないか、少しの間だが住んでいたところが無くなるのは、悲しいな……、さてこのあとどうしようかな」

あ、そうだ、寝よう

杉「そうと、決まれば、どっかに手頃な場所はないかなあ」

お、あの洞穴よくないか？よしあそこにしよう

杉「ううん、まずは、かなり薄い壁を作って、洞穴の少し内側に設置して、結界を張つて……、はあ！」

そこで俺の意識は飛んでいった

～数億年後～

？「つつ！なんだろうねえ、今の靈力は・・・、見に行ってみようかな♪」

〈諏訪ノ森〉

？「なんなんだい、この怪しい凹みは？・・・、ちよつと押してみようかな」

そして、私は壁を押した、そしたら

？「何これえ？」

中に結界が張ってあつた

〈智side〉

ん？誰かが、中に入ってきたみたいだな。ううん、そろそろ頃合いかな？俺は封印を解いて、結界を解除したら、目の前に帽子を被った幼女がいた。

杉「お前は、誰だ？」

？「……！貴様こそ、何者だ？こんなところに封印されていて」

杉「ん？俺？俺は杉本智つてんだ」

諏「ほう、そうか私は洩矢諏訪子、この国の神様だよ、で、何で封印されてたんだい？」

何でつて、言われてもそんなもん

杉「自分でやったに決まってるだろ」

他に誰がやるっていうんだろうか

諏「っ！そんなことができるわけがない！」

杉「できるんだよ、それがな」

諏「ふん、貴様のような、貧弱なやつを封印など、私でもできる」

あれえ、なんかムカついてきたよ？

杉「ほう、だったら試してみるか？幼女」（黒笑）

これに乗ったら、まだ弱いな

諏「何だと！誰が幼女だ！舐めるなよ、言っておくが私は崇り神だ、貴様程度は耐えられんだろうな」

杉「そんなことはいいから、さっさと来いよ、幼女神様www」

そんなことを言うと、幼女基、諏訪子がなにか、禍々しい物体を投げつけてきた

俺は、それを危な気なく避ける。

杉「ほらほら、そんなんじやあたらないぜ？もつと来いよ、こないんなら・・・こつちから行くぜ！」

そう言つて、俺は刀を持って、諏訪子に向かって行く

杉「はあ！」びゅん

俺は刀を薙ぎ払う

諏「ほつと」びよん

しかし、諏訪子は跳んで避ける、

杉「ガラ空きだぜ？」

そう言つて、俺はもう一本の刀で斬りつける

諏「くつ！しまった」

諏訪子は避けれずに、少し斬られてしまう

諏「くつ、なら、これでどうだ」

そう言つて、諏訪子は突つ込んでくる

杉「ふう、そろそろいいかな」

諏「うっ！かはっ」

そういうと、俺は諏訪子を気絶させた

杉「さて、気絶させたはいいものの、こいつどうしようかな」

諏訪子のことで迷っていると、草むらの方から一匹の白い蛇が出てきた

杉「ん？お前は、」

ミ『私の名はミジャグジ、諏訪子様には蛇の一匹です』

杉「ん、そうか、じゃあ悪りいけど、洩矢神社ってどこにある？」

ミ『はい、それならこちらに……って、私の声が聞こえるんですか!?!』

杉「ああ、まあ、とりあえず、早くしてくれよ」

ミ「あつ、はい、ではこちらに」

そうして俺は、ミジャグジ様について行った

第二話 洩矢神社

前回のあらすじ

杉「洩矢諏訪子に会って、戦ったよ。そのあとに、ミジャグジ様が出てきて、洩矢神社に行くことになったよ」

く 洩矢神社く

杉「ここが、洩矢神社か・・・、結構でかいんだな」

ミ『それと、あそこに見えるのは、諏訪子様が治める、【諏訪の国】です』
へえ、かなり広いみたいだな

杉「さすがは、崇り神なだけはあるな」

ミ『はい、それもありますが、諏訪子様はお優しい方です。自らの民に崇りなど招かないでしょう』

杉「へえ、ていうか、中に入っていいか？そろそろ疲れてきたんだが」

ミ『あ、はい。どうぞこちらへ』

そうして、俺達は洩矢神社に入っていた

ミ『ところで、疲れてきたって、諏訪子様が重いから・・・』

杉「ノーコメント」メソラシ

杉「ふう、とりあえずはこんなところだろ」

俺は、神社の中に入って、諏訪子を布団に寝かせた

杉「ところでさあ、ミジヤグジ、」

ミ『はい？何ですか』

杉「話があるんだけどさあ、暫くの間、俺をここにおいてくれないか」

ミ『え？そ、そんなことは、私には判断しかねます、諏訪子様に聞かねばなりません』

杉「そっか・・・、じゃあ、起きたら教えてくれ、俺は外にいるから」

ミ『あ、はい、わかりました』

さて、諏訪子がいるってことは、あれから、二億は経ってるってことかな？まだ、焦ってないってところを見ると、まだ、大和からは、文が来てないってことか、杉「さあて、これからどうしようかな」

〈数分後〉

ミ『智さん、諏訪子様が目を覚まされました』

杉「ああ、わかった、今いくよ」

〈洩矢神社・居間〉

諏「ふあああ、ううん、あれ？私何してたんだっけ？」

杉「妙な霊力を感じたから、見に行つてたんじやないか？」

諏「!!お前は！」

杉「おつと、そう警戒しないでくれ、確かにいきなり霊力を解放したのは、悪いと思つてるんだがな」

諏「ちよつと待て、何故、封印されているのに、意識を持つているんだい？」

杉「何でつて言われても、自分でやったから、簡易てきな封印をやっただけだし、その気になれば、出てこれたし」

諏「そ、そうかい、ところd「いい加減口調はずしたらどうだ？威厳とか、ほとんど、感じないから」なんだと、お前、ていうか、私の姿見えてるの!？」

杉「ああ、蛙みたいな帽子を被つた幼女がはつきりとな」

諏「あーうー、そんなあ、私の威厳があ」

そんなんだから、威厳がないんだよwwwまあ、からかうのはここまでにして、本題に入ろうかな

杉「ところで、諏訪子、暫くの間、ここにおいてはくれないか？」

諏「ううん・・・、うん、いいよ、別に、姿も見られちゃつてるしね」

杉「ありがとう、ところで、お前、飯はどうしてるんだ？」

諏「え？食べてないよ？」

なんだと、飯を食ってない？

杉「それはダメだ、飯を食わないと、もしもの時に動けなくなるからな、神だろうが、人間だろうが、関係無い」

諏「じゃあ、どうすればいいの？」

杉「ふむ、少し待っている、台所を借りるぞ」

諏「え？うん、いいけど」

杉「ありがとう」

ということ、台所だ

杉「さて、何を作ろうか、気絶だけとはいえ、起きたばかりだからなあ、よし、お粥だな、よし、作ろうか」

俺は、作業にとりかかる

杉「ふむ、まずは米を洗って、水につける、そのうちに厚手の鍋に水を入れる、そろそろいいかな、鍋に米を入れて、火にかけて、沸騰したら、弱火にして、ふたをずらして一時間待つ」

く 一時間後く

杉「あとは、火を止めて、五分蒸らして、完成！」

杉「よし、諏訪子待たせたな」

諏「?何、それ」

杉「お粥だ、食ってみろ」

諏「う、うん、わかった」

諏訪子は、渡されたお粥を口にす

諏「わあ、美味しい、誰が作ったの?これ」

杉「俺だよ」

諏「・・・本当に?」

杉「ああ、マジだぜ、昔からやってたからな」

諏「昔って、智まだ、18くらいでしょ?」

杉「うーん、まあ、そうだわなあ・・・、そうだ、なんか、文献残ってないか?」

諏「え?この、世界のほとんどが滅んだって言うのだったら」

杉「それって、何年前だ?」

諏「そうだねえ、確か・・・『二億年』ぐらい前のことかな、妖怪と一人の人間が争っ

たって言う人妖大戦って言うのが・・・、まさか」

杉「そのまさかだよ、戦った一人の人間って言うのは、俺のことだ」

諏「そんな、もう二億も前のことなのに・・・」

杉「まあ、そのへんは、今から、話すでしょう、まあ、いきなり大戦の話じゃ、わからないだろう、俺が、そこで生活していた時の話からだな」

こうして、俺は都市での生活のことを話し始めた

智の語り壺 永琳との生活

前回のあらすじ

杉「話をしよう、あれは今から36万・・・、いや、それ以上前だったかな・・・、まあ、いい、俺にとってはつい昨日の出来事だが、お前たちにとっては多分・・・、随分昔の出来事だ」

杉「これは、俺が都市に住むことになってから、二十年が経った頃だった」

智の回想

杉「ふあゝあ、ふう、もう朝か、早いものだな」

俺が永琳と住むことになってからすでに、二十年は経っている。早いものだ

杉「さてと、永琳を起こすかな、あいつ、大人になっても、起きるのは遅いからな」
まったく、世話の焼けるやつだ。

杉「おっと、起こす前に、朝飯を作っておこう、起こしてからじゃ、遅いからな」

今日のメニューは、白飯に魚、味噌汁に野菜だ、結構バランスが良いと思う、さて、起こしにいくかな

杉「おい、永琳！もう、朝だぞ！さっさと起きろ！飯食べちまうぞ！」

永「わかったから、大きな声出さしないで、頭に響くわ」

杉「だったら、さっさと起きろ」

永「ううう、今日は仕事なのに・・・」

杉「なくても、起きないとダメだ、別に寝るなどは言っていない、ただ、寝るんだつたら朝飯を食べてからにしろ、いいな！」

そう言うてから、俺は永琳の部屋から、キッチンに戻ってくる、そのあとから、永琳が眠そうに降りてくる

永「うう、おはよう、智」

杉「ああ、おはよう、永琳」

これが、俺の一日の始まりだった

『それでは、次のニュースです。先日行われた、都市一大会で見事、杉本智選手が優勝しました』

永「あら？これ、このまえのやつじゃないかしら？」

杉「ああ、そうだな、あれは大変だったな」

都市一大会で何があつたかは、後に語るとしよう、

『その時に智選手は、「皆強かった、でも、日々の訓練のおかげでなんとか勝てた」と、コ

杉「さて、そろそろ昼だが、何にしようかな」

今日の昼飯の献立を考えていると、

『p i p i p i p i p i』

杉「ん、何だ、ツクヨミから？」

ツ『私だ、今回こうしてメールをいれたのは、早急に決めなければならないことがあるからだ、永琳に伝えてくれ、よろしく頼む』

杉「なるほど、『月移住計画』についてかな、まあ、いいか、だったら永琳を起こさないと」

俺は、永琳が寝ている部屋に行く

杉「おおい、永琳、起きろ！ツクヨミからメールだ、緊急会議だそうだ」

永「うう、もう、何よ、人が気持ちよく寝てる時にーはあ」

そんなことを言いながら、起き上がってくる

杉「ほら、早く起きろ！ツクヨミのそこ行くぞ！早く支度しろ！」

永「ううー、分かったわよ。」

杉「ほら、早くしろよ」

俺は、居間で永琳を待っている

杉「ツクヨミ、ついさつき、永琳を起こした、すぐにそちらに向かわせる。それと、会議はいつ終わりそうだ？返信求む」

ツ『了解した、それといつ頃終わるかだが、正直よく分からないかなり長引くと思うが、終わり次第連絡する』

杉「OK、了解。」

永「ほら、来たわよ」

杉「おう、じゃあ行くか、ツクヨミのところに」

くツクヨミ邸く

杉「相変わらず、でけえな、あいつの家は」

永「それじゃあ、またね」

杉「おう、またな」

永琳は、中に入って行った

杉「……ふう、久しぶりの一人飯……か、たまには、悪くはないな」
こうして、昼の時間は過ぎていく

夕方

永琳宅 居間

杉「はあ、まだ終わらんのか？もう16：20だぞ、かれこれ、4時間は経過してるぞ」

そんなにもかかるもんなのか？

『Pipipi』

杉「ん？ツクヨミか？えーと」

ツ『会議がたつた今終わった、永琳の迎えを頼む』

杉「おお、やつとか、よしじゃあ、さつさと行くか」

ツクヨミ邸

杉「おおい、永琳ー、迎えに来たぞー」

永「はいはい、ここにいるわよー、それじゃあ、帰りましようか」

杉「いや、このまま食べに行こう、買い物するの忘れてたから」

永「あらそうなの？じゃあ、あそこ行きましよう」

そう言つて、永琳が指差したのは、定食屋だった

杉「そうだな、じゃあ入るか」

く 定食屋く

杉「さて、何を食おうか、」

永「あ、私は、これね」

杉「おう、じゃあ俺はこれだな、すんませーん」

店「はい、ただいまー！・・・、はい、ご注文をどうぞ」

杉「えーと、ハンバーグ定食と、トンカツ定食を一つづつ」

店「かしこまりました、他に何かございますか？」

杉「いや、これだけでいいです」

店「かしこまりました、ではご注文の品がくるまで、どうぞごゆっくり」
店員はそう言うのと、厨房に入っていった

杉「さて、来るまで暇だな、何をしようか」

永「そうね、何をしようかしら」

杉「うーん、考えても出てこないから、カットで！」

永「ねえ、智、カットって何なの？」

杉「気にするな！」

定食が来るまで、カット

店「お待たせ致しました！ハンバーグ定食とトンカツ定食でございます」

杉「きたきた、ほら、永琳」

永「ありがとう」

しばらく、飯を食っていると、ふと気になったので、聞いてみる

杉「なあ、永琳、今日の会議はどんなことを話していたんだ？」

永「!・・・」

杉「どうした？永琳、急に黙り込んで」

永「・・・、いえ、何でもないわ、ただ、内容は誰にも言っちゃいけないの」

杉「そうか、じゃあいいや、いつか、話してくれるんだろ？」

永「ええ、もちろん、いつか、必ず、ね」

こうして、日は沈んでいく

く 就寝前く

く 永琳宅 居間く

杉「さて、今日は色々あったなー、もう寝ようか」

俺は、自分の使っている部屋に行く前に、永琳に声をかけておく

杉「永琳、寝る時はちゃんと、自分のの部屋で寝るんだぞ」

永「分かっているわよ、そのくらい」

杉「だったらいいんだが、じゃあ、永琳おやすみ」
永「ええ、おやすみ、智」
こうして、夜は更けていく

く現在く

く洩矢神社

居間く

第三話 諏訪の国

前回のあらすじ

杉「あの頃は、楽しかったなあ」

諏「そんな事があつたんだね・・・、それでさ、寂しくないの？」

杉「寂しくない・・・、とえば嘘になるな、だけど、別れる時に言つたんだ『またな』って、だから」

諏「そっか・・・、会えるといいね」

杉「ああ、すまないな、暗い雰囲気にしてしまつて」

諏 「大丈夫だよ、それより、国の方は見に行つたの？」

杉 「いや、まだだな、この話が終わつたら行こうと思つていた」

諏 「じゃあ、行こうか案内したげるよ」

杉 「え、いいのか？」

諏 「いいの、いいの、ほら行こう、智！」

こうして、俺たちは諏訪の国へと降りていった

く 諏訪の国 く

諏「ついたよ、此処が諏訪の国だよ」

降りた先は、人々が充実した生活を送っている姿だった

杉「すごいな、みんな幸せそうだな」

諏「そうでしょ？私がかこまでしたんだからね」

そう言つて、諏訪子は（無い）胸を張る

杉「それはすごいな」

諏「でしょ、ほらはやく行こう」

杉「ほら、そんなに焦るなよ、俺は逃げねえから」

はやく行こうと、言つてはしやく諏訪子に声をかけながら、ついていく

く数分後く

杉「・・・、いいところだな、この国は」

諏「うん、神である私でさえ、そう思うよ」

色々見て回っていると、よそ者の俺にも声をかけてくれた、何故かと理由を聞くと、

『諏訪子様と一緒にいるんだったら、この国にいてもいいって事だ』らしいんだが……、
やっぱり皆優しかった、

杉「……主の性格に似ているのかな」ボソツ

諏「ん、何か言った？」

杉「いや、何でもない」

諏「そう？ならいいんだけど、じゃあそろそろ帰ろつか」

杉「そうだな、神社に帰ろるか」

俺たちは、洩矢神社に帰っていった

く 洩矢神社 く

杉「さてと、帰ってきたわけだがそろそろ昼だな」

諏「あれ、もうそんな時間なの」

杉「よし、だったら案内と招いてくれたお礼に料理を振る舞おう」

諏「え、いいの？」

杉「ああ、まあ、不味くはないと思う」

諏「じゃあ、頼んじやおうかな」

杉「お任せあれ、諏訪子様」

俺は、キツチン、基台所に向か・・・えなかつた

杉「ところで、諏訪子、台所はどこにある」

諏「まあ、知らないよね、この部屋を出て左にまっすぐ行くとあるよ」

杉「そうか、ありがとう」

改めて俺は台所に向かつていった

く台所く

杉「さて、何を作ろうか、とりあえずあるもの使うかな」

そう思つて、食材を探すが・・・

杉「あ、そう言えば飯とか食つてないんだっけ？じゃあ、無いか」

どうしようかなあ、仕方ない創るか（食材を）

杉「米に魚に味噌に野菜、こんくらいかな」

え、ワンパターンすぎる？作者に言つてくれ、あいつは料理をしたことがないらしい
んでな

駄（悪いのかよ！）

杉「入つてくるな」

駄（へーい）

ふう、行つたか、あいつが来ると面倒臭いからな

杉「よし、料理が出来るまでカットだぜ」

駄（メタイ話はなしですよ）

うるさいぞ作者、というわけでカットだぜ

〳数時間後〳

杉「よし完成だな」

今回創った、間違えた作ったのは、焼き魚に味噌汁と野菜を少々といった感じの食事だ

杉「じゃあ、持っていくか」

俺は料理を持って、居間に向かった

〳洩矢神社〳

〳居間〳

杉「おーい諏訪子ー出来たぞー」

諏「ホントに!?今いくよ!」

杉「早く来ないと食べちまうぞ「来たよ！」早いな、おい」

はあ、食に目覚めたな、こいつ、そうだ

杉「おい、ミジャグジー」

ミ『何ですか、智さん』

杉「ミジャグジってさ、普段何食ってんだ？」

ミ『そうですね、一週間に一回程猪の肉を食べる程度ですかね』

杉「ふーん、そっか、じゃあちよつと待ってろいいもの持ってきてやる」

ミ『?いいもの、ですか』

杉「ああ、そうだ」

そう言つて、俺は神社の外に出て、森の方に歩いていった

く数分後く

杉「おい、ミジャグジーお待たせ」

ミ『何なんですか、いいものって』

杉「これだよ、これ」

そう言つて、俺は先程獲つてきた猪を見せる

ミ『猪、ですか』

杉「そうだ、これで二週間分だな」

ミ『でも、何故』

杉「飯はみんなで食つた方がうまく感じるからな」

ミ『・・・、そういうものなんですか』

杉「ああ、そういうもんだ」

諏「何してるのー、早く食べようよー」

杉「ほら、諏訪子と呼んでるから早くいくぞ」

ミ『はい、そうですね』

俺たちは諏訪子に呼ばれて、神社の中に入っていった

く 洩矢神社 く

く 居間 く

諏 「もうー遅いよー、何やってたの？」

諏訪子「ご立腹みたいだ

杉 「すまないな諏訪子、ちよつと猪を獲つてたんだ」

諏 「え、なんで？」

杉 「ミジヤグジもなんか食うかなつて思つてな」

諏 「そうなの？あれ、そう言えばたまにいなくなつてどつかに行つてる時あつたけど、

ご飯食べてたんだね」

ミ 『ええ、まあ』

杉 「まあ、そんなことより飯食おうぜ」

諏・ミ 『『そうだね（ですな）』』

俺たちは、三人で飯を食つた……。誰かと一緒に食つたのは久しぶりだな
こうして昼は過ぎていく、さて、次は何しようかな♪

第四話 宴会

前回のあらすじ

杉「あの頃を語り終えた俺は諏訪子に連れられて、諏訪の国を見て回った後昼飯を食べた」

杉「ふう、ごちそうさん」

諏「・・・ごちそうさま」

杉「お粗末様」

諏「・・・ねえ、智一個聞きたいんだけど」

杉「どうした？もしかして不味かったか」（焦）

諏「ううん、美味しかったよ」

杉「？じゃあどうしたんだよ」

諏「何でだろうね、料理なんかやったことないのに自信がなくなっちゃうよ」or z
杉「いや、まあなんだ、諏訪子は料理やったことないんだろ？だったら、今から練習すればいいんじゃないのか俺より旨くなるように努力すればいいさ」

諏「そうかなあ、智って百年は料理やつてるんでしょ？できるかなあ」

杉「できるさ、諏訪子にその気があるのならね……。まあ、その辺は諏訪子の自由だよ」

諏「ううん、もし智が何処かに行ったときにやらなきやいけないし……。うん、やるよ！」

杉「よし、その意気だ！基礎とかは俺が教えてやるからな、それ以上は諏訪子が自分でやるんだ」

諏「うん、わかったよ」

杉「まあ、教えるのはまた後日にして、ちよつと出かけてくるな」

諏「あれ、どこにいくの？」

杉「ちよつとな」

そう言つて俺は神社を出ていった

さてと、大和つてどつちの方角だろうか、行つてみたいんだがな
杉「ん、向こうの方から神々しい気配を感じるなあ・・・。行つてみるかな」

く大和く

というわけで、かなりでかい神社に着いた。多分此処が大和の国なんだろうな

？「む、貴様は誰だ？」

そんなことを考えていると声をかけられた

杉「ん？ただただ、諏訪の国に居座らせてもらっている旅人だ」

？「ほう、諏訪……か、確かアマテラス様たちが今度侵略する国だとか言ってたな」
ボソツ

なんか言ってるが聞こえなかったな

杉「ん、なんか言ったか？」

？「いや、何でもない、それよりも早く帰った方がいいぞ。此処にいる神様たちに見つかれば命はないぞ」

杉「へー、そうなのかじゃあ素直に帰らせてもらうぜ」

そう言つて、俺は大和を去った

く 諏訪 く
く 洩矢神社 く

杉 「おーい、諏訪子ー！ただいまー」
諏 「うん、おかえりー」
杉 「そろそろ夕食だな」

諏 「それなんだけどさ、今日人里で智の歓迎会をしようって話が出てるんだけど……」
杉 「? そうなのか? じゃあ行かなきゃな」

諏 「うん、いつてらっしやい」

杉 「え、何言ってるんだよ諏訪子、お前も行くんだよ」

諏 「……え?」

杉 「前にミジャグジにも言ったんだけどな、一人で食うよりみんなで食う方が旨いで、だからな」

諏 「でも、人里にも人がいっぱいいるし……」

杉 「お前は どうするんだ、諏訪子」

諏 「!!」

杉 「ミジャグジと二人で食う気か? 早くいこうぜ」

諏 「……そう、だね……うん、行こっか!」

杉 「よしきた! というわけで、ミジャグジ、行くぞ」

ミ 『え、私もですか』

杉 「当たり前だ、一人で食事をさせる訳にもいかないからな」

ミ 『はあ、わかりました』

杉 「しゃあ、行くぜ!」

く人里く

というわけで、やって参りました人里着いた時に階段の前で待っていたであろう里の人が話しかけてきた

里「おお、智君だったかな、こつちだ待っていたよ、おや、諏訪子様とミジャグジ様も一緒ですか、これは大いに盛り上げねばなりませんな」

そう言った里の人に諏訪子は驚いている、もちろんミジャグジも

杉「ああ、もう始まっているのか？」

里1 「いやいや、あんたの歓迎会なのに主役がいなくちゃ始まらないよ」

杉 「それもそうか、ほら諏訪子、行くぞ」

諏 「え、あ、うん」

そして俺たちは、集会所に向かつていった

く集会所く

里2 「おお、主役様のご登場だ！」

里3 「なんと！諏訪子様とミジャグジ様も一緒ですか！」

里4 「諏訪子様にミジャグジ様、いつもこの国を守ってくださりありがとうございます」
す

諏 「え、いや、いいよ別に、そんな改まって言わなくても・・・土着神としては当然のことだよ・・・」

里3 「でもどうして、このようなところに諏訪子様とミジャグジ様が？」

杉 「俺が、来てくれて頼んだんだ」

里1「へー、そうなのか、よし！今回の主役にゲストとして諏訪子様とミジャグジ様に来ていただいたんだ！これからこの歓迎会を大いに盛り上げてくぜー」

里一同『よっしやー！ー！！』

こうして、俺の歓迎会、基宴会は始まった

杉「ふふ、こんな大勢で食ったのはいつぶりだろうか」

里2「ん、なんだい智君、そんなしんみりして、どうしたんだい？」

杉「いや、この人たちは俺の正体を聞いたらどういふ対応をするのかなって」

里2「正体？なんなんだい？それは」

杉「そうだな、この歓迎会が終われば話すよ」

里2「そうかい」

それ以上は聞いてこなかった

そして時は流れて真夜中になって、歓迎会は終わった

杉「さて、そろそろかな」

そう言つて俺は、皆の前に立った。

皆が不思議そうにこつちを見ている

杉「俺の話聞いてくれ、これを聞いてどう思うかは、皆の自由だ」

そう言った俺の表情を見て、皆真剣に聞こうとしている

杉「まずひとつ言うと、俺は『不老不死』だ」

里一同『!!』ざわざわ

杉「それと、俺は二億も昔の住人だ」

それから、俺は自分の全てを話した

これを聞いた皆の反応は・・・

里1「そんなことがあったのか・・・、だけどそれがどうしたよ」

里2「そうだけ、俺たちは今のあんたしか知らないんだ」

里3「昔のことをとやかよく言つて、此処を追い出したりはしないさ」

杉「そうか、ありがとう皆」

里1「いいつてことよ、それよりも、さっきまでの気分がなくなつたから、これから、二次会というじゃねーかー!」

里一同『うおおおおお!!』

こうして、皆はまたドンチャン騒ぎを始めて、俺と諏訪子とミジャグジはそれにとことん付き合つた

い
次の日の朝、里の大人たち（男）は二日酔いになり、うめいていたのは言うまでもな

第五話 諏訪の国の日常

前回のあらすじ

杉「里の皆で宴会をした、俺の正体明かしても気にしないってさ、優しいね」

〽宴会から数日〽

杉「ふう、今日も平和だなあ」

諏「そうだねえ」

こんなほのぼのとした会話をしているのは、この俺智と、土着神の頂点洩矢諏訪子である

杉「あの宴会から数日たったが、なーんも起こらんねえ」

諏「その方が良いつてことだよー」

杉「そうだなー」

なんとも緩すぎる人外と神の会話である

駄「覇気がないぞー、諏訪子様に智」

そんなことをいいながら、我等が駄作者が出てきた、でも相手にするやる気もなく
杉「うるさいぞー、駄作者ー」

と、適当な返事をする

駄「俺にいつも厳しい智が罵らない・・・だと」

杉「駄作者も罵りではないのかー」

駄「あ、そうだった、やつぱいつもと変わんねえや」

諏「それはそれでどうなんだろうねえ」

駄「はあ、まあいいや、俺はもう帰るな」

杉「おう、じゃあなー」

そう言つて、駄作者は帰つていった

その直後に俺の手には手紙があつた

杉「ん、これは、ふう、諏訪子ー依頼きたから行つてくるな」

諏「うん、いつてらつしやい」

因みに説明すると、智にきた依頼というのは先日行われた宴会の翌日に智が開いた万屋である。

本来は人里にある家に依頼をしに行くのだが、智はほとんどの時間洩矢神社にいるので、依頼はその家の中にある箱の中に入れてもらい、自動的に智の手にわたるといふもの

杉「まあ、とりあえず依頼主のどこ行くか」

俺はさつそく依頼主がいる場所に向かつた

杉「すみませんー、依頼を受けた万屋のものですが」

主「おお、来てくださいましたか、どうぞ、中へ」

杉「はい、では失礼します」

主「どうぞ、お茶」

杉「いえ、お構いなく、それで依頼の詳しいことを」

主「はい」

く女性説明中く

杉「なるほど、では早速行ってみますか」

そうやって俺は、依頼主の家を後にした

く国の外れの森く

杉「情報によるとこの辺だよな・・・ん、あれは」

俺は見つけたものの場所に行った

そこでは、妖怪が三人の子供を食おうとする瞬間だった

杉「！あれか、まずい！」

俺はそこに全速力で向かった

妖「な、なんだてめえは！」

杉「お前のようなやつに教える名など無い。よーしお前等もう大丈夫だぞ」

子1「に、兄ちゃん」

子2「怖かったよう」

杉「おいおい、泣くなよ男だろ」

子3 「お兄ちゃん」

杉 「大丈夫だから、なお前等は今は寝てろ」

そう言つて、俺は久しぶりに使つた能力で三人の眠気を操つた

三人は微睡みの中に落ちていく

妖 「おい、てめえそいつ等との別れ済みましたのか？」

杉 「待つててくれたのか随分優しいんだな、まあ別れる気なんて毛頭ない」

そう言つて、俺は刀を創る

妖 「なんだい、やろうつてーのかい」

杉 「行くぞ」

妖 「こいよ」

その妖怪の言葉で戦闘が始まった

先手は俺から、俺は妖怪に近づき刀を振る

妖 「こんな攻撃当たらねえーよ」

しかし、妖怪は跳んで避ける

だが俺の攻撃は終わつちやいねえ

俺はそのまま刀を上に向ける

妖 「な、なんだと」

妖怪は驚いたが、体を捻り致命傷を避ける

妖「へへへ、今度はこつちから行くぞ」

妖怪は接近してきて、パンチをしてくる、しかし

杉「遅いな」

そう言つて、俺は紙一重で避ける

妖「なんだと！」

妖怪は驚いたがすぐに蹴りを入れようとする

俺はそれを刀で防いだ

杉「ふふふ、今度はこつちから行くぞ」

俺は刀を納刀して、腰を低くして構える

杉「杉本流剣技 式乃型」

そう言つて、俺は妖怪に近づき、

杉「炎龍神斬」

刀を抜刀して妖怪を斬る

妖怪は避けられなかったのか腹に赤い筋が走り、液体が噴出する

妖「ぐはあ、くそ！痛えじゃねえか」

杉「ふう」

俺はそのまま妖怪に背を向けて人里の方に歩き出す

妖「なにやっつてんだよてめえ」

杉「帰ろうとしてるんだ、決着は着いた」

妖「まだ勝負は」

続いている、その言葉は聞こえなかつた何故なら、斬った所から炎が出てきて妖怪を焼きつくそうとしているからだ

妖「うぎやあああ、な、なんだこれは」

杉「俺の技、炎龍神斬は斬った所から炎が出てきて対象を焼きつくすまで消えないんだ、じゃあな」

妖「があああああ！」

俺はそのまま振り返らず人里に帰っていった

く人里く

杉「すみませーん、子供たちを連れて帰ってきました」

主「おお、本当ですか!？」

杉「ええ、本当です、ほら起きろ」

子『ううん』

主「ああ、よく無事で帰ってきた」

杉「ほら、お前等、起きて自分のうちに帰るんだ」

子2・3『はあい』

よし、そろそろ帰るか

杉「じゃあ、俺はそろそろ帰りますね」

主「は、はい！ありがとうございます！」

杉「いえいえ、俺は依頼を遂行しただけですよ」

俺はそのまま洩矢神社に帰っていった

く 洩矢神社 く

杉「おーい、諏訪子ー帰ったぞ」

諏「うん、おかえりー」

ミ『あ、智さん、おかえりなさい』

杉「お、なんだミジャグジも一緒か」

ミ『はい、つい先程』

杉「ん、そっか、じゃあそろそろ飯にするか、二人とも」

諏「そうだね」

ミ『ええ、そうしましょうか』

これが、諏訪の国の一日である

さて、次はどんなことが起きるのでしょうか、それは神のみぞしることである

第六話 宣戦布告

前回のあらすじ

杉「万屋の仕事して子供を救出した」

おつす、俺杉本智、今日も平和ですることがない

杉「はあー暇だ「大変だよー智ー！」平和は続かなかったでござる」
俺は叫んだ諏訪子のもとに向かった

杉「どうしたんだ、諏訪子」

諏「智ーこれ見てよ」

と言つて、文を渡してきた

杉「えーと何々……！これは」

文の内容はこうだ、

『貴様らに選択肢をやる』

1・『戦争をせず国を渡す』

2・『洩矢神の消滅』

の二つだ、よく考えて決めるんだな』

というものだ、

杉「………」(黒笑)

これを見た俺は多分笑つていたと思う

諏「ねえ、智どうしよう」

杉「ちよつと待つてろ、大和の神々ぬつ殺してくつから」

諏「え」

杉「冗談だ、ちよいと交渉(物理)をしにいくからな」

諏「え、そんな危ないよ！相手はアマテラスもいるんだよ！」

杉「大丈夫、心配するな、じゃあ行つてくるな」

諏「え、ちよつとまってy」

俺は諏訪子の静止の言葉を聞かずに大和に向かった

く大和く

俺は今大和に来ている

杉「おい門番さん」

門「ん、お前はあの時の今日は何しに来たんだ」

杉「いや何、ちよいと交渉（物理）しに来たんだよ」

門「ほう、そうかだったら入れ、一番奥の部屋に皆いらっしやるから」

杉「おう、サンキュー」

俺は大和の神社に入っっていった

く神社く

杉「ヒヤッハー」

俺は叫びながら、神の集まる部屋に飛び込んだ

神『!!』

杉「おい、アマテラスってーのはどいつだい」

ア「それは私ですが、一体何ようで」

と、問いかけてくる

杉「諏訪のものなんだが、」

ス「ああ、あのちっちゃくて弱い国の、何しに来たんだよ」

杉「いえ、少しこの文に不満がありました」

神Ⅰ「不満ってなんなんだよ」

杉「いえ、選択肢がどちらもあなた方のもになると言うものしかありませんが」

ス「そのどこが不満だって言うんだよ弱い国に選択権なんてないんだよ」

うわー、ちよつとイラツと来たなーでも我慢だ

神Ⅰ「ははははははそうですねースサノオさん」

ア「やめなさいあなたたち」(笑)

おい、アマテラス、顔がにやけているぞ、もう怒つてもいいよね

ス「ああ?どうしたんだよ、人間」

杉「そろそろ我慢の限界だぜ、容赦はしない」

神Ⅰ「ああ、何言ってるんだよ」

杉「貴様らに命はないと言っているんだ」

神々『・・・ぷつ、あははははははは』

俺が言った時に神は一斉に笑い出した

ツ「何をしているのですか?皆さん」

ス「ああ、ツクヨミか、いや弱い諏訪の方から来た人間が俺たちを殺すとか言つてきてよ」

ツ「はあ、そうなんですかそれで、その人間は」

ス「あつちだよ」

ツ「え」

そう言つてスサノオが俺の方に指を向ける。するとツクヨミは驚愕の声をあげる

ツ「智！」

杉「ああ、誰かと思えば、ツクヨミじゃねえか」

ア「何ですか、ツクヨミ知り合いですか？」

ツ「ええ、遠い昔私達を……都市を救つてくれた私たちにとっては英雄のような存在です」

ス「なっ！そいつはもう死んだはずじゃあ」

杉「残念、生きてるんだなあこれが、でどうすんだい勝負は」

ツ「勝負？」

杉「ああ、ツクヨミお前は関係無いぜ。俺はこのくずどもに味あわせるだけだよ、敗北の悔しさを、な」

そう言った後、俺は今出せる靈力を全開にした

ス「っ！なんだよこの靈力は」

ア「常人よりかなり多い!?しかし私たちに比べれば」

ツ「?智、二億年前よりも衰えてないかい」

杉「ああ、それはまた後でつてことで、さて貴様ら覚悟はいいか?」

俺はそう言つて、神Ⅰに殴りかかる

神Ⅰ「ぐはっ!」

神Ⅰは避けることができずに、顔に食らう。

神Ⅰは気絶した

杉「なんだよ、呆気ないな、なあスサノオさんよーかかつてこいよ」

ス「くっそ、調子にのんじやねえぞ人間!」

スサノオは殴りかかってくるが、

杉「本気かいそれが、遅すぎるよ」

俺は避けて、挑発する

ス「んだと、この野郎」

スサノオは挑発に乗つて、動きが単調になる

杉「人間だからつて甘く見てると痛い目見る、よつと」

スサノオの攻撃を避けて、靈力で強化した拳を腹に沈める

ス「く、がはあ」

スサノオは倒れる。それに焦ったアマテラスは大量の弾幕を張る

杉「隙間空きすぎだし、周り考えてないで、それにさ」

俺は他の神がいるにも関わらず弾幕を張るこいつに怒りを覚え、うっかり第一の封印を解いてしまった

ア「なっ!? こ、これは」

アマテラスは驚いている。当たり前ださつきまで自分よりも下だった人間に攻撃を

『消されたのだから』

? 「どうされたんですか!？」

この騒動を聞きつけてやって来たのは『八坂神奈子』だった

神「な、なんなんですかこれは! アマテラス様」

ア「神、神奈子! ここにいる人間をさつきと追い出しなさい!」

杉「てめえ、少し黙ってろ」

ア「うっ、かはっ!」

俺はアマテラスの顔を踏みつけて、黙らせた

神「ツクヨミ様、彼は一体」

ツ「私の・・・古い友人だよ」

神「友……人？」

神奈子は俺に目を向ける

杉「お前は八坂神奈子かすまないな騒がせてしまつて」

神「いや、何故お前はこんなことをしたんだ」

神奈子は警戒している、自分より格上の神たちを倒した俺を

杉「そうだなあ、強いて言うならこいつらが俺の逆鱗に触れた、ただそれだけだ」

神「逆鱗？」

杉「ああ、諏訪の国を侮辱し、自分の味方であるはずのツクヨミやスサノオたちのいるこの部屋で、弾幕を張ったことだ」

神「そうかい、だがそれでもここまでする必要はなかったんじゃないかい」

杉「そうかもな……突然だがお前に問うお前は戦争をして、相手が降伏したら攻撃をやめるか」

神「？それはそうだろう？」

杉「そうか、悪いな変なこと聞いて」

神「いやいいよ、こちらこそすまなかつた」

杉「？何のことだ？」

神「アマテラス様たちの無礼の対してだ」

杉「別にお前が謝らなくていいだろ」

神「それでも、上司の失態は部下の責任だ」

杉「そうか、だったら今度の諏訪との戦争については代表同士の一騎討ちにしたいいだが」

神「よし分かった、この人たちにも言っておこう」

杉「よろしく頼む、此方からは洩矢神が出る」

神「ならば此方からは私が出よう」

杉「分かった伝えよう、それとツクヨミ」

ツ「！何だ」

杉「・・・永琳は元気か」

ツ「ああ、元気にしているよ」

杉「それは良かった、じゃあ俺は帰るぞそれと決闘の場所は諏訪と大和の間にある広場でもいいか」

神「ああ、分かった良いだろう」

その答えを聞いてから俺は諏訪に帰っていった

〽諏訪〽
〽洩矢神社〽

杉「諏訪子ーただいまー」

諏「さーとーしー!」

俺が帰ったと伝えたら諏訪子が飛び付いてきた

杉「おわ！どうしたんだ、諏訪子？」

諏「だって、智が、帰ってくるの、遅いから」

杉「大丈夫だ、俺が簡単にくたばると思うか、それと諏訪子、報告だ」

諏「何？」

杉「交渉の結果、戦争は避けれたが戦いは避けられなかった」

諏「ううん、戦争じゃないだけましだよ」

杉「それで、戦いの内容は諏訪子と向こうの八坂神が戦うことになった」

諏「え、ええええええ!!」

いよいよここまでできたか………諏訪大戦は近いぞ

第七話 神と人の修行・一

前回のあらすじ

杉「大和の神々皆殺し」(過剰表現)

〽一日目〽

杉「諏訪子、今のお前じゃ八坂神には勝てないだろう」

諏「じゃあ、どうすれば」

杉「だから、俺がお前に修行を課す」

諏「修行？」

杉「俺が都市の軍でやってた修行だかなりきつかったが神であるお前にや簡単だろうな」

諏「なんなのその修行って言うのは」

杉「こつちに来い」

俺と諏訪子は外に出た

諏「何するの」

杉「先ずは結界を張って、その中に諏訪子が入って360度全方からの攻撃を避け続ける」

諏「うんわかった」

諏訪子は結界の中に入っていった

杉「準備はいいか」

諏「大丈夫だよ」

杉「じゃあいくぞ！スタート」

まずは小手調べと言わんばかりの少し少ない弾幕が出てくる

諏訪子は危なげなく避ける

諏「こんなものなのー」

杉「徐々に上がっていくからな」

諏「ふーん」

この弾幕は難易度で言うときペリーイージーだな。

一瞬弾幕が止まり、先程よりも少し多い弾幕が展開される。これはイージーだ

諏「まだまだ余裕だね」

諏訪子は余裕そうに避けていく

杉「結構できるな」

これはひとつの難易度ごとに五分の間弾幕が展開される

杉「ああそうだ、諏訪子ー因みに言うと被弾回数は三回だぞー」

諏「了解だよー」

とまた一瞬弾幕が止まり、新たな弾幕が展開される。ペリーイージーよりも結構増え

たノーマルモードだ

諏 「あれ、さつきより結構増えたね」

杉 「あと三段階変わるからな」。

最高難易度はかなり難しいぞ」

諏 「へーそうなんだ」

諏訪子は避けているがたまにかすっているものがある

杉 「おおい、諏訪子ーお前の実力はそんなもんなのか」

諏 「もうーうるさいなー静かに見ててよー」

諏訪子が怒っていると弾幕が止まって、新しい弾幕が展開される。

これはハードだな

ノーマルよりも結構増えている

諏 「わわわ、結構増えてきたね」

ハードの弾幕はかなり多いが隙間はまだまだある

杉 「ふふふ、そろそろ辛くなってきたかな？」

諏訪子は避けているが、かなりかすってきている

諏 「ふっ、よっ、ほっ、うわっ」

かなり危ないな、今のままじゃハードが限界だな

諏訪子が避けていると弾幕が止まる

諏 「はあはあ・・・」

諏訪子はかなり疲れているが、弾幕は難易度を上げて展開される。この弾幕はベリ―

ハードだ

弾幕の隙間は人が一人通れるくらいのものしかない

諏 「うっ、イタっ、うわああ」

諏訪子が三回被弾して結界が解除される

諏 「はあ……はあ……はあ」

杉 「どうだ、諏訪子」

諏 「うう、これより上があるの？」

杉 「ああ、これより上のルナティックって言うのがある」

諏 「そんない」

杉 「今日はここまでしつかり休んどけよ、飯は作つといたから」

諏 「あれ、智は？」

杉 「俺は少し用事があつてな、すまん」

諏 「いや、いいよ」

杉 「ありがとな」

そう言つて、俺は大和の方に飛んでつた

く大和く

杉「おーい、門番さーん」

門「ん、なんだ、あんたか、用件はなんだ」

杉「神奈子、いないか？」

門「ああ、神奈子様なら庭で修行していらっしやる」

杉「おお、さんきゅー」

庭か、まあ神奈子の神力が感じられる場所にいけば良いのかな

く庭く

杉「お、いたいた、おーい神奈子ー」

神「ん、誰かと思えば、昼前の人間じゃないか」

杉「そう言えば、まだ名前言ってなかったな、改めて俺は杉本智だ」

神「ほう、では私も、もう知っていると思うが『八坂神奈子』だ」

杉「おう、よろしく」

神「こちらこそよろしく頼む」

杉「それと、昼前に言つてなかつたことがあつてな」

神「ん、なんだ？」

杉「敗北時に課せられる罰と時間だ」

神「ああ、そう言えばそうだったな」

杉「敗北時に課せられる罰はこつちは信仰を七割五分譲渡する、そつちは二度と戦争を仕掛けてくるなど言うものだ」

神「七割五分？全部じゃないのかい？」

杉「ああ、全部じゃない理由はうちの神様が随分とお優しい方でな、その優しさに触れたものたちは、絶対に信仰を変える気はないだろう」

神「じゃあ七割五分つて言うのも無理なんじゃないのか？」

杉「そこはいろいろ工夫を加えるんだがそんなときに決める」

神「なるほど、いいだろうそれで時間は」

杉「ありがとう、時間だが一ヶ月後というのはどうだろう」

神「それはなげだい」

杉「お前は軍神だろ、だったら決闘がすぐに終わつちやあ面白くないだろ」

神「それは確かに、了解した」

杉「それと、決闘中は手出し無用、もちろん両国の人里にもな」

神「当たり前だな」

杉「そういうことだから、手は出すなよ、クズ神諸君？」

クズ神『!!』

ス「お、おい気づかれてたぜ」

ア「し、仕方ありません、一旦逃げましょう」

神たちが離れていくのがわかる

杉「あと神奈子」

神「なんだ？」

杉「あいつらに伝えといてくれ『ルールを破れば俺がぶっ飛ばしに行く』ってな」

神「ん、わかった知らせておこう」

杉「じゃあな」

神「ああ、またな」

こうして俺たちの相談は終了して、俺は神社に帰っていく

杉「おーい、諏訪子ー、帰ったぞー」

諏「うーん、おかえりー」

杉「諏訪子、結構重要な話がある」

諏「重要な話？」

杉「ああ、実はさつき大和に行つて、あることを決めてきたんだ」

諏「へーそうなんだー、つて、大和に行つた!？」

杉「ああ、決めてきたことは、負けたときの罰と時間と場所だ」

諏「無視しないでよー、まあいつか、それで?」

杉「ああ、まず負けたときはこちらは信仰を七割五分向こうに渡すことになる」

諏「へーつていうか七割五分?全部じゃないの?」

杉「それは向こうにも聞かれたよ、まあ説明めんどくさいから割愛つてことで」

諏「それで、向こうは?」

杉「ああ、こちらに二度と戦争等のことをさせるなというものだ」

諏「軽いんだね」

杉「ああ、ホントは俺の手で肅清してやろうと思つたが………それじゃあ、さらに恨みを買つて、また来るかも知れないからな」

諏「それはそうだよね」

杉「後場所を伝え忘れてたんだけど」

諏「うん、どこでやるの?」

杉「諏訪と大和の間にある広場だよ」

諏「へーあそこでやるんだー」

杉「まあそういうわけだからよろしく」

〽二日目〽

杉「あーたーらしーいーあーさがきたーきーぼーうのーあーさーだーというわけで

訪子「あーさーだーぞー」

諏「ううう、もうちよつと寝かせてよー」

杉「別にいいけど朝飯には起きてこいよ？じやないと飯抜きだからなー」

諏「わかったー」

本とにわかつてるんかねえ、マジで抜きにしてやろうかな……いや今日の修行に支障が出たら不味いしやめとくか、まあ飯前にもう一回起こして起きなかつたら抜きだな
杉「しやあ飯作るかー」

く数分後く

杉「よしできたな、諏訪子は……まだ起きてないか……しやあない起こしに行くか」

く諏訪子の部屋く

杉「おーい、諏訪子ー早く起きろよー」

諏「うう、わかったー」モゾモゾ

杉「起きたんならまずは顔洗ってこい」

諏「はあーい」

杉「まったく、いつもこんな調子だからなー……………そろそろ自立させるべきかな？
まあその辺は後にして目の前の問題だな」

そう言つて居間に行つた

諏「さーとしー、ごはーん」

杉「はいはいわかつてるからちよつと待て」

諏訪子はあるの日から食に目覚めたらしく、かなり食うようになった。諏訪子曰く『智の料理は美味しいから食べれる』らしい、俺より料理が美味しいやつなんて一杯いるだろうに

杉「ほら、諏訪子」

俺は茶碗に盛つたご飯を渡す

諏「わーい、智のご飯は美味しいもんねー」

杉「なあ諏訪子、俺よりご飯が美味しいやつなんか一杯いるだろ？」

諏 「それでも私の中の一番は智なの♪」

杉 「そうか、まあそれはそれで嬉しいかもな、と諏訪子」

諏 「ん？何？」

杉 「朝食食つて一時間休憩してから修行に入るぞ」

諏 「ふぁーい」

杉 「口にもものを入れながら喋るな」

諏 「んぐ、うんわかったよ」

く一時間後く

杉 「よし、諏訪子、修行を始めるぞ」

諏 「よっしゃー、どーんとこーい」

杉 「まあ、まずは外周だな」

諏 「うえー」

杉 「ほらほらぐずぐず言つてないで早くいくぞ」

そう言っただけ俺はさっさと走りに行く
諷「あ、待ってよー智ー」

〳二時間後〳

杉「ふう、少し休憩だな」

諷「はあ……………はあ……………ふう」

杉（うーん、そろそろ慣れてきたかな？でもまだ息上がってるしなあ、できれば一周は持つてくれないとなあ）

諏 「はあ………ふう、よしもう大丈夫だよ智」

杉 「ん、早かったなもう少しかかるかと思っただが」

諏 「まあ、それでも神様だしね」

杉 「まあその辺は置いて、修行に入るぞ」

諏 「うん」

杉 「よしとりあえず諏訪子」

諏 「何？」

杉 「弾幕出してみろ」

諏 「弾幕？何それ」

杉 「まあ、神力で作った弾を作ってみろ」

諏 「う、うん、わかった」

諏訪子はそういった後に白色の丸い球を出した

杉 「お、出たなそれをー………そうだなあ、諏訪子あそこにある岩に飛ばしてみろ」
俺は十数メートル先にある岩を指してそう言った

諏 「うん、わかったー。よし、いっけー！」

諏訪子は岩に向かって弾幕を投げた！………。

しかし、岩まであと五、六メートルくらいところで消えてしまった

諏 「あれ、なんで消えちゃうの？」

杉 「うーん、まあ予想通りだな、これは」

諏 「?なんで予想通りなの？」

杉 「んん、ああ諏訪子ってさあんまり戦争はしたことないだろ?だからこういうのは慣れてないんじゃないかと思っただけ」

諏 「ああ、なるほどねえ・・・っていかじやあどうすればうまく形を保ちながら飛ばせるようになるの？」

杉 「それができるようにするには力の操り方を知ることが必要だ」

諏 「その操り方って？」

杉 「まずはさつきみたいな弾を出してそれを十分キープさせろ」

諏 「そのあととは？」

杉 「その後、二倍していつって言うのが修行のやり方だ、一個なら二個、二個なら四個ってな感じでな、まあとにかくやってみろ」

諏 「わかった、えっとさつきみたいなのを十分保てばいいんだよね?よしやるぞー」
諏訪子は手のひらに弾を作って、形を維持するのに集中している

杉 (そんなに集中していると戦闘では使えないんだけど……まあ、初めてだからいいか)

諏「……………」

杉（それでも集中し過ぎだがな、俺でもこんな集中しなくても維持できたな）

～十分後～

杉「おーい諏訪子ー、そろそろ十分だぞ」

諏「……………」

杉「……………はあ」

俺は呼んでも反応がない諏訪子に近づいて……………

杉「おい、諏訪子！聞け！」

耳元で少し強めに諏訪子を呼んだ

諏「うわあ！もう、ビックリしたじゃん！」

杉「呼んでも返事をしないお前が悪い」

諏「え、いつ呼んだの？」

杉「さっき耳元で呼ぶ前にだ」

諏「あーうー、気づかなかったよ」

杉「集中するのはいいが、周りが見えないくらいまでするのはいけない」

諏「うん、今後気をつけるよ」

杉「よしじゃあ続けるぞ次は二個作って三十分だ、頑張れよ」

諏「よし、頑張るぞー！」

↳ 数時間後 ↳

諏「はあ……はあ……はあ、結構疲れるね、これ」

杉「まあ、これは俺も初めてやった時はかなり疲れたからな、それよりも諏訪子飯ができてるぞ」

諏「わかったー」

杉「そうだ、諏訪子、神力弾何個できた？」

諏「うーん、分かんない多分五千個くらいじゃないかな」

杉「へえ、けっこうできたじゃないか、神力は多いみたいだな」

諏「えへへ、国のみんが信仰してくれてるおかげだね」

杉「そうだな、その神力は国の民たちの信仰、はじめは諏訪子の崇りを恐れて信仰しているのだと思っただが、

民たちの反応を見てそれは違うと思っただよ」

諏「? どういうこと?」

杉「諏訪子がかもし崇り神を信仰しているとして、その崇り神が里に降りてきたらどういう反応をする?」

諏「うーん、よくわかんないけどあんまり友好的にはいかないね」

杉「そうだろう、しかしこの国の民たちは諏訪子にたいしてかなり友好的だった、

それは諏訪子が今まで国のためにやって来たであろうことがあったからこそだと思
うんだ」

諏「……………なんか、その、自分ではそういうのは気づかないけど、人に言われる
と、なんか恥ずかしいね」／／／

杉「くくく、ほらほら飯にしようかはやくこい」
諏「わかったー」

夕食時

諏「そう言えばさあ、智って私が修行してるとき何してるの？」

杉「ん？神社の裏で修行してるが……」

諏「え、そうなの？全然音聞こえないんだけど」

杉「そりゃあ、土人形と木人形作って、そいつらの攻撃を避けたりしてるだけだからな」

諏「ふーん、そうなんだー」

杉「で、それがどうかしたのか？」

諏「いや、あのねもしよかつたらだけど、その修行見せてほしいなあ、なんて……」
杉「……別に見てもおもしろくないだろうに」

諏「それでもいいんだよ、まあ本音を言うと言つてどんな動きをするのかなって戦闘の時とか私ほとんど相手になってないし」

杉「はあ、いいぞ明日の昼にでも見せるとしよう」

諏「ホントに！ありがとう」

早く明日にならないかなあ、と嬉しそうにしている諏訪子を見ながら、

明日の人形の動きはどうしようかと悩んでいると諏訪子は食べ終えたのか寝る準備

をしている

杉「さて、俺も寝るか」

明日の人形の動きを考えながら床についた

第八話 神と人の修行・二

前回のあらすじ

杉「人形を創れるようになったのに百年はかかったのは内緒」

〽三日目〽

杉「朝だ、今日で三日目確か今日は諏訪子に俺がやつてる修行見せるんだっけ？」

うーん、人形の動きはまだ決めれてないんだけど、まあいつかその時に決めればいいか
杉「さて、飯作つてから諏訪子起こしにいくか」

今日の朝飯は何にしようかな、卵使つたやつにしよう、そうしよう

卵というと目玉焼きかな？ そう言えば俺は面倒くさいからほとんどシーチキンかお茶漬けにしてたからな。この世界に来てそうはいかなくなつたけど

杉「まあ、考えてても仕方ないしさっさと作るか」

く 台所く

杉「料理の場面はカットだぜ！ 書いててもつまらんからな」

ん、俺は今何を喋っていた？ まあいいか

杉「さてと、そろそろ諏訪子を起こしに行くか」

たくつ、諏訪子も自分で起きろよなあいちいち部屋にいくの面倒なんだよな、と心の中で愚痴をこぼしながら諏訪子の部屋に向かった

杉「おーい、諏訪子、朝だぞー、さっさと起きろよー」

と言いながら部屋に入る

諏「あ、智おはよう」

杉「なんだ、起きてたのか、飯ができているぞはやくこい」

諏「うん、わかった」

さて、料理居間に運ぶか、俺は台所に向かった

杉「さあさあ、諏訪子の修行に入るぞー、と言いたいが今日は俺がやっている修行を見せるんだつたな」

諏「あ、そう言えばそうだったね」

杉「なんだ、忘れていたのか？」

諏 「い、いや、勿論覚えていたよ？」

杉 「何故に疑問形なんだ？」

諏 「ま、まあいいじゃん、早く見せてよ」

杉 「はいはい、じゃあついてこい」

杉 「さて、ここで俺はいつも修行をしている」

諏 「え、そうなんだ」

そこは、神社の庭であつた

杉 「じゃあ、早速やるが、離れているよ？危ないから」

諏 「離れるって、どのくらい？」

杉 「そうだなあ、神社の屋根に上つといてくれ」

諏 「ん、わかつた」

諏訪子が屋根に上つたのを見てからゴーレムを召喚するための詠唱を始める

杉「汝、私の命令に従い、今この世に姿を顕せ！ 召喚、ファイアゴーレム！」
俺がそう唱えると、数メートル離れた場所に魔法陣が現れ、そこから二メートルくらいの炎に包まれた、ゴーレムが出てくる

〈三人称 side〉

杉「さあ、始めるぞ！」

智がそう言ったと同時に両者が動き出す

まずは、僅かに動きだしが速かったゴーレムの攻撃

その炎に包まれた腕を振りかぶり、智に振り下ろす

しかし、智は当たる直前に腕に水を纏わせ、受け流して、カウンターを入れる

受け流した方とは逆の腕にも水を纏わせて殴る

ゴーレムは、振り下ろした直後の状態なので避けることができずに、攻撃を食らう

智のパンチが当たった部分は炎が消えたが、一瞬にして元に戻ってしまう。しかしダ

メージはあったのか少しよろめいたあと体勢を立て直した

杉「さあ、今度はこっちからいくぞ」

智がそう言うのと、能力で創った刀に水を纏わせ、斬りかかるこれに対して、ゴーレムは横に体を反らして攻撃を避ける

智の攻撃は空振りに終わる

刀が地面についたと同時に刀を離してその場を離れる

飛び退いた瞬間、ゴーレムの拳が智の居た場所に突き刺さる

飛び退いていなければ、かなりのダメージが入るだろう

杉「ふう、危ない危ない、危うくペしやんこになるとこだった」

そう言った智の額に冷や汗が浮かんでいる

次はゴーレムの攻撃

ゴーレムは突き刺さった拳を抜いて、智にタツクルを仕掛ける、左の肩から炎を噴射させて、スピードをあげている

智は避けることができずに、当たってしまった

杉「だあく、くっそ！あつついなあ！」

智はそう言いながら、刀を創りゴーレムに斬りかかる

しかし、ゴーレムは掌から炎を噴射させて攻撃を回避したのち、足から炎を噴射させて、頭から智に突進する

これに当たった智は吹き飛ばされて、結界の端まで飛んでいき、ぶつかって止まる
そこに、ゴーレムのトドメの一撃が飛んでくる

ゴーレムの掌から出た炎の弾が智に当たり、勝負が決する

〈智 s i d e 〉

杉「ふう、もういいぞ戻れ、ファイアゴーレム」

その言葉を聞いて、ゴーレムは魔法陣の中に消えていった

杉「はあ、勝てなかったかあ、あのゴーレム、見た目のわりに早いなあ」

諏「おい、さーとしー、大丈夫ー？」

諏訪子が俺の安否を確かめに降りてくる

杉「おう、大丈夫だぞー」

と返しておく

杉「さてと、よし諏訪子今日の修行はこれにて終了、明日に備えて寝ろ」

諏「え、どうして？」

杉「俺が疲れたのと、今からやってもあまり時間はとれないと思ったから」

諏「あ、そうだね、ごめん」

杉「いや、いいさ………、よし、諏訪子昼飯を食おう、そのあとに俺の昔話を聞かせてやるよ」

諏「え、ホントに!？」

杉「ああ、こんときくらいしか話す機会ねえしな」

諏「ねえねえ、今度はどんな話を聞かせてくれるの？」ワクワク

杉「そうだなあ、人妖大戦の語られなかった部分だな」

諏「何それ？」

杉「諏訪子は、その話誰から聞いたんだ？」

諏「え、いや、竜神様だけど」

杉「そうか、じゃあその竜神が語られなかった部分を話そう」

そうやって、俺たちは神社に入った

智の語り式 人妖大戦・裏

前回のあらすじ

杉「お前、俺様、丸焼きに」

杉「さてと、どこから話そうか」

そうやって、あのときのことを懐かしむように語り出す

〽古代 人妖大戦中〽

杉「おい、お前ら大丈夫か!？」

軍1「あ、杉本隊長!今のところ問題はありませんが、いつ誰が殺られるか……」

杉「そうか……」

それを聞いた俺は

杉「よしわかった、俺もここで戦おう部下が死ぬのは嫌なんだな」

軍「そんな、隊長！あなたは我々のことは気にせず口ケツトに乗ってくださいよよかったのに……………」

杉「馬鹿野郎、俺はこの隊の隊長だ、こういう場では隊長が部下を守らずにどうする、もしもこのまま口ケツトに乗って月に行っても俺は楽しく生きれない気がするんだ、だから……………みんなで絶対生きて帰るんだぞ！」

軍「た、隊長……………了解です！」

杉「よっしゃあ！逝くぞ、てめえらあ！」

軍『おおおおおおおおおおおおお！！！！』

俺の鼓舞で隊全体の士気が一気に上がる

そんな中、刀を二本構えて最前線を走る俺は、仲間を信じて技を放つ

杉「いくぜ！二刀流劍技 壱乃型 雷龍斬衝！」

これは雷の属性を刀に纏わせ斬撃の衝撃波を飛ばし痺れさせる技だ

杉「おらおらおらおらおらおらおらあああ！」

この技は連発が可能なのだ

妖『ぐがああああああああ』ビリビリ

当たらなかつたやつは俺に向かって飛び付いてくるが

妖『があああああ!?!』

飛び付いてきたやつから、消し飛んでいく

杉「ナイスだ、お前ら」

軍1「隊長が俺らを守るんだったら」

軍2「俺たちは隊長を守り抜きます!」

杉「ふつ、頼もしい限りだ

なら安心して背中を預けれるぜ

いくぜ、二刀流劍技 壱乃型 凍結四散」

この技は片方の斬撃に当たると文字通り凍る

そしてもう片方の斬撃を当てると碎け散る

それを痺れているやつらに当てることにより確実に殺れる

軍1「すごい」

軍2「隊長、強すぎる」

杉「驚くのは早いぜ? (ホントは中世ヨーロッパまでとっておきたかったが) ……………

まあいいだろう……………お前ら! ちょっと離れてるよ! 今からすっげえのやるか

ら」

そういつた俺の回りには妖怪が群がっていた

軍1「隊長！」

杉「手を出すなよ」

軍1「!?りよ、了解しました」

ふふふ、いい判断だ

杉「さあ、ぶちかますぜえ……………天照らす日輪、今こそ消滅の時!……………レイジングサン！」

そう叫んだ俺の上に太陽をかなり小さくしたような球体が出てきて、一度天に昇ってから、俺に向かって落ちてくる

杉「焼き尽くせ！」

そう言つて、その場から離脱する

その直後、レイジングサンが地面に接触する、レイジングサンが地面に接触した時の熱の衝撃波で妖怪が消し飛んでいく

軍1「す、すごい、あれは一体」

杉「あれは魔法、魔法使ひまたはそれに近いものにしか扱えない代物だ」

軍2「じゃ、じゃあ隊長は……………」

杉「俺か？俺は頑張つて自力でそういう風にならないように努力したよ」

その言葉を聞いて、隊のみんなはこう思ったと言う、この人は規格外だ、と

そんなことは知るよしもない俺はどんどんと妖怪をなぎ倒していく

杉「おらおらああ、ロケット発射までは此処を通すわけには行かないんでねええ！大人しくお引き取り願いましようかあ！

一刀流剣技 壹乃型 閃光斬！

この技は光に近い速度を出すことによって相手を切り刻む技だ
ちなみにこれはタイマン時の時のものだ

多対一の場合は的確に相手の急所を攻撃して確実に屠ふる技だ

これにより妖怪はかなり減った

杉「よつしやあ！今度はこいつだ！………龍王随風、神魔を裁斬せよ！サイクロン
！」

そう叫んだあとに俺を中心とした、竜巻が起こり妖怪は巻き込まれて、物凄い突風により所々斬られていく

杉「おお、おお大猟大猟、よし、やるぜ！集え、地水火風！転ずるが如く、化するが如く、我が剣となれ！スプリームエレメンツ！！」

俺の前に特大の魔法陣が出てきて、大量の光線が一本一本、宙にいる妖怪を撃ち抜いていく

軍「隊長！そろそろ最後のロケットが発射する頃だと思うので、戻りましょう」

杉「……………そうだな、よしお前ら！撤退するぞ！」

軍『了解！』

俺たちが都市に向けて撤退していると、いくら軍で訓練しているとはいえ所詮人間、妖怪に身体能力で勝てるわけがなく、囲まれてしまう

軍2「な！どうしますか、隊長！」

杉「……………はあ、仕方ないお前らだけでも、生きろ」

軍1「な、何を言っているんですか!?!全員で生き残る、そう言ったじゃないですか!?!」

杉「すまないな、お前ら」

その後に口論があつたが、俺が無理矢理ロケットに向かつて飛ばした

杉「そのあとは、おそらく竜神が語ったものと同じだろう」

諏「……………」

杉「どうしたんだ？諏訪子」

諏「いや、ちよつとね」

杉「ふふふ、どうした？怒っているか？それとも、泣いているのか？」

諏「両……………方」

杉「そっか、じゃあまずなぜ怒っているのか」

諏「なんで、あの時一緒に行かなかったの？」

杉「何時でも行けると思ってたな」

諏「そっか」

杉「ほらほら、ガキはもう寝る時間だぜ、早く寝ろ」
諏「うん」

諏訪子は自分の部屋に戻っていった

さてと、俺も寝るかな

俺も自分の部屋に戻り、静かに床についた

第九話 神と人の修行・三

前回のあらすじ

杉「為すべきことを為すまで止まることはできないんだ」

〽決闘二日前〽

杉「さーて、諏訪子！これが最終調整だ！やることは弾幕シューティングだ」

諏「弾幕しゅーていんぐ？」

杉「ああ、俺が張った結界の中で弾幕で作った敵が出てきて弾幕を張るからそれを避けて、できれば倒して行って、ボスを倒せば終わりだ」

諏「うん、OK、OK」

杉「準備はいいか？」

諏「大丈夫だよ」

杉「よしじゃあ、スタートだ」

諏訪子の弾幕シューティングが始まった

この弾幕シューティングは紅魔郷のexステージをモデルにしている

最終ボスは狂気に狂った神にしている

諏訪子は危なげなく回避している

まあ、まだ序盤の方だからここでピチュラれても今まではなんだったんだってもんだ人妖大戦のことを語ってからは一日目から二日目のことを繰り返していただけだ

これだけで、いろいろスペックは上昇したんじゃないかな
そんなことを考えていると、諏訪子が中ボスまで行っていた

中ボスは神を守る守護者みたいな感じだな

守護者はかなり高密度の弾幕を張っているが、諏訪子は避けられるものは避けて、間に合わないものは弾幕で相殺していた

しかもしつかり敵に弾幕を当てている

この敵は体力は結構少なく、一本五千でそれが三本ある

諏訪子の弾幕を千五百発当てれば消えるようになっていく

今はだいたい九十は当たったかな

まあ千五百は一瞬だからな直ぐにボスが出てくるだろう

そんなことを考えているうちに諏訪子は弾幕のパターンを読んだのかほとんどを避けている

もうあれは虫の息だな、そろそろ消えるだろう

中ボスが消えたあとは、敵は出てこずに一気にボスまで迫り着く

狂気に狂った神に弾幕パターン等はなく、勘を頼りにして避けながら弾幕を当てなければならぬ

体力はさっきの奴の倍で五千を六本、弾幕を三千発当てればクリアーできるまあ、行

けるだろう無理でもここまでこれたんだ、最初は弾幕練習のベリーハードもクリアできなかつたもんな

あ、諏訪子パターンが読めなくて混乱してるな

あ、一回当たったな、残り二回だな

避けれてはいるが、攻略方が見つかからないといったところかな

まあ、攻略方なんて避けれそうな弾幕は避けて、無理そうなら相殺していつて攻撃つてというのがベストなんだが………どう出るかな？

………なんかもう吹っ切れて全部相殺し始めたぞ。それだと消耗が激しいからなあ

あ、また一回、もう当たれないぞお

あ、ボスが消えたどうやら避けながらでたらめに撃っていた弾幕が当たっていたようだ

というわけで、諏訪子の弾幕シューティング クリアー

杉「どうだった、諏訪子」

諏「うーん、最後適当に撃ってたんだよねー、ちよつとビツクリしちゃったなあ」

杉「まあ、そうだろうな、じゃあ諏訪子、クリア記念に決闘まで修行はなしだ、決闘に備えてしつかり休んでくれ」

諏「え、いいの？」

杉「ああ、頑張ったご褒美だな」

諏「わーい、ありがとう智！」

そう言つて、諏訪子は神社に飛び込んだ

杉「はあ、ホントに諏訪子は元気だなあ、まあ子供はみんなそうか」

そう言つてから神社に入った

杉「なあ、諏訪子飛び込むのはやめろ」

諏「えー、何でー」

杉「玄関と居間が散らかるし、それを掃除するのは誰だと思つてるんだ？」

諏「う、わかつたよ、今後気をつけるよ」

杉「ん、そうかじゃあいいや、飯食つて早く寝ろ」

諏「うん、わかつたー」

まあ、その後の飯時には何も面白いことがなかったのでカット

杉「はあ、まあこの辺は断片だけが覚えてるんだよなあ、この大戦は諏訪子が負ける、まあ信仰は動かないんだけどね」
そんなことを呟いて、俺は寝た

第十話 諏訪大戦

前回のあらすじ

杉「修行全工程終了、あとは休んでよし」

く 諏訪大戦 当日く

杉「さて、いよいよ神奈子との決闘だが………、準備はいいか？」
諏「いつでも」
杉「よし、じゃあいこうか」

く決闘場く

神「よく逃げずにここに来たね、洩矢神それに智」

杉「逃げたら諏訪子消えちまうんでな来てやったぜ、それと後ろの奴等はなんだ？」

ス「へっ、俺たちはお前らがイカサマしないように、見張りに来ただけだぜ」

杉「へえ、そうかい、じゃあ諏訪子行ってこい」

諏「うん、わかった」

そう言つて、諏訪子は神奈子の方に飛んでいった

杉「……………さてと、ツクヨミーいるかー」

ツ「ああ、ここにいます」

杉「おお、いたいた、で結局のところどうなんだあ？こいつらは」

ツ「おそらくだが、手を出す気満々だろう、昨夜そんなことを言っていた気がする」

杉「へえ、そうか、サンキュー手を出したときは制裁に協力してくれたら嬉しいぜ」

ツ「了解した」

そんなやり取りをして、俺たちは自陣に戻っていった

三人称視点

広場の真ん中で睨み合うは諏訪の土着神 洩矢諏訪子と大和の代表 八坂神奈子その霧囲気まさに一触即発そんなとき神奈子が口を開く

神「まさか、本当にここに来るとはねえ洩矢神、怖じ気づいて逃げるもんだと思ってたよ」

諏「ふふふ、そんなの今も逃げ出したいくらいだよ、でもね智がこの一ヶ月間修行してくれたんだよ、だから………ここで逃げるわけには行かないんだよ！」

神「あははは、いい覚悟だ来なよ洩矢神、死合いを始めようじゃないか」

諏「いくぞ、八坂神！」

諏訪子と神奈子の死合いが始まった

先手は神奈子、神奈子は高密度の弾幕を展開するが、高密度とは言え諏訪子が行った

修行よりは隙間があり難く避けて、弾幕を神奈子に向かって撃つ

神奈子は驚いたが、寸前で避ける

しかし諏訪子の攻撃は終わっていない避けた先に弾幕を撃っていた

神奈子は咄嗟に避けられずに当たってしまう

神「いいねえ、こんなに楽しめそうなのはいつぶりだろうか、あんたなら全力でやれ

そうだねえ」

そう言つて、神奈子は力をあげる

神奈子は後ろに御柱を出して、諏訪子に向かって飛ばす

諏訪子は難く避けるが、飛んできた御柱で突っ込んできた神奈子が見えずに振り

被った御柱に殴り飛ばされる

湖に突っ込んだ諏訪子はすぐに浮上して、神奈子に突っ込んでいく、その手には鉄で

作られた輪が握られている

諏「食らえ！ 洩矢の鉄の輪！」

そう言つて、鉄の輪を神奈子に向かって投げる、が神奈子がかざした蔦によつて錆び

て朽ちてしまう

これに驚いた諏訪子は神奈子の御柱が避けられずに、顔面に食らい、落ちてしま

が、諏訪子は立ち上がり再び神奈子に向かっていった

弾幕を張り、動きまくって神奈子を翻弄し、拳を当てる

神奈子は動き回る諏訪子に弾幕を当てたりと、確実にダメージを与えるが、思ったよりも諏訪子の攻撃のダメージが蓄積されておりかなり消耗している

そして、両者の力はあまり残されていない。

そんなとき、神奈子が

神「なあ、洩矢神」

諏「なんだい、八坂神」

神「お互いあまり力が残されていないんだ、最後は渾身の力を込めた一撃を放って、倒れた方の負けってことでどうだい？」

諏「いいねえ、それ乗った」

どうやら、次の一撃で終わるようだ

お互い拳にありつたけの神力を込めて殴りかかる

拳と拳がぶつかり合い辺りが光に包まれる

光が収まったあと立っていたのは神奈子だった

〈智side〉

杉「ふう、終わったな、それでそのくずどもは何をしようとしてるのかなあ？」

ス「何って、洩矢神の始末を……」

杉「ほう、そんなことを俺の目の前ですか………命の保証はできんが………いかか？」

ア「何を言っているんですか、あなたたちは負けたじゃありませんか」

神1「そうだぞ、口を挟むな！」

杉「はあ、もういいや、てめえら全員皆殺しだ、諏訪子を消されるわけにはいかないんでね」

ス「ははははは、できるわきやねえだろ、なんたってこっちは一万の神がいるんだ

からなあ!」

杉「一万……………か」

神「どうだ、逃げるんならいましき「少ないな」!？」

杉「せめて、その十倍は持つてくるんだな」

ス「なんだとお、お前ら! やつちまえ!」

神『うおおおおおおお!』

杉「突っ込んでくるのはいいが、直線でいいのか? 虚空より出でし靈光! 万物を討ち

払わん……………デバインストリーク!」

そう唱えた俺の目の前に白色の魔法陣が現れ白色の光線が真っ直ぐ放たれる

くず神『うわあああああああ!!』

半数以上の神が吹き飛んでいった

ス「くそつ、何をしてるんだ! 囲め!」

今度は囲んで突っ込んでくる飛んでいるものはいない

杉「はあ、懲りろ、立て! 天を焦がす焰!……………バースプレッド!」

今度は、俺を中心に半径二、三メートルの燃え盛る魔法陣が展開され、踏み入れた瞬

間焦げて炭となって消える

くず神『あああああああ!!』

ス「くっ、空からだ！空から狙え！」

今度は、空から俺に向かって突進してくる残っているのはスサノオとアマテラスとツクヨミ、それと突進してくる約千の神達

杉「学習能力がないのか、あいつは、はあまったく、開口、無窮に崩落する深淵！」
詠唱を完了した状態で止めて、神の攻撃が当たりそうになつたときに

杉「……………グラヴィティ！」

丸い球体が出てきて、これの中もしくは下に入ると重力で押し潰されてしまう魔法である

くず神『ぐあああああああああ』グシヤア

くずどもが潰れていく、実に滑稽である

杉「さてと、ツクヨミ離れている」

ス「なっ！てめえいつの間に！」

ツ「ああ、わかつた」

杉「よし、お遊びもこれまでだ！出でよ、原罪の特異点！虚無と永劫を交え、弾けて潰せ！……………イベントホライズン！」

ス・ア『ぐあああああああああ!!』

スサノオとアマテラスが消滅した

杉「ふう、少し疲れた」

ツ「お疲れだな、智」

杉「ああ、さてそろそろ帰るか、諏訪子が心配だ」

俺は諏訪子と神奈子のところへ向かった

〽諏訪湖〽

杉「おーい、神奈子ー諏訪子は無事か？」

神「ああ、ぐっすり眠っているよ、それよりもさつきものすごい音が聞こえたんだが

……

杉「気にするな俺がただ遊んでいただけだ」

神「いや、遊んでいただけであんな音h「ううん」!」

神奈子が何かをいいかけたとき諏訪子が目を覚ました

杉「よう、おはよう諏訪子、調子はどうだい?」

諏「うん、まだちよつと所々痛いけど、関係無いよね」

神「それはどうしてだい?」

諏「だって私、負けたんだよねだったら「悪いが信仰は一切そつちにいかんと思うが……?」?なんで?」

杉「うーん一つ目は崇られると何処かで思っているのか、二つ目は諏訪子が優しいからだな」

諏「どういうこと?」

杉「考えてみる、諏訪子は国の民を崇らずに能力を使って作物の収穫等を手伝つていたんだらう?」

諏「うん、まあ」

杉「だったら、諏訪子への信仰心が強く逆に行きなり来た大和はどんなことをするかわからないから、信仰は一切そつちにいかんということだ」

神「じゃあどうすればいいんだい?」

杉「なに、簡単なことだ、架空の神をたてて、表では神奈子が、裏では諏訪子が国を守るということだ」

諏「じゃあ、それだと神社の名前も変えなきゃいけないじゃ……」

杉「あー、じゃあ洩矢を文字って守矢、守矢神社にしよう」

こうして、諏訪大戦は幕を閉じた

第十一話 大戦後、スキマに会う

前回のあらすじ

杉「諏訪大戦終結！勝者、八坂神奈子！」

く 決闘 翌日 く

杉「はあ、酒は一気に飲むもんじやない、月などの美しいものがあつてこそ酒はうまいんだ」

そう言いながら、俺は一人静かになった神社で酒を飲む

杉「さてと、次は何処に行こうかな、妖怪の山か？それともその辺ぶらぶらするか？歩きながら決めるか」

さて、思い立ったが吉日早速出よう今出よう

杉「ミジャグジー、いるかー？」

ミ「なんででしょう？」

杉「諏訪子に伝えといてくれ、神奈子も来たしお前はもう大丈夫だろう、神奈子と二人で、諏訪の国の平和を守ってくれつてな」

ミ『それでは、旅に出るのですか？』

杉「ああ、ずっとここにいとあいつらがダメになりそうだからな」

ミ『荷物はどこに？』

杉「荷物なんてはなつからここに置いてねえよ、能力で作った空間にしまつてあるんだ」

ミ『たまには帰ってきてくださいね』

杉「ふふふ、当たり前だ、まあ気が向いたら帰ってくるよ、じゃあな」

俺は神社を出て、後ろを振り向かずに旅に出た

杉「さあさあ、また旅に出たのはいいものの行き先決まらねえな」
なんともまあ先行き不安な旅でしょうか!?

杉「ん、今なんか聞こえたような………こつちのほうかな？」
俺は声が聞こえたであろう方向に歩いていった

side

？「はあはあ、あーもう、しつこい！」

突然だけど私は今、妖怪に追いかけています

なんでも、私の能力が強いから人間を襲うのに持つてこいな能力らしい

だから、人間を襲うのに協力させて、抵抗すれば強引に拘束、最悪殺せと言われている
るそうで

それでなんやかんやあって私は逃げているのです

そんなことを考えながら走っていると前にいる人に気づかずにつつかってしまった

〈智 s i d e 〉

歩いてたら金髪の少女が走ってきてぶつかつた

杉「ドアア！いつてててて」

？「あ、すみません大丈夫ですか？」

尻餅をついた俺に声をかけている

その後ろから、妖力が三つこちらに走ってくる

？「すみません私急いでるので」

杉「ちよいまち、急ぐ理由って後ろの妖怪のこと？」

? 「え!? あ、はい」

そんなことをしていたら妖怪がすぐそこまで来ていた

杉 「フム、君ちよつとこつちに」

? 「え、でも」

杉 「いいから、能力使用、操るもの存在感、対象は俺と少女、マニピュレイト」

そう言った後に妖怪たちが目の前を通りすぎていった

? 「え?」

少女はよく状況がわかっていないようだな

杉 「うん、もう大丈夫かな」

俺は能力を解いた

? 「え、え、なんで」

杉 「くくく、状況を理解してない感じだね、妖怪たちは通りすぎていったよ?」

? 「助かった、の?」

杉 「ああ、そうだな」

俺がそう答えた瞬間、少女は崩れ落ちた

杉 「つて、おいおい、大丈夫かい、あんた」

? 「助かった、よかつた」

杉「寝ちまったか、しやあないどっかにいい洞窟はないかなあとあったあった」
俺はかなり大きな洞窟を見つけて、中に入り、少女が目覚めるのを待った

智の設定2 諏訪大戦編

杉本 智（スギモト サトシ）

年齢・・・二億と一千万くらい（見た目は二十歳から十八くらいに見える）

種族・・・人間……………だと思う

性格・・・二億前と変わらないが、残忍さが増した気がする（二億前敵は切り殺す程度 今容赦なく消し炭にする）

隠し事は面倒くさくになると隠すのをやめるようになる 例・諏訪大戦で使った魔法
面倒くさがりだが意外と面倒見がいい

容姿・・・基本的なところは変わってないが、髪が所々赤黒くなっている

瞳の色も若干赤黒い

身長はさほど変わらず、体型も変わっていない

服装・・・こちらあまり変わっていないが強いてあげるなら黒の上着の所々が赤色に染まっている

戦闘スタイル：：基本的なところは変わらないが最近、刀等の剣術以外にも拳術、つまり空手等のことをやっている

また、銃は苦手だが弓ならある程度は行けることがわかったので練習している

最近ようやく、作った的の真ん中に射れるようになった

矢に属性を付与させて射れるように頑張っている（火矢等）

能力・・・『ありとあらゆるものを創造する程度の能力』

二次創作ではお馴染みの能力

能力を使っていくうちに力の入れ方がわかったので、ちゃんと能力も創れるようになった

また創った能力は自分が必要ないと思ったら消えるようになっていく

能力を創る際にはどんな能力名を宣言しなければならぬ

例：能力創造 能力名 ○○する程度の能力 クリエイト

なおその他の武器などを創造する際は宣言は要らない

他にも応用できないか考察中

『ありとあらゆるものを操る程度の能力』

名前の通り何でも操れる

大抵の人間、妖怪等は力を込めずに操れるようになって

だからといって、この能力で何かをしようとは思っていない

敵の攻撃も操れるように避けるのが面倒ならこれを使うこともしばしば

修行してたら、自分が触っているものの存在感や五感の強さ？を操れるようになった

しかし欠点は能力使用宣言、操るもの、対象を指定しなければならない

例：能力使用 操るもの 存在感 対象 自分 マニピュレート

的な感じに

だが宣言するのは大がかりなことのみ（霊力などで操れないもの）

しかし、操るものが曖昧なもの（境界や世界の理など）は宣言するだけでそのものを

操る能力で確定される

しかし、確定した能力は十時間で元の能力に戻ってしまう

剣技・術・技・奥義・・・智が戦闘で使う敵を確実に殺れる技)

『二刀流剣技 弐乃型 炎龍神斬』

抜刀術

この技で斬った場所からは炎が出てきて、斬ったものを焼き尽くすまで消えないようになっている

また、この技は闇属性と掛け合わせが可能で、出てくる炎が黒色になり、対象以外のものに燃え移り、焼き尽くす

『二刀流剣技 壹乃型 雷龍斬衝』

雷の属性を二振りの刀に纏わせ斬撃を飛ばす

当たった相手は体が麻痺して動けなくなる

動けなくなったところを他の技で追い討ちをかけて仕留めることができる
絶対的な攻撃力を誇るわけではなく、他の技への繋ぎとして使う

サポート技

『二刀流劍技 壱乃型 凍結四散』

氷の属性を片方は絶対零度冷気を纏わせる

片方は刀身を凍らせる

絶対零度の冷気を纏わせた方で切ると相手が凍り、凍った方で切ると（叩くの方に近い）凍った相手は砕けちり絶命する

『二刀流劍技 壱乃型 閃光斬』

この技は光に近い速度を出すことにより相手を切り刻む技

上記のものは一対一のみ

多対一では相手の急所を的確に切りつけ確実に仕留める技だ

『バーンスプレッド』

使用者を中心に半径二、三メートルの燃え盛る魔法陣が展開され、敵を燃やし尽くす

下級の神ならこれで消滅させれる

発動には詠唱が必要

詠唱『立て、天を焦がす焰！』

『レイジングサン』

発動すると太陽をかなり小さくした感じの球体が出てきて、一旦上に上がって地面に着いたら熱波で焼き焦がされる

上級の神でも耐えられるのはごくわずかである

またこれも発動の際詠唱が必要

詠唱『天照らせ日輪！今こそ消滅の時！』

『サイクロン』

使用者を中心に大きい竜巻が起こり、巻き込まれた敵を切り刻む

竜巻がやむと、細切れになった敵の死骸が落ちてくる

しかし耐えられるものには耐えられる

上記の二つ同様発動の際に詠唱が必要

詠唱『龍王随風！神魔を裁斬せよ！』

『リベールイグニッション』

発動すると目の前に紫の魔法陣が展開され、そこから紫の光線が放たれる

当たったものは暫くすると紫に変色して死に至る
 なお、これも詠唱がいる

詠唱『深淵の盟約を果たせ！』

『グラビティ』

発動すると、黒くて丸い球体が現れその真下もしくは中に入ると重力で押し潰され
 てしまう

これも発動の際詠唱が必要になる

詠唱『開口、無旧に崩落する深淵！』

『スプリームエレメンツ』

智の使う奥義の一つ

名前がまんまだが、技の内容？もそのまんまである

炎を纏わせた剣で切り抜けて、水の柱で貫き、風の刃を飛ばして、岩の礫でぶつけて
 から

上下に水と炎の魔法陣、左右に風と土の魔法陣を作り四つの魔法陣を大きい魔法陣で
 繋いで赤、青、黄、緑の光線を敵に向かって撃ち出す

なお、これは魔法なので詠唱がいる

詠唱『集え、地水火風！転ずるが如く、化するが如く！わが剣となれ！』

『イベントホライズン』

人指し指の先に小さいグラビティを作り自分はその場を離れて、離れた後にグラビティを一気に巨大化させて敵を包み込み爆発させる

これも魔法なので詠唱が必要になる

詠唱『出でよ、原罪の特異点！虚無と永劫を交え、弾けて潰せ！』

第参章 妖怪の山編

第壹話 その少女、名は八雲紫

前回のあらすじ

杉「少女救出、お持ち帰り（笑）」

杉「うん、広さは申し分ないちょうどいい広さだな、夜になると冷え込むがまあなんとかなるだろう」

前回、ぶつかった少女を助けて気絶しちやっただから、起きるまで見ることにした
……………断じてロリコン等ではない

杉「……………誰に言ってるんだ、俺、そういや、名前聞いてなかったなあ」

？「ううん、ふえ？」ガバツ

そんなことを呟いた瞬間、少女が目を覚ました

杉「おお、起きたか、調子はどうだい？」

？「あの、えと……………」

杉「ふふふ、お礼なんていいさ、助けたかったから助けたんだから」

？「あ、はい、あのあなたのお名前は？」

杉「ああ、そうだねまだ名乗ってなかったね、俺は杉本智だ、君は？」

紫「私の名前は『八雲紫』です」

まさかのゆかりだった、この姿のままだったらb b aとか言われずに済むのにね

杉「そっか、まあなんにせよ無事でよかったよ、所で聞きたいんだけど」

紫「？何でしょうか？」

杉「……………どうして追いかけてたの？」

その問いを聞いた瞬間少女、基紫の警戒心と妖力の放出量かが羽上がる

杉「そんなに警戒しないでくれ、それにそんなに警戒されたら……………」

俺はそこで言葉を匂切り、紫の背後に周り告げる

杉「誤って、殺つちやいそうだから……………」

その言葉を聞いた瞬間、紫は飛び退いた

紫「それを知って、どうするの？」

杉「どうもしないさ、ただの興味だよ、大丈夫さ、俺は妖怪でも人間でもないからね」
人間の道から外れているが、妖怪じゃない、それが俺と言う存在なのである

紫「信用なりませんね」

杉「そりゃそうか、だったら………こんなんでどうかなあ？」

俺は霊力と妖力を紫が気絶しない程度に解放する、ついでに魔力も

紫「っ！これは………なぜ、両方持っているの？」

杉「さあな、昔はこんなに妖力はなかったのに、今じゃこんななってるしな」

まあ、大方人妖大戦の時に妖怪の血を浴びすぎたんだろう

さて、目の前の少女はどうしても口を割らないらしい、仕方ないあまり使いたくないけど

杉「能力使用 能力創造 名 盗む程度の能力 クリエイト」ボソツ

そう呟いた後に体の中に何かできた感覚に陥る、能力創造成功

杉「さて、能力使用 盗む程度の能力対象 紫の心 ステール」ボソツ

呟いた瞬間、紫の心が流れ込んでくる

さて、俺の問いの答えはとあつた

能力が便利で人間を襲うのに役立つから、か

杉「くくく、面白いな」

紫「何を笑っているの？」

杉「能力、人間、襲う」

この三つの単語に反応を示す紫

杉「なるほどな、そう言えば妖怪どもが噂をしていたな、とても面白い能力を持った奴がいるとな」

またも反応する紫

杉「ん？ひよつとしてこれお前のことか？」

紫「だったらどうするの？」

紫が警戒心を強めて聞いてくる

杉「別にどうもしないさ、たんに興味が沸いたから聞いたままだよ、さあもう快復したでしょ？俺はもういくぜ」

紫「ちよ、ちよつと待って！」

杉「なんだ？」

声をかけられた俺は洞窟の入り口で止まり、振り向く

紫に先程のような警戒心はない

紫「……………あなたは私に能力の使い方を伝授できますか？」

杉「能力にもよるが基本はいけるかな？」

紫「それでは、お願いします私をどんな妖怪にも負けないくらい、強くしてください」
杉「んー、一応俺旅人だしなあ、まあいいよ、旅しながらって言う条件付きだけど、助けたんだしどつかの小端妖怪に殺られたらちよつとやなんでね」

紫「ありがとうございます！」

こうして、後に幻想郷の妖怪賢者になる八雲紫に修行をつけることになった

第貳話 青年、弟子を持つ

前回のあらすじ

杉「少女ゆかりん、強さを求める」

杉「で、修行してくれって言われても具体的には何をすればいいんだ？」

紫「具体的には、妖力の使い方や能力の使い方とかですかね」

杉「お前の能力って何なの」

紫「『境界を操る程度の能力』です。まあ見てもらった方がわかると思いますが」

そう言って、紫は腕で縦に何かを切るように振ると、空間が切れて見えたのは中が黒

く、無数の目がこちらを見つめる空間であった

杉「何だこれ」

紫「私はスキマって呼んでます、これを使って好きな所に出れるんです」

杉「なるほどな、これくらいなら俺でもできそうだな」

紫「え？ どういうことですか？」

杉「うーん、まあ言うより見たほうが早いだろうな。さて、能力使用 操るもの 境界 マニピュレート」

そう言った後にさっき紫がやったように腕を振った

すると、紫とは全く違う、中の色は黒いが所々に赤、青、黄、緑、白、紫、橙、水色が混じっているスキマが現れた

紫「そんな、どうして」

杉「くくく、これが俺の能力だよ。まあもう一つあるんだけどね『ありとあらゆるものを操る程度の能力』」

まあ名前の通り、なんでも操れるよ」

紫「なるほど、だから隙間が出せたんですね」

杉「まあ、そういうことだな、所で紫の能力は結構便利なんだがなあ、まあひとつ言ううとこの能力は名前の通り境界を操れるんだよ」

紫「どういうことですか？」

杉「まあ、つまりあれだよ、現実と幻の境界を操って、認識できなくなったりとかだね」
紫「それってつまり」

杉「そうだね、かなり危険な能力だよ、まあ俺のよりかはましだけどね
それにね、隙間を使って敵を翻弄したりね、例えば……………」

俺はそう言って、隙間を開き手を突っ込んだ

そして、隙間の出口を紫の頭の上に開いて紫の頭を叩いて、すぐに隙間から手を出す

紫「痛つ、なんなんですか今のは」

杉「さあ、上からちよつと大きな石でも落ちてきたんじゃないの？洞窟だし」

紫「うーん、そうなんでしょうか」

杉「くくく、うんまあ嘘なんだけどね」

紫「え、」

杉「ほんとに俺が隙間を通して、紫の頭を叩いただけだよ」

紫「え、そうだったんですか？なんで叩く必要があるんですか」

杉「あつははは、まあ実践だよ。まあ他にも……………そうだなあ……………あそこに
熊がいるだろ、あいつに向かって例えば短剣を投擲しても届かないだろ？」

そう言って、遠くの方にいる寝ている熊を指差しながら言う

紫「まあ、はいそうですね」

杉「力技でいってもいいけど、体力をあまり使いたくないってときにスキマを通して、投擲すると……ふっ！」ヒュッ

俺は、短剣を熊に向かって投擲する

勢いが衰える前にスキマに入れて、熊の目の前にスキマから短剣を出す

そして、熊の顔に刺さる

熊「がああああああああ!!?」

杉「とまあ、こんな感じに隙間を使って離れた相手に攻撃を当てれるようになるんだ」

紫「な、なるほど、そう言うこともできるんですね」

杉「まあ、能力の扱い方とか練習しないとイケないけどな」

紫「え、でも師匠は……」

杉「ふふふ、まあ経験の差って言うやつだよ」

紫「経験って、師匠まだ二十歳くらいでしょ?」

杉「え、あ、そっか紫は知らないんだったな」

紫「え、何をですか?」

杉「はあ、まあ改めて自己紹介させてもらおうと、俺は杉本智、月の英雄と呼ばれてい

るよ」

紫「へ？」

杉「うん、まあ、実際はもつと歳食ってるってわけ」

紫「ちなみにそれはどのくらい……」

杉「うーん、まあ軽く二億くらいかなあ」

紫「ポカーン」

杉「おい、大丈夫かあ？」

紫「………はっ！二、二億ですか!？」

杉「ああ、そうだが」

紫「あはは、とんでもない人に弟子入りましたね、私」

杉「あつはつは！まあいいじゃないか、さて、もう暗いから修行は明日な」

紫「あ、はい」

修行、ねえ、諏訪子にやらせたやつを軽くしたやつやらせればいつか

第参話 青年、少女に修行をつける

前回のあらすじ

杉「どうも、月の英雄 杉本智です」

杉「というわけで、早速修行を始めろぞ」

紫「はい、わかりました」

杉「まあ、まずやるのは………紫、妖力ってどんくらい持ってる？それを確かめたいから、ちよつと出してみてくれ」

紫「え、あ、はいわかりました」

ちなみに、妖力を出してもしも洞窟が崩れたら危ないから外に出ている

紫「ふう、じゃあやりますよ」

杉「おう、あ、ちよつと待ってくれ」

紫「何ですか？」

杉「もしもの時のために結界を張っておくよ」

紫「わかりました」

うーん、まあ六面体の某妖怪退治アニメのやつだな、確か、烏なんとかつていうって

どうでもよかったな

杉「よしじゃあやってくれ」

紫「わかりました、ふうううう………行きます、はあ！」

紫が力を入れた瞬間、結界の中の空気が震え始めた

そんな中、平然と顔色ひとつかえずに妖力を解放する紫を眺める俺

杉「(うん、まあだいたいわかったかな) よし、もういいぞ、紫」

紫に声をかけたら、徐々に空気の震動は収まっていった

紫「ふう、ど、どうでしょうか？」

杉「うん、まあ、結構あったね」

紫「え、そうなんですk「でも」？」

杉「それでも、せいぜい中級くらいかなあ」

紫「ええ!?!じゃあ、大妖怪はどのくらい持つてるんですか?」

杉「うん、まあ、このくらいかなあ」

俺はそう言つて、結界の硬度をさいだいにしてから、大妖怪クラスの妖力を出すすると、結界にヒビが入つていった

紫「!!」ガタガタ

紫は妖力の大きさに身動きがとれなくなっている

かわいそうなので、妖力を収める

紫「っ!?!、はあ、はあ、な、何ですか、今の、妖力は」

杉「まあ、あれが大妖怪クラスの妖力だよ、まあ俺はこれ以上出せるけどね」

紫「あんなのが、大妖怪クラスの妖力………私の数倍はある気がします」

杉「まあ、そうだね、妖怪の妖力の大きさは生きた年数に比例してどんどん大きくなっていくんだよ、生まれたてからまあ、だいたい百年くらいまで小妖怪、二百から九百が中級、で大妖怪は千年以上の年月を生きればそう呼ばれるようになるよ」

紫「な、なるほど、じゃあ私はだいたい三百は生きてますね」

杉「なるほどね、よしじゃあ修行だけだな」

紫「は、はい」

杉「旅をしながら実戦経験を積むんだ、まあ、中級くらいは瞬殺できるくらいには仕立てあげてやるよ」

紫「は、はい！」

杉「さてと、まずは能力に慣れないとね、妖力の込め方が雑すぎる」

紫「じゃあ何をすれば……」

杉「まあ、能力使いまくればわかるようになってくるよ」

紫「わかりました」

杉「うーん、今何回くらい能力使える？」

紫「えーと、三百くらいですかね？」

杉「まあ、うん少ないね、だいたい九百は使えないとね」

紫「え、そんなにですか?！」

杉「ああ、そうだな、で、その能力の慣れ方なんだが……すまないな組手くらいしか思い付かなかった」

紫「え、く、組手って私と師匠とですか?」

杉「他に誰がいるんだ? まあ、妖怪がいたらそいつと死合ってもらおうからな」

紫「無、無理です! 絶対無理です!」

杉「大丈夫だ、俺はちゃんと手加減するからよ」

紫「じゃあ妖怪の方は……………」

杉「……………」それは……………」メソラシ

紫「目をそらさないでください！」

杉「くはは！冗談だよ、冗談、危ないと思ったら助けるよ」

紫「本当ですか!?!」

杉「ああ、マジだってだから安心しろ」

紫「だったらいいですけど」

杉「よし納得したところで、早速始めようか」

紫「は、はい」

杉「さて、じゃあ……………」この石が地面についたら始めるぞ」

紫「は、はい」

杉「よしじゃあ、ほい」ポイツ

俺は石の上に投げ、修業に集中する

ちなみに時刻夕方位である、これだったら夜更け前には終わるだろう

そんなことを考えていると石が落ちてきたので、組み手が始まった

side out

三人称視点

智の投げた石が地面についたことにより、紫と智の組み手が始まった

まず先に仕掛けたのが智だった

智は緊張して、止まっている紫に向かって弾幕を撃つ

杉「そんなんだつたらすぐに妖怪にやられちゃうかも、な！」

そう言いながら、十発程の今の紫が出せる力と同じくらいに威力の弾幕を撃つ

紫「え、わわわ、危ない！」

紫は智の声により我に帰り、攻撃を避けるが

紫「痛っ！」

後ろから謎の衝撃がきた

しかし、それだけでは終わらなかつた

紫「イタツ、くつ、なんなのこれは！」

正体不明の攻撃により混乱する紫

それを見て、笑っている智

杉「あつははは、紫、少しヒントをやろう、俺の能力、ありとあらゆるものを操る程度の能力は確定した操る対象は十時間程で消えるようになってるぞ」

紫「そ、そんなこと言われても………！」

その言葉を聞いた紫は何かわかつたような感じだ

ちなみに説明すると、智が組み手前に確定した操る対象は『境界』である

なので、確定してから十時間は境界を操れるようになるのだ

だから、紫を襲う正体不明の攻撃は最初に出した、弾幕をスキマに入れて紫に攻撃しているのだ

紫「だったら、えい！」

紫は自分のスキマを使って、避難する

杉「なるほど考えたな、さあどう出てくる」

智は紫がとった行動に感嘆の声をもらし、紫の攻撃を警戒している

智は後ろから気配を感じ、振り向いたそこには、紫のスキマがあり弾幕が何個か飛んできていた

杉「おっと、危ないな」

智はそれを見た瞬間、自分のスキマを開いて、中に入れる

しかし、そのあとにも紫は出てこない

杉「ふむ、ずっと隠れるか、なら」

智は紫のスキマと自分のスキマの境界をなくし、紫のスキマの中に入る

紫「な!? どうやってこの中に?!」

杉「簡単なことだ、俺のスキマと紫のスキマの境界をなくして侵入しただけだ」

しただけだ、と言っているがこれをするには充分に修業しないとできない芸当である

杉「さあさあ、どうする? 紫」

紫「くっ! この、食らえ!」

紫は弾幕を十発出した

智はそれを余裕な様子で避ける

しかし、次の瞬間肩に衝撃がくる

杉「うおっ!? ちっ、やるじゃないか」

紫「やああああああ!!」

紫は智に向かつて、がむしやらに弾幕を撃っている

杉「うーん、デタラメじゃあ当たらんぜよ」

今度は油断しないように、全包围を警戒している

後ろから、死角から、上からなど様々な場所から攻撃が飛んでくる

紫「はあ、はあ、も、もう、無理、ですう」バタツ

紫は力を使いすぎたのか、スキマの中で倒れてしまう

智対紫 組み手 winner 智

side out

〈智side〉

杉「おいおい、力の使いすぎで倒れるとか、まずはペース配分を覚えさせるべきかな？とりあえず、洞窟の中に運ぶかー」

俺は紫を担いで、洞窟に入っただけだった

杉（三百生きたわりには、戦闘経験が少ないんだな）

そんなことを考えながら、俺は眠りにつく

第肆話 青年、天狗に出会う

前回のあらすじ

杉「紫の体力が思ったよりもなくてクリビツ」

前回の紫との組み手からだいたい五十年は経った気がする

ちやんとは数えてないからわからないが多分そんなくらいだと思う

で、今なにをしているのかというと………

?「貴様ら、ここが天狗が治める妖怪の山だと知って、登ろうとしているのか?」

杉「知らないから登ろうとしているんだが、考えたらわかるのか?」

? 1 「なっ!? 貴様、天狗を侮辱するのか!？」

? 2 「まあ、確かに天狗の中にも頭悪いやついるけどな」

? 「な、おい! 銀杏! 何を言ってるんだ!」

銀「事実だろ? 大天狗とか、お前とかいつばいいいるじゃねえか、で迷える旅人さんよ、我ら天狗の山に何用だい?」

杉「いや、この山結構でかいから、回り込むのめんどくさいなーって思ってたな、それでこの山突つ切ろうぜってことになった」

銀「なるほどな、それは風雅に聞かねえと通していいかわからねえな、ちよつとついてきてもらうぞ」

杉「OK、OK、ほら行くぞ、紫」

紫「え、ホントに行くんですか?」

? 「待て、そんな勝手に決めて言い分けられないだろう!」

銀「何だよ、風雅に聞きに行くだけだろう?」

俺たちが山に入ろうとすると馬鹿が止めてきた

? 「だから、勝手に山に入れていいのかとってっているんだ!」

銀「別にいいんじゃないか? て言うか、立場的に言うとお前よりも上なんだけど
………まあいいや、めんどくせえ。ということ………えーと、すまねえ名前聞か

せてくれねえか？」

杉「ああ、名乗ってなかったな、俺は杉本智ってんだ、お前は？」

銀「ああ、俺は『犬走銀杏』ってんだ、よろしく、杉本。っていうか人間がよくここに来ようと思つたな？」

杉「いやまあ、知らなかったって言うのもあるし、第一俺、人間じゃねえし」

銀「あれ、そうなのか？じゃあ、通つてもよくね？」

杉「あれ？そう言えばそうだな、じゃ遠慮なく」

？「待て、貴様何をしているの！それ以上入ると、切り裂くぞ！」

はあ、力の差がわからねえやつは本当にめんどくさいな

杉「黙れよ、犬が」

？「なんだと、貴様あ！」

杉「黙れよ、犬がと言つたんだ、力の差がわからんのなら、体で覚えてもらうしかないか？」

素晴らしいながら俺は大妖怪クラスの1.5倍くらいの量の霊力を出す

？「な、なんだ、貴様のその、馬鹿げた霊力のか……さ、は……」バタツ

杉「くくく、二億生きればこのくらい余裕で出せるようになるぜ？って聞こえてねえか」

紫「て言うか、師匠霊力も出せたんですか」

銀「すげえな、お前確かに霊力を持っているが既に人間ではないみたいだな、二億生きた人間ってそういないだろう」

杉「まあ、地球にはいないだろうな。それと紫、俺は神力以外全部大妖怪以上で言うか全部開放したらいろいろ危ないから制限はしてるが、大妖怪の4倍は出せるぞ」

銀「ほう、それじゃあまるで何処かにはいるみたいない方だな、それとお前もう人間じゃないな確かに」

？「おい、銀杏何かあったのか？」

銀「おお、風雅ちようどいいや、こいつ入れてやつてくんねえかな」

風「ん、こいつは？」

銀「霊力持つてるけど、人間じゃないやつ」

風「どういうことだ、それは」

杉「名前いった方が早いかな？俺は杉本智だ」

風「杉本智？どこかで聞いたことがある気がする………ああ、思い出した前に二億生きた人間がいると聞いたことがあるが、なるほどなお前がそうなのか」

杉「へえ、知ってるやついたんだなあ」

風「いや、私も聞いたただけだからな、それで、その杉本がどういった用で？」

杉「うーん、ちよつと通らせてくれればよかつただけど……よし、面白そうだからこの山に住まわせてくれ」

風・銀・紫「……はあ!？」

二

なんか紫まで驚いてやがる、俺の思い付きの行動は今更なのにな

風「ふうむ、それは厳しいかもしれないな」

銀「ああ、うちのやつらは天狗以外は迫害するからな」

紫「そうですよ、師匠! さっさとこの山越えましようよ!」

杉「それだとお前の修行にならんだろう? ここの天狗と戦わせて、経験を積みましよう

と思っただが……いいだろう?」

紫「よくないです! それに種族はどうするんですか!？」

杉「それなら問題ない、俺の能力で種族は変えられるからな」

そう、俺の操る程度の能力は種族を操って変えることもできる

紫「何でもありですなその能力……」

杉「あ、紫の種族は変えないぞ、種族はまだ自分しか変えれないからな」

紫「じゃあ、私はどうしたらいいんですか!？」

風「ふむ、その程度ならなんとかなるだろう、私の客人とでも言えばな」

杉「風雅は立場的にはどの辺りにいるんだ？」

風「私か？私は天狗の頂点に立つ天魔というところだな」

銀「ちなみに言うとな俺は白狼天狗の一番上だなだな」

杉「じゃあ、何で見張り何だよ」

銀「ん？そりやあ、書類仕事がめんどくさいからだろ？」

風「お前、また部下に書類を任せているのか？」

銀「やつべ、逃げるんだよー」

風「今回は見過ごせないぞ、銀杏！」

そう言つて、二人は飛び去つていった

杉「まあ、よくわからないが取り合えず 能力使用 操るもの 種族 対象 自分

変更先 白狼天狗 マニピュレイト」

そういつた後、俺の姿が変わつていき黒い耳と黒い尻尾を生やした天狗に変化した

紫「？天狗にそんな種族ありましたっけ？」

杉「あれ、白狼天狗つて言つたのに。俺の特性上こうなのか？まあ靈力に妖力に魔力持つてたらこうなるか」

紫「へえー、そうなんですかー」

風「ふう、やつと捕まえた」

銀「チクショー、今日は逃げれると思ったのにー」

俺が変わったそのすぐ後に風雅と銀杏が戻ってきた

風「白狼天狗が鴉天狗に勝てるわけがないだろう、つでその黒いのは………杉本か」

銀「うおつ！なんか結構雰囲気変わったな、えつと天狗にこんな種族あつたっけ？」

風「いや、ない。杉本、それはどういった種族だ？」

杉「うん、俺的には白狼天狗なんだがな、俺の特性上こうなつた」

銀・風「特性？」

杉「ああ、俺は神力を除いた三つの力を持つてるからな。正常な白狼天狗にはなれなかつたんだろうな」

風「だが、他の者は信じないと思うが」

銀「そうだな、まあなんとかなるだろ」

杉「よっしゃあ！山に住むとか初めてだからなあ、わくわくしてきた！」

銀「子供か！まあいいや、俺たちは歓迎するぜお二人さん」

こうして、俺と紫の妖怪の山での生活が始まった

第五話 青年、山に住む

前回のあらすじ

杉「俺は黒狼天狗の杉本智だ」

前回から2週間経った

住み始めてからは、やつぱりと言うか案の定と言うか、迫害を受けた

やれ、異端児だとか、白狼天狗の恥だとか色々、まあ隠してあるとはいえ俺の身の内にある膨大な靈力に気づかないとは迫害した中には大天狗もいたのに気づかないとか、それでも天狗の中では力が強い方なんですかねえ

とか考えてるけどぶっちゃけ言ってどうでもいいんだけどね

だって種族的に言うとな俺白狼天狗だもん。白鴉天狗とかじゃないしな。なんだ白い鴉って

風雅とか銀杏とか、風雅の娘の文や銀杏の娘の椀とか、紫とかいるから孤立はしてない……………多分

杉「はあ、めんどくせえな、今日も見回りかよ、はあまさか、風雅たち以外全員から除け者にされるとはな」

はっはっは、後一年もすればブツつんしそうだなあ

杉「しゃあねえ、行くとするかめんどくせえけど」

俺は、愚痴をこぼしながら俺は肖戒天狗の正装に着替えて、仕事に向かった

狗「ちつ、てめえとかよ」

俺が待ち合わせ場所に来るといきなり舌打ちと悪態をついてきた

杉「俺で悪かったな、でも今は仕事だ私情を挟むな、その辺はわかっておけよ」

狗「ちっ！わかつてるさ、仕事を始めるぞ」

杉「ああ、そうだな」

はあ、全くめんどくせえよ

その日の見回りは何事もなく終了した

おかしいな、いつもなら至るところから攻撃が飛んでくるんだけどなあ

杉「風雅に聞いてみるか」

狗「おい、私語は慎め」

杉「あいあい、わかったよ」

まあ、この日の見回りは特に何もなかった

杉「というわけで、風雅の屋敷にきた」

？「あ、牙狼だー、どうしたの？」

風雅の屋敷についたら幼女が近づいてきた

こいつは『射命丸文』名前でわかる通り風雅の娘だ

杉「おお、文か元気だったか？」

文「うん！」

杉「そうか、それはよかったよ、そうだ文、風雅いるか？」

文「お母さんなら奥の仕事場にいるよ」

杉「そっか、ありがとうな文」ナデナデ

俺は風雅がいる場所を教えてくれた感謝を籠めて頭を撫でてやる

文「うにゅ……………♪」

文がくすぐったそうに目を細めている嬉しそうだ

かわい、ロリコンじゃなくてもそう思う

杉「じゃあ、ちよつと行ってくるわ」

文「あ……………」シユン

文がしよぼーんってなった、いや本当かわいい、帰るときもこことおるのに

杉「おーい、風雅ー、邪魔するぜー」ドゴツ

風「はあ、何故扉を壊して入ってくる……………」

杉「そんなの簡単だ、開けるのが面倒なだけだぜ！」キリツ

風「はあ、で何用だ？私は忙しいのだが」

杉「いや、実は今日の見回りの時にな攻撃が飛んでこなかったんだ」

風「いつもは飛んでくるのか?！」

杉「あれ？言ってなかったっけ？」

風「そんなことは初耳だぞ！」

銀「くくく、おいおい牙狼、それは俺も初耳だぜ？」

杉「あれ、そうだったけ？まあ、色々使って避けてるけどな、その辺は大丈夫だぜ」ケラケラ

銀「くくく、笑い事じゃねえがまあその事実を聞いて答えられる解答は……………くくく、2週間でも信用されるとはな、すごいやつだぜ」

杉「俺は何もやってないんだが……………」

銀「ケケケ、そうだったか？確か前に白狼天狗の里に来た妖怪の山の外から襲いに

来た妖怪を撃退したって聞いたが」

杉「なっ、どこでそれを？」

銀「俺のところに報告に来たやつがいつてたぜ『あの異端児が襲ってきた妖怪を撃退しました』ってな『本当に種族が違うだけで迫害するのはいいんでしょか』とも言うてたっけな」

杉「……………ふふ、まあそれでも悪態つくやつはいっぱいいるがな、今日の仕事一緒だったやつとかな、多分あいつ鴉じゃねえかな」

風「鴉天狗は規則に厳しいやつが多いのでな」

銀「確かに、風雅みたいなのは稀だよな、まあ白狼天狗は回りがやってるからっていう理由が多いがな」

杉「白狼天狗は自由だな」

銀「ほらほら、早く里に戻ってみんなと仲良くしてこいよ」ニヤニヤ
杉「くくく、俺がそんなやつだとしても？」

銀「思わねえな、まあいいじゃねえか早く行ってこいよ」

杉「……………そうだな、今日はもう暗いから帰るとするよ、じゃあなまた明日」

銀「ああ、また明日」

風「ああ、おやすみ」

杉「ふう、さて帰るか」

? 「……………」キヨロキヨロ

杉「ん、あれは、椀、ここで何やってるんだ?」

椀「!あ、牙狼さん」

こいつは『犬走椀』例の如く銀杏の娘だ

杉「もう、外は暗いぞ、いい子は寝る時間だぞ」

椀「お父さんがここで待ってるって」

杉「銀杏、何考えてんだよ」

椀「牙狼さん、お父さんは?」

杉「ん? 風雅のどこにいるぞ? 部屋の前で待ってれば出てくるだろ」

椀「うん、わかった、バイバイ」ノシ

杉「ああ、おやすみ、椀」ノシ

椛 「おやすみなさい、牙狼さん」

椛はそう言ってから、風雅の部屋に走っていった

杉 「……………帰るか」

俺はこのあと普通に帰って寝た

明日に何があるのかを考えながら

第陸話 青年、鴉と喧嘩する

前回のあらすじ

杉「文と椀がかわいい（確信）」

前回から二日後、俺は白狼天狗の集会場にいる

昨日は取り合えず、確かめもかねてお隣さんを尋ねてみた
驚くべきことに対応は普通のものだった

まあ、前まで仲間はずれにして悪かった等々謝られたが、そこまで気にしてない
杉「で、何これ」ポリポリ

俺は頭を掻きながら、この現状の説明を求めていた

集会場では、絶賛宴会の真つ最中であつた

杉「どうしてこうなつた」

俺の周りには、酔い潰れた同僚が倒れている

確かあれは今までの態度の改めも込めて集会場で俺の改めての歓迎会？のようなのを開くつて言われて、集会場に来てみれば、すでに宴会は始まつていた

倒れたものはいなかったが、俺が来たことによるテンションupにより俺と飲み比べをしはじめて俺はその辺の酒じゃ酔わないからみんな酔い潰れて倒れまくつたんだつた

杉「はあ、どうなつてんだよ」

てゆーか、俺の歓迎会とかいつ以来だよ

鴉1「へっへっへ、こいつらこんなやつのためにはか騒ぎしてんのかよ」

鴉2「わらつちまうぜ」ゲラゲラ

鴉3「おい、馬鹿野郎、起きたらどうすんだよ」

俺は寝てすらないんだけど、まあいいかちよつと気分良いから相手してやるか

杉「なあ、鴉さんや、誰をお探しですかねえ？」

鴉1「ああ？牙狼っていう白狼天狗なんだがつて、てめえが牙狼か!？」

杉「くくく、気づくのおっせ」

鴉2「捕まえろ、こいつを大天狗様の御前につき出すのだ！」

鴉1・3「おうよー！」

鴉天狗の三人組が襲いかかってくる

杉「うーん、素手は慣れてないんだけど、殺るしかないか」

俺は遅いかかってくる三人を追い払うために、構えた

く 三人称視点く

智基、牙狼対鴉天狗三人組のバトルが始まった

鴉1「食らえや！」

鴉1が殴りかかる

しかし、牙狼はバックステップをしたあと鴉1の後ろに回り込んでいる

杉「ほらほら、がら空きだぜ！」

牙狼は鴉1の背後回り込んだあと、鴉1の背中に三発拳を打ち込んだ後外に投げ出す

杉「お前らもだ」

突然の出来事に呆然としていた鴉2・3も外に投げ出す

杉「くくく、ここなら好きに暴れられるぜ」

ここから牙狼の一方的な虐殺が始まる

杉「おら、最初はお前だ！」

牙狼は鴉1に襲いかかる

鴉1は突然の出来事に避けることができなかつた

杉「食らえやおらあ、魔神拳×5！」

牙狼が拳を勢いよく振り上げると衝撃波が鴉1に向かって地面を這って飛んでいく

(五発)

鴉1「ぐわあああああ！」

鴉1は攻撃が避けれずに当たってしまい気絶する

鴉2「な、こいつつええ」

鴉3「おい、二人がかりでやるぞ」

鴉2「お、おう！」

鴉2・3が左右から襲いかかってくる

杉「へっへっへ、攻撃が単調だぜ？」

牙狼はそう呟いた後、拳を地面に叩きつけて衝撃波を出す
杉「衝波魔神拳！」

これにより左右から襲いかかってくる鴉2・3は衝撃波により吹き飛ばされる
鴉2・3「ぐああああああ!!」

これにより戦闘終了

牙狼対鴉三人組

w i n n e r 牙狼

＼牙狼（智）s i d e＼

杉「ふう、終わった終わった」

白一「おい、牙狼、何かすごい音がしたんだけどどう、したん、だ？」

白狼天狗の一人が先の騒動で目が覚めて、見に来たらしい

杉「あ、すまん起こしてしまつたな、ちよつと邪魔者が俺を捕まえに来たみたいで」

白一「そ、そうか、ところでお前さん怪我はねえのかい？」

杉「ああ、心遣い感謝する、問題ないから心配はいらない」

白一「そうかい」

杉「じゃあ、ちよつくらこれらを鴉の里に送つてくるんで、おやすみなさい」

白一「おう、おやすみ」

心配してくれた白狼天狗に挨拶してから三人を抱えて鴉の里に向かった

杉「ついでに大天狗の所に行ってみようかな？」

俺は三人を鴉の里の入り口に棄てて、

白狼天狗の里に帰った

杉「ふう、今日は色々あったなあ」

特に鴉天狗三人組の襲来とか（笑）

まあ、案外つまらなかったな

そう言えば結局大天狗のとこ行ってなかったな。まあいいや
さて、明日はどんなことが待ってるのかなあ？

第漆話 青年、鬼と戦う

前回のあらすじ

杉「デジャブを感じた」

前回から十年はたった気がする

前回もこんな始まり方だった気がする

駄（気にするな！）

何かいた気がするが気のせいだろう

まあ、十年でいろいろあった

まずは紫、紫は先月辺りに一人旅に出た

紫の修行風景はカットしている

何故かって？あいつが毎回毎回戦闘シーンを書けるとでも？

まあ、なんやかんやあって紫は旅に出た

んで、山での信用度なんだが現状を説明しよう

現在宴会の真つ最中である

前回の展開と何一つ変わってない

驚きだ、え、何これ二度あることは三度ある？

で、鴉天狗との関係なんだが

鴉「牙狼！こつちこいよ！うめえぞ、この酒！」

どうしてこうなった

ん？誰かが俺の肩を叩いている

杉「誰……………だ」

？「やあ、牙狼一緒に酒飲もうじゃないか」

振り向いた先にいたのは、赤い角が額から生えていて、服装は長いスカートに体操服

と言う格好、わかる人にはわかる

そう、鬼の四天王の一人『星熊勇儀』だ

杉「はあ、今日も鴉天狗の態度は軟化するよりも硬化していつてる気がする

まあ、鴉の中でも態度が軟化したやつもいるにはいるがむしろ軟化してないやつの方が少ないんじゃないだろうか」

まあその軟化してないやつって言うのはほとんどっていうか主に大天狗よりの思想の持ち主もだな

とかなんとか考えていると

ドゴオオオオオオン!!

突然、遠くから爆発音が聞こえてきた

杉「?!なんだこの音は！」

多分向こうの方だな、行ってみるか

俺は家を出て、音の発生源の場所に向かう

杉「なっ！どうなってやがるこれは！」

音の発生源は、深く凹み月にあるクレーターのようになっていた

杉「一体誰がこんなことを……………」

勇「おや？あんたは他の犬つころとは違うみたいだねえ」

後ろから突然声をかけられて、思わず前に転がり距離をとって臨戦体勢に入る

勇「おやおや、そんなに警戒しなくてもいいじゃないか、私は星熊勇儀って言うんだ、あんたは？」

杉「……………牙狼だ」

勇「へえ、牙狼って言うのかい、じゃあ牙狼なんであんたは犬耳生えてるのに髪は黒いんだい？」

杉「……………種族が黒狼天狗だからだ」

勇「黒狼天狗？なんだいそりゃ」

杉「……………元々俺は人間であつた、だが俺は能力で白狼天狗にしたんだが。俺の特性上こうなつた」

勇「そうかい」

杉「こつちから質問だ、何故この山にきた？目的はなんだ」

勇「ううん、目的かあの山を乗っ取りに来た」

その言葉を聞いて、一気に警戒心をmaxに上げておく

杉「ちなみに聞くが、何人で来た？」

勇「あたし含めて三人だよ、さてとどつかで萃香や母様も始めてる頃だろうから、こつちも始めるとするよ！」

杉「……………何を？」

勇「決まつてるだろう、勝負だよ！」

その言葉と同時に勇儀が突っ込んできた

く三人称視点く

牙狼と勇儀の戦闘が始まった

まず仕掛けたのは勇儀

勇儀は一気に牙狼に近づき、拳を振るう

牙狼はなんとか避けるが、振るわれた拳の風圧により吹き飛んでしまう

杉（嘘だろ!? 避けたのに風圧だけでここまでの威力があるのか!?)

牙狼はすぐに体勢を立て直して、勇儀に向かう

牙狼は腰に携えた二本の両刃剣を忍者刀のように持って切りかかる（TOX2ルド
ガ―風）

杉「食らえ！舞斑雪！」

そのままの勢いで切り抜けようとするが……………

勇「おっと、危ないねえ」

杉「なん……………だと……………！」

勇儀は剣を素手で掴み技を阻止した

勇「ほらほら、どうしたんだい？」

杉「くっ！」バツ

牙狼は能力で腕力を操って、限界まで高めて勇儀を引き剥がした

勇「おっと、へえなよなよしたやつだと思ったら結構力あるじゃないか」

しかしそうは言っても限界まであげてやっと引き剥がせるのだ

鬼の腕力は計り知れない

勇「さあさあ、今度はこつちからだよ！」

その言葉を聞いたときには勇儀はもう目の前まで来ていた

杉「!!くっ!!」

牙狼はなんとか避けるがやはり風圧により吹き飛ばされてしまう

牙狼は考える、どうやって勇儀の攻撃の隙間を縫って攻撃を当てようかと

杉「……………まだ未完成だがやってみるしかないか」

牙狼がやろうとしていることは、TOX2で言う骸殻である

骸殻の殻を妖力等で形にできないかと考え、修行してきていた

まだ未完成ではあるが、やってみる価値はあると考えたのだ

杉「よっしゃあ、やってやるぜえ!」

牙狼が意気込むと妖力を練り始める

勇「おや、何かするきかい?させないけどね!」

勇儀が練り終わるのを待つてくれるはずもなく突っ込んでくる

杉「くそっ!第一形態までだが、やるしかない!時間もねえしな、はあああああ!」

キューーン

勇儀の拳が牙狼に届こうとしたその瞬間、牙狼が光始めた、目も開けられない光の大

きさで勇儀はバックステップして距離を取り、様子を見る

勇「何が起こったんだい?」

光が収まると、体の一部が殻に覆われた姿の牙狼がいた

杉「骸殻、第一形態発動」

骸殻には専用の武器があるTOX2ルドガーならば槍、ユリウスならば剣
牙狼（智）の場合はガントレット、つまり手甲（素手に近い）である

杉「さあ、第二ラウンドといこうぜ」

勇「面白いねえ、来なよ！」

黒狼天狗牙狼対鬼の四天王星熊勇儀の勝負は始まったばかり

第捌話 青年、鬼と戦う 後編

前回のあらすじ

杉「デジャブってこんな頻繁に起こるもんだっけ？
鬼の硬さは異常」

く 三人称視点く

杉「行くぜ！」

勇「来な！」

牙狼と勇儀が衝突する

衝突した衝撃で地面が抉れ、木々が吹き飛ぶ

両者の力は拮抗している

お互いの攻撃を弾き、距離を取る

勇「なんだい、その姿になつてずいぶん力が上がったじゃないか、何をしたんだい？」

杉「簡単なことだ、妖力で一部を覆って身体強化しただけだ」

勇「なるほどねえ、だったら今以上に楽しめるねえ！」

勇儀が笑いながら、突っ込んでくる

勇儀のラツシュを避けながら隙を窺う

杉「ここだ！掌底破！」

牙狼は勇儀の体の中心に向かってかなり強めの掌底を打ち込む

勇「くっ！」

勇儀はとつきに重心を後ろに取ることで威力を抑えたが、結構効いたみたいである
勇「くくく、今のは効いたよ、かなり強い掌底だね」

杉「おいおい、さつき結構本気だったんだが………足りないか？」

そんな言葉を言いつつも、両者は衝突しお互いの攻撃を相殺しあっている

杉「おらおらおらおらおらおら!!」ドガガガガガガ

勇「うらうらうらうらうら!!」ズガガガガガガガ

両者の均衡は崩れない、しかし勝負は一気に動き出した！

勇「!?おっとと」ヨロヨロ

勇儀が地面につまずきよろけたのだ

杉「もらった！臥狼砲虎！」

牙狼は勇儀の顎を蹴りあげ、そのまま勢いをつけて踵落としをしたあと、地面に手を
着き衝撃波を出す

勇「ぐっはっ！」

勇儀が吹っ飛び倒れるが起き上がってくる

勇「くっ！かなり効いたよ、今の、でもまだまだだね」

杉「何言ってるんだよ、俺の攻撃はまだ終わってないぜ、いくぞ！天破、地砕！拳砕

けても、開く！殺劇、武荒拳！」

牙狼は勇儀に回し蹴りをして飛ばし、即座に後ろに回り込み、殴る、回り込んで殴るを繰り返し、最後は力を溜めた一撃を食らわせた

勇「ぐわああああああ」ドサツ

ついに勇儀は地に伏した

s i d e o u t

＼智 s i d e ．

杉「ふう、やっと終わったか」

勇「ははは、負けたのはいつ以来だろうねえ」

杉「ははは、俺もう限界だ、一步も動けねえ」

俺は勇儀の隣に仰向けに寝転がる

勇「いい勝負だったよ、あんた強いね」

杉「そりやどうも、勇儀のほうが強いさ、あそこで勇儀がよろけなけりややられていたのはこつちだったかもな」

勇「くかか、さてどうだかねえ」

さつきまで戦っていたとは思えないくらいの温かい雰囲気です喋っていると

白「おーい、牙狼！大丈夫かー!?」

杉「お、白狼天狗のみんなだな、おーい、俺は無事だー！」

白狼天狗のみんなが降りてくる

俺もそこそこ回復したので起き上がる

白「おいおい、ホントに大丈夫かよ!？」

杉「大丈夫だって、それよりもこいつ手当てしてやってくんねえかな」

白「はあ? って、こいつ鬼じゃねえか! なんでこいつを……」

杉「いいから」

勇「いいよ、あたしはこんな傷はすぐに治るさ」

杉「駄目だ、ちゃんと治療して安静にしねえと駄目だ、というわけで頼んだ」

白「あ、ああ、わかった」

白狼天狗の一人が勇儀の治療をしていると

鴉「おい、牙狼! 大変だー、鬼の頭領が風雅様に勝ったから、この山は鬼のものになっちまった!」

勇「へえ、さすが母様だ」

杉「それで、風雅の容態は?」

鴉「それが、ひどい怪我なんだが死んでねえって感じで気失っているんだ」

杉「そうか、だったら傷の手当てをして、絶対安静だ」

鴉「わかった」

鴉天狗は風雅の元に飛んでいった

おそらくこれで大丈夫だろう

杉「そう言えば、勇儀、お前らは山を乗っ取りに来たんだろ？何故、風雅を殺さないんだ？」

勇「さあ、母様の考えていることはわからないよ、ただ共存したかったんじゃないかな」

杉「なるほどな」

その後は、何人かの白狼天狗に運んでもらい、安静にしていた

まあ、その時に鬼子母神の椎名小夜と四天王のもう一人伊吹萃香に出会った

驚くべきことに、その二人とも怪我をしていたことだ

小夜はおそらく風雅とやってできた傷だろう

萃香の方は、考えて有り得る可能性は銀杏だけだろう

あいつも強いんだな、さすがは白狼天狗の頭領だな

で、前回の冒頭の話に戻るんだが、このときに小夜が『鬼と天狗の共存祝いで宴会しよう』と言ったことでああった

俺はどんちゃん騒ぎは嫌いじゃないが騒がしすぎるのは考えものである

そんなことを思いながら勇儀と飲み比べを始めた

萃「おや、勇儀とあの黒狼天狗の牙狼が飲み比べし始めたよ」

風「ほう、これはどっちが勝つかみものだな」

小「ほらほら勇儀、天狗に負けたら承知しないわよ！」
銀「おらおら、牙狼！天狗のすげえとこ見せてやれ！」

さすがは妖怪と言ったところか、昨日今日で完全快復して、酒を飲んでいらつしやる
風雅も銀杏もテンションMAXだ

やれやれ、負けれなくなつたじゃねえか

俺はそんなことを思いながら勇儀との勝負に集中する

かなり長い時間が経ったかも知れないし短かったかもしれないが、この時間はかなり
楽しい時間だ

勇「ぶはっ！もう、無理だー」バタツ

杉「ふう、どうやらこっちでも俺の勝ちのようだなあ／＼／＼」

勇儀対俺 飲み比べ勝負

w i n n e r 牙狼

第玖話 旅再開、去らば妖怪の山

前回のあらすじ

杉「勇儀、強かったなあ」

小夜たちが来てから、十年くらい経った今、ある情報をゲットした
その情報とは

杉「そろそろだな、人間が集まって都を作ったから旅再開させねえとな」

そう、今はここから結構行ったところ。と言つても二三十キロのところに都ができてそこに絶世の美女がいるって噂がある。この時期は平城京だったはずだ。だから竹取物

語の舞台でかぐや姫が月から降りてきたって話だ。

でもかぐやもしくはかしくなくても輝夜だよな。まあ確認すればいい話だ。

風「なんだ？もう旅を続けるのか？」

杉「そうだな、いつまでもこのままじゃ行けねえしな」

風「だったら皆にお前の正体を曝さねばな」

そうなのだ、俺は今まで皆に黒狼天狗だと偽りこの山に住んでいたのだ

杉「そこはわかっている、どんな断罪も受ける覚悟はできている」

風「いい覚悟だな、では全員を呼び出すぞ」

杉「おう、やって来れ」

風『山にいる全種族に告ぐ、直に私の屋敷の前に来い、牙狼から話がある』

これでいいんだ、これで俺は旅を再開できる

〈数時間後〉

ガヤガヤ、ヒソヒソ、バラバラ

杉「みんな集まったな、よし」

俺は気合いを入れて、壇上に立つ

杉『えー、皆様お忙しい中集まっていただけ感謝を申し上げます、この度呼び出した訳とは、私はもとより天狗ではございません、私は能力により人間から天狗になったものでございます』

皆が騒がしくなるなか、一人が聞いてくる

銀「じゃあ、今までののはなんだったんだ？」

事情を知っている銀杏が聞いてきた

杉『今まで騙っていたのは悪いと思っています、しかし、この山で過ごした日々の俺は演技ではなく本心で生きていました、白狼天狗の皆さんとやった宴会に、鴉天狗と喧嘩した時や、勇儀と戦った時も全部俺だった、だからこの事を打ち明けるのもかなりの

抵抗があつたんだ、だが俺は世界をこの目で見たい、だからこんなところで立ち止まつてなんかいられないんだ、だからみんなの断罪なら受けよう、俺からは以上だ」

会場みんなが静まりかえるなか、一人の鴉天狗が声をあげる

大「殺せ！」

最後まで俺のことを認めなかつた大天狗一派だ

鴉1「そうだ！そんなやつ殺しちまえ」

杉「ああ、やるんなら好きにしろよ、但し『一回だけ』だからな？」

鴉2「へっ！お望み通り殺つてやるよ！死ねえ！」

鴉2は俺の首を切り落とした

鴉2「ひやはははは、やったやったひやははは………は？」

鴉2の笑いが消える、何故なら

杉「気はすんだか？なら俺はいかせてもらう」

鴉2「な、何で生きてやがる!？」

杉「言つただろう？一回だけだぞつてくくく、じゃあなくず野郎」

俺はそう言い残して、山を下りていった

文・椛 「牙狼さーん！」

山を降りきつてきて都に行こうとしたときに、文と椛が降りてきた

杉 「どうしたんだ？お前ら」

文 「いやー、ちよつと別れの挨拶をと思ひまして」

椛 「はい、牙狼さん、さようなら、また会えたら会いましょう」

文 「私、必ず立派な天狗になって見せます！」

杉 「ああ、またな、あそうだ、俺の本当の名前を教えよう、俺の名は杉本智だ、また
な文、椛」

俺の妖怪の山生活は幕を閉じた

智の設定 妖怪の山編

名前・・・杉本智

妖怪の山では牙狼と名乗る

種族・・・黒狼天狗（この章だけ）

年齢・・・二億一千万とちよつと

性格・・・昔から何も変わらないが、日に日に残忍さが増してきている最近ではすぐに殺さず少しいたぶつてからじつくり殺すというのが主が、根つこの方は変わることなく仲間と認識している者に危害を加えるまたは自分に危害が加わるならば容赦はしない

外見・・・妖怪時・髪は黒く犬耳が生えている

腰辺りから黒い尻尾が映えていて、天狗の翼は鴉のように黒い

人間時・特に変わりはない

骸殻時・第一形態時の装備 腕は肘の少し手前まであるガントレットに顔には妖力で作ると赤黒い模様が、霊力で作ると青白い模様が出てくる

足は右足だけ殻がついている

装備の色は作る力によって変わってくる

妖力なら赤黒、霊力なら青白になる

魔力では作れないようだ

まだ上の形態があるみたいだが？……………

服装・・・妖怪の山に入る前はかわりなくユリウスのコートを黒に、シャツを暗い赤にしたような服を来ている

なお、能力で汚れがつかないようにしているようだ

妖怪の山で生活中は棍が来ているような肖戒服の色を逆にした感じでスカートがズボンになっている

戦闘スタイル・・・剣や刀が主、最近忍刀二刀流をよく使う

創る隙が無いときは素手で戦う（妖力や霊力による強化済みである）

弓も最近上達してきた、今なら千メートル離れた場所の標的にも正確に射れるように

なった

属性付与も会得、しかし弓はツーマンセルやスリーマンセルの時の後衛で使う武器で
タイマン勝負ではあまり使わない

どうやら、近代武器（特に銃等）は苦手なようだ

能力・・・智の持つ二つの能力、転生したときに神に貰ったもの

『ありとあらゆるものを創造する程度の能力』

二次創作では何度か見たことある能力

名前の通り何でも創ることができる

能力を創る際に宣言が要らなくなった

『ありとあらゆるものを操る程度の能力』

名前の通り何でも操れる、東方の世界に転生したときに神からもらった能力

こちらも操るものの宣言をせずに能力の使用が可能になった

操りたいものを思い浮かべれば操れる

なお、霊力で出した炎等は出せるだけで自由自在に動かせない（後に出てくる妹紅は別）ので能力で操っている（修行すれば自在に動かせるがめんどくさいのでやらないだ

け)

劍技・術・技・奥義・・・説明略

『魔神拳（劍）』

地面すれすれのところ通らせるように拳を振り上げて、衝撃波を出して攻撃する連続で出すことも可能

また、劍を使っても出せる

『衝波魔神拳』

前述した魔神拳の360度攻撃できるようになったやつ

拳を地面に叩きつけて、衝撃波を出す

これから奥義に繋げることも可能

『舞斑雪』

忍者刀二刀流の持ち方で相手に突進してそのまま切り抜ける、斬撃技切り抜けて、折り返し切り抜けることも可能

しかし、勇儀はこれを素手でつかみとった

『掌底破』

相手の体の中心つまり心臓部に強烈な掌底を打ち込む技
良くて肋骨を折る程度ですむが、最悪の場合死に至る
勇儀はこれを受けて異常もなく立ち上がった

『臥狼砲虎』

相手の顎を蹴りあげて、その状態で踵落としを食らわせて落ちる勢いを利用して前方
に衝撃波を出す

これを食らってもなお勇儀は立ち上がった

『殺劇無荒拳』

相手に回し蹴りをして飛ばし、即座に後ろに回り込み殴るを繰り返して、最後には力
をためた一撃を相手の腹に沈める

思い浮かべるのはTOX、TOX2のジュードの秘奥義だ

これを食らい、勇儀は地に伏した

第肆章 竹取物語編

第壹話 到着、なんと綺麗な平城京

前回のあらすじ

杉「妖怪の山での暮らしは楽しかったぜ」

皆さんどうも、いつも通りの杉本智だ

前回は山を出たがそこから約五十年は経った気がする

ん、時間が飛びすぎだつて？俺に言うな作者に言え

まあなんやかんやあつて五十年が経つた

んで、何やつてるかつて言うよと……

杉「おお、此処が人間が作った都か、確か今は多分七百十何年くらいだから『平城京』だな」

ん？なんでここに来たかつて？いやあ実はこの都の近くの村で「都に絶世の美女がいる」って噂を聞いてやつて来たわけだ

まあ、皆わかると思うが、あの有名な竹取物語の『かぐや姫』だ

本編ではカットされているが一応俺はかぐや姫だと思われる人物に会っている

それが『蓬萊山輝夜』だ、まあ何度か子守りを頼まれたが素直に言うよと滅茶苦茶我が儘だったな

まあそれはそれで楽しかったがな

あと俺は断じてロリコンなどではないのでなそこところ間違えないように

まあ会いに来たつていつても入れなければ意味がないので、門の方に行つてみた

杉「あのお、すみません」

門「ん、なんだお前は」

杉「いえ、自分旅の物者でしてここに絶世の美女がいると聞いて来たのですが

……………」

門「ああ、かぐや様のことか、なるほどいいだろう、入れ」

杉「ありがとうございます」

門「しかし、今は貴族の方々が求婚しに行かれるから会えるかはわからないぞ」

杉「そうですか、忠告ありがとうございます」

門「ああ、気を付けてな」

ああ、いい人でよかった、妖怪の山の頑固とは大違いだな

さて、貴族が求婚つてことは難題を出す頃だろうなあって、あの列だろうな

……………紛れ混んじまえ

俺は巨大な屋敷の前にできていた行列（と言っても五人だが）の後ろに並び、屋敷の中に入るとするか

そこで、俺は一番後ろにいた貴族に話しかける

杉「お忙しいところすみません、お聞きしたいことがあります」

？「なんだ」

杉「ここのお屋敷は噂になられているかぐや姫様の屋敷でしょうか」

？「ああ、そうだが……貴様は」

杉「申し遅れました、私旅をしていて『小倉坂春風』と申します、以後お見知りおきを」

？「ほう、旅かそなた後で私の屋敷に來い旅の話を聞きたくてな」

杉「は、はあ」

不「そうだ、名乗っていないかったな私の名は『藤原不比等』だ、よろしく」

杉「よろしくお願ひします、不比等殿」

そんな会話をしていると、不比等の後ろに子供がいるのが見えた

杉「その子は」

不「ん、ああ私の娘だよ、ほら妹紅挨拶を」

妹「……………『藤原』……………妹紅』……………です」

不「はっはっは、この子は人見知りか激しくてね、初対面だといつつもこうなるんだよ」

杉「そうなんですか」

まあ、だいたい察しはついていたさ、原作キャラの妹紅だとはね

それと、こいつ不比等だっけか？なんか気持ち悪い。いや見た目がどうこうじゃない

んだ、こう雰囲気と言うかなんと言うか。まあうまく説明できないけどなんか変だ。一
応警戒はしておこうか。

門2 「それでは、どうぞお入りください」

不 「おや、入れるようだな、では」

杉 「いえ、私もかぐや姫様に求婚しに来た次第で中に入れていただきます」

不 「ほう、そうか頑張りたまえ」

さてとこいつのことは置いといて、あのガキだった輝夜は大きくなつたのかなあ？

第弐話 再開、蓬萊山輝夜

前回のあらすじ

杉「貴族に話しかけたら偶然、不比等だった」

前回、かぐや姫の屋敷に入れたところで終わつたな

まあ、ここでは入れなくても夜に来ればいいだけだしな

さて原作の竹取物語では五つの難題だが、俺は何を頼まれるだろうか

うーん、二次創作系では太陽の畑に行つてそこにいる妖怪を退治してこいつて内容が一番あつたよな、じゃあそれか？

どうでもいいけど、さて門番さんに案内されてやつて来たのが何て言うのかな？こ
う、畳の間で入り口から正面に向かつて少し高くなつたところで何ていつたらいいんだ
ろうか、でつかい簾みたいなやつが垂れててその向こう側にかぐや姫がいる

「説明下手ですみません」

作者がなんか謝っているが無視しよう

さて、かぐや姫が順番に難題を出していつて出されたやつはみんな出ていつて、俺の
番になつた

杉「私は何を持ってくればよろしいので」

輝「そうねえ、あなたには忍術の『雷切』もしくは『千鳥』を私に見せてください」

杉「は、はあわかりました、と言うか今やつてもいいでしょうか？」

輝「……………へっ？」

杉「今やつてもいいでしょうか？」

輝「え、ええできるものなら」

杉「わかりました、では」

俺は手を上に向けてまずは靈力を乱回転させて球を作り、それに靈力を変化させた雷を纏わせる

これは昔、俺が輝夜に教えたものだ覚えていたとは思わなかったがな

輝「これは、あなたは一体」

杉「あの、もういいでしょうか」バリバリ

輝「え、ええいいわよ、それじゃあ私はあなたと」

杉「別に嫌なら嫌でいいですよ？」

輝「え？」

杉「いえ、こんな形で婚約ってなんかすぐに破綻しそうでね、じゃあ私は帰りますね」

輝「！待って、あなたの名前は」

かぐやが簾みたいなやつを巻くって顔を見せて名を聞いてくる

それにしても大きくなって

杉「私は小倉坂春風、以後お見知りおきを」

輝「そう……………」。

杉「ん、何か言いましたか？」

輝「いえ、何でもないわ、あ、そうだあなたに難題を出さなければ他の貴族が怪しむでしょうから、一応出しておきましょう」

杉「そうですか、では私は何を……」

輝「あなたには太陽の畑に住む妖怪『風見幽香』を退治し、その証拠を持ってきてもらいます」

杉「了解しました、では私は帰りますね」

やつぱり来たか、幽香退治、まあやらないけどね

そうだ、このあとは不比等の家で旅の話をしなきゃならないんだったな
早速いくか

てな感じで不比等の家に行こうとするが、俺は重大なことに気づく

杉「俺、あいつの家知らなくね」

こんな感じでもいいのだろうか

次回に続く

第参話 始動、陰陽屋春風

前回のあらすじ

杉「輝夜が成長したと思ったら変わってなかった」

はあ、前回輝夜に会って難題を出された、まあお決まりの幽香を退治して来いって難題だな

いや別に太陽の畑に行くのはいいんだが、幽香って噂（妖怪の中での）ではかなり友好的だつて聞いたことがあるからなあ、無暗に退治はしたくないんだがなあ、でも人間の間では畑に入ったら襲われたつて人がいるからなあ

そうだ、あの後その辺ぶらぶらしてたら妹紅が変なやつに絡まれてたから助けたら、不比等がきた

何でも妹紅がどっかに走っていくから探してたんだと

その後は不比等の家に招待されて旅の話をいくつかした

不比等は大層機嫌がよかつたな、俺の旅の話はそんなに面白いかね

まあいいや、そんなことより俺がこの都でやつてることはとうとうと……

都の民（都と表示）「すみません、最近開いた陰陽屋とはここですか」

杉「ええ、ここで合っていますよ、依頼ですか」

都「はい、最近この都の近辺に出かけると妖怪に襲われてさらわれた人がたくさん出ているので退治してほしいのです」

杉「ふむ、そうですね……それはほかの陰陽師の方たちには相談されたんですか」

都一「はい、したはしたのですが……皆さん忙しいとのこと……」
杉「おいおい、それが都の人達守る陰陽師かよ……わかりました、引き受けましょう」

都一「ありがとうございます！」

杉「あつはは、まあ陰陽師ですし……まあ死なないように頑張りますよ」

都一「無理はしないように、ご武運を」

杉「心遣い感謝します、その妖怪の出没時間は昼過ぎくらいですね」

都一「はい、どうかよろしくお願いします」

杉「さて、では行ってきますねちょうど昼過ぎくらいですからね」ヨッコイセツト
はあ、この都での初仕事だ、気合い入れれいこうかね
えつと、確か入り口はこつちだったっけ？

く都
門前く

さてと、都の外に出て少し歩いたが妖怪の気配なんてどこにも………後ろになんかいるねえ、この気配は妖怪だな

ふむ、わざと捕まってみるかなここじゃあやりにくいしな

そんなことを思っていると、突然視界が暗転して何かに抱えられて宙に浮く感じがした

目が見えるようになったら、暗い洞窟の中にいた、周りからは音は『何も』聞こえない

さらわれた人たちは皆食われたのだろうか、それとも奥に繋がっていてそこに集められているのだろうか

まあいいか、どうやら奥に続いてるようだ、行ってみようか

〈青年移動中〉

洞窟の奥に来たが、ちらほらと声が聞こえてくる、おそらくさらわれた人たちだろう
杉「あの、大丈夫でしょうか？」

とりあえず声をかける

ビクツと何人かが飛び上がった気がする

被1「あんたも連れてこられたのかい？」

被2「可愛そうにまだ若いのに」

杉「いや、あの俺都以頼受けてあなた方の搜索をしに来たんですが……………」
「どうやら無事の様子ですね、明かり灯して大丈夫ですか？」

被3「あ、ああいいよ」

杉「では失礼して」シユボツ

俺は手を振って、火を手のひらに出す

提灯くらいの明るさだ、これで自分の周りは見えるようになったらう

これを工夫して、火を増やしてからこの洞窟の壁際に灯していく

そこにはいつ妖怪に食われるかわからない恐怖心で隅の方でガタガタ震える人々の姿だった

杉「無事………みたいですね」

被1「あ、ああ、でもなんでお前さんはここに来たんだい？」

被2「そうだ、他のやつは何かと理由つけて働かないんだ」

杉「いや、それは俺がつい最近始めたばかりで依頼受けないと来てくれないからですかね」

被1「そうかい、だったr「グルルルル」！やつが帰ってくるぞ」

杉「やつ？さらったやつですか？」

被1「あ、ああみんなこっちに！」

集まっていたうちの一人が小声で叫び皆を密集させる

被1「ほら、あんたも」

杉「大丈夫です、この程度退治できなくて陰陽師なんてやっていけないですよ、つと」
パリン

俺はそう言いながら持つてきていた

半径四センチくらいの球を割った

すると俺の体が光に包まれ、妖怪の山で使った骸殻の姿になった

前回使った時の反省を生かして、常時持ち歩けるように靈力や妖力で形態にあった大きさの球を作ったのだ

これを割ると瞬時になれるってことさ

杉「さあ、こいよ妖怪」

妖『グルルルル』

杉「おいおい、そんなに睨んでも、俺は退かない、よ！」ビュン
俺は妖怪がいつまでも睨んでくるので突っ込んでいった

第肆話 戦闘、獣型人喰い妖怪

前回のあらすじ

杉「来いや、妖怪！てめえなんか怖かねえ！」

〈第三者視点〉

前回、都の人に依頼を受けた智基、春風は早速都の外に出て、探索を開始したが途中目の前が真っ暗になり、謎の浮遊感に襲われた後に目が見えるようになる。そこは妖怪にさらわれた都の人たちが集まっていた。

さらわれた人たちが無事なことに安堵したのも束の間妖怪が帰ってきた。その妖怪を退治すべく春風は骸殻を使い妖怪と対峙する。

春風はガントレットで妖怪に殴るかかる

しかし、下級とは言え普通の人間（春風は封印によりただの人間より強いくらいにしている）よりも強い妖怪は難なく避けて、反撃に出る

妖怪はその鋭く尖った牙を剥き春風にとびかかる

だが、春風は妖怪の動きを読んでいたのか前に転がることによって回避する

杉「おいおい、下級のくせして結構いい動きすんじやねえか」クツクツク

妖『グルルルルルル』

妖怪は敵意を剥き出しにして睨んでいる

春風はそれに憶さず殴るかかる

当然、妖怪はそれを避けるが春風の狙いは避けたあとの若干の硬直を狙った攻撃であ

る

杉「おらあ！」ドゴオ！

妖『ぐあああう！』

妖怪は吹き飛ばされ洞窟の壁にぶつかる

しかしそれだけでは死なずまた妖怪は起き上がり、突進してくる

杉「おいおい、猪突猛進ってやつか？ちげえか・・・はあ！」ブン

春風は突進してくる妖怪を体を軌道からそらして避けた後、妖怪の顔にパンチを入れ

る

骸殻の上からさらに靈力で強化したパンチを受けて、妖怪を洞窟の壁まで吹っ飛んだ
後絶命した

s
i
d
e

o
u
t

杉「ふう、お仕事終了つと」

被一同『（。 ㇿ）』ポカーン

おやおや？被害者の皆さんがポカーンとしてらっしやる

どうしたんでしょうかねえ？

杉「どうしましたか」

被一「いや、その、あんたって強いんだな」

杉「うーん、でも他の陰陽師と比べればまだまだだと思いますが、靈力の量も結構違いますし、経験とかもいろいろ劣ってるんでね、まだまだ修行中ですよ」

まあその後は無事に都に送り届けて、依頼主に報告して初仕事はこれにて終了である報告を終えるともう辺りは暗くなっていたので、家に帰って寝た

明日には何が起きるかなあ、とか考えながら

初仕事から一週間経ったある日、輝夜邸での出来事をここに記そう
て言うかメインのこと終わって定数越えなかったから急遽入れただけの話

杉「はあ、なんで俺がこんなことしなきゃならねえんだ？」

俺が今向かっているのは輝夜の家と言うか屋敷に向かつてる

なんでかつて？そりやおめえ、依頼が来たからに決まってるだろ、詳しくは来たら話
すつて言われたから仕方なく輝夜の屋敷に行つてゐるつて訳だ

杉「たく、俺も暇じゃねえつてのに輝夜のやつ、まあいつか依頼は依頼ちゃんとしねえ
とな、つと着いたな」

相変わらずでけえなあ、おい

周りから軽く浮いてるぞ、これ

杉「すんませーん！依頼受けた春風つすけどー、入つていいすかー？」

輝「あら、よく来たわねいらつしやい」

杉「おや？姫様直々にお迎えですか？よほど暇なもので？」

輝「うるさいわよ！依頼受けたんでしょ？早く来なさい！」

杉「へーい、ところで姫様？依頼の内容とは？」

輝「ああ、私今日一日暇なのよ、だから今日一日私の暇潰しに付き合いなさい！」

杉「えー、めんどくせえ、帰らしていただきます」

俺が踵を返そうとすると、輝夜は俺の服の袖を掴んできた

輝「待ちなさい、これは建前よ私はあなたの正体が気になるわ」

杉「おや、なんのことです？」

輝「とぼけないで、あなたはなんであの技が使えたの？」

やれやれ、こいつのような勘のいい女は嫌いだよ

杉「はあ、仕方ないですね、じゃあ行きましようか、話してやりましよう私のいや、俺の正体を」

杉「はてさて、成り行きでこうなったがまずひとつ言っておこう、姫は俺の正体に大
体の察しはついてるのですね」

輝「ええ、まあね」

杉「はあ、昔からそんなことの勘だけは鋭いんだからなあ、やんなつちやうぜホントに」

輝「じゃあ、あなたやつぱり！」

杉「ああ、俺は小倉坂春風なんて名前じゃないお前の察しの通り杉本智だ、久しぶりだな輝夜、二億は会ってなかったかな？」

輝「ええ、そのくらいは会ってないわね久しぶり、智」

杉「お前も大きくなつたよなあ、昔はこんなだったのに」

と言つて胡座をかいて座つている状態で俺の肩くらの場所で手を止める

輝「うるさいわね、過去のことなんか忘れたわ、それより今よあなた生きてたのね」

杉「勝手に殺すなよな、俺は操る能力持つてんだぞ？体質操つて不老不死にするのなんて朝飯前だぜ？」

輝「それもそうね、なんてたつてあなたは規格外だもんね」

杉「おいおい、そりやねえぜて言うかなんでお前こつちきてんだ？月の姫様？」

輝「つ！向こうは寿命がないから詰まらないのよ、だから永琳に頼んで『蓬莱の薬』を作つてもらつて飲んだのよ、それで私は罪人となり月から追い出されたつて訳」

杉「なるほど、月にけがれがない、だがその薬を飲むとけがれを出し周りの者に寿命

ができてしまう、だが死刑にしようとしても不老不死になったからまた蘇る、だから月からの永久退場てか？」

輝「まあ、そんな感じね」

杉「はあ、で正体わかったから俺帰っていい？」

輝「だめよ、依頼の内容に私の暇潰しも入ってるんだから、帰っちゃ駄目よ」

杉「はあ、まあいいか、で俺は何をすればいいんだ？」

輝「そうね、昔やつてもらったあれが見たいわ」

杉「あーあれかー、久しぶりにやつてみるか」

昔やつたあれ、と言うのは人形を使った遊びだ

遊びと言ってもただ俺の能力で人形を生きてるかのように操って劇をする人形劇の
ようなものだ

杉「久しぶりだなあ、えっと人形の大きさは都にいる子供くらいの身長でいいか？」

輝「ええ、それでいいわ」

杉「さあさあ、杉本智の人形劇の始まり始まり」

輝「わあー」パチパチ

まあ、内容を考えてないから（作者が）終わるまでキンクリ

輝 「はあー、久しぶりだったから面白かったわ」

杉 「俺は疲れたんだが？これでいいだろ？帰らせてもらおうぞ」

輝 「ええ、またね智」

杉 「ああ、また明日な輝夜」

さて、家帰って店閉めて寝ようか

第五話 戦闘、花妖怪・風見幽香

前回のあらすじ

杉「初仕事無事完了！輝夜に正体を話した」

前回、陰陽屋春風としての初仕事を無事に完了させた

骸殻を使わないと下級を倒せないようにしてるからなあ、結構時間かかるんだよなあ

中級のやつは骸殻使って、尚且つ本気を出さないと勝てないからちよつとだけ封印を解いた

今の霊力量は中級の妖怪と同じかちよつと多いくらいの量だ
下級ぐらいは骸殻で一撃で倒せるようになった

あ、それと前回終了後に刀しか使っていないからたまには他の武器も使おうかなあつて
思つて、創造する能力で『武器を扱う程度の能力』を創造した

他にもいろいろな能力を創造した

例えば前に創造した『盗む程度の能力』とかだな

他にも『変える程度の能力』とか、多分他の小説にもあるんじゃないかな

決してパクったのではない

まあいっぱい創造したからここでは紹介できない、また輝夜編が終わったら設定が投稿されると思うからそこで書かれるだろう

で、今何やってるかって言うと……

風「あら、あなた都の方から来たの？あなた人間よね、退治しに来たの？」

杉「うーん、まあ言っちゃえばそうなるな、つておわ！」

そう輝夜からの難題である風見幽香の退治及び証拠品の持ち帰りである

畑を荒らそうとしなかったらなにもしないやつだから別に退治したいわけじゃないんだけどなあ

そんなこと思ってたらなんか飛んできた

見たら幽香が傘をつき出して先端から光る弾を出していた

杉「危ねえだろ、何すんだよ！」

風「あら、これ avoided のはあなたが初めてだわ、結構強そうね」

杉「ははは、なんか目をつけられたみたいだなあ、で俺は別にあんたとはできれば闘いたくはないんだが」

風「無理ね、私があなたと闘いたいんだからね」

杉「ははは、噂の通りの戦闘狂かメンドクサイ、はあ手っ取り早く終わらせるか」
パ
キン

俺は半径6センチ程の霊力の球を割った

すると、俺の体は光に包まれて光が収まったところで現れたのは、両腕が青白い筋が入った黒の殻と両足の付け根まで覆った同じく青白い筋の入った黒の殻で顔に猫の髭のように青白い線が入っている

そう、骸殻の第二形態だ

第一形態よりも籠める霊力量が格段に多くなっており、パワーも上がっている、幽香を倒すならこれを使わないと勝てない気がする

杉「はあ、仕方ないかかってこいよ、相手してやる」ユビクイツ

風「私に挑発とはいいい度胸じゃない、手加減はできないわよ」

その言葉と同時に幽香はこっちに突っ込んできた

く三人称視点く

都の陰陽屋・小倉坂春風と花の妖怪・風見幽香の戦闘が始まった

春風は幽香の突進を避けてから、周りの向日葵が折れないように向日葵畑を覆うように結界を張った

そのあと幽香の背中に向かってパンチを繰り出す

しかし、幽香は後ろ向きのままこれを避ける

そのまま態勢を立て直して傘で殴りつけてくる

春風は腕のガントレットで防ぎ、弾き返す

幽「あら？ なかなかやるじゃないの、これなら楽しめそうね♪」

そう言つて幽香は傘を春風に向けて傘の先端の先端に妖力を溜め始める、春風は来るであろう攻撃を避けるために警戒心を強める

幽「喰らいなさい！ マスタースパーク！」

そう叫んだ後幽香の傘から極太のレーザーが射出される

これに春風は驚きつつも回避行動をとった

しかし少し掠れてしまい、態勢を崩してしまふ

そこに幽香の傘による叩きつけが襲う

杉「ぐっはあ！」

春風は地面に叩きつけられ、一瞬意識が飛びそうになったがなんとか持ちこたえる杉（おいおい、封印してるとはいえ意識が飛びそうになるとは思わなかったぜ、こりゃ全力で行かねえとな）

春風は立ち上がり、全身に炎を纏わせる

ゴオゴオと燃え盛り始めた春風を見て、幽香は警戒心を一気に高める

瞬間、春風が動いた

春風は地面を蹴って幽香の傍まで跳ぶとその炎を纏った拳を叩きつける

幽香は辛うじて身を捻って急所から攻撃をずらしたがそれでも威力は強力、そのまま吹き飛ばされて行き、数回バウンドしてから幽香は立った

だが、春風の攻撃は終わっていない

春風は幽香の背後に来ており、その無防備な背中に蹴りを入れる

幽香は吹っ飛び、地面に叩きつけられた後に気を失った

s
i
d
e

o
u
t

第陸話 和解、花妖怪・風見幽香

前回のあらすじ

杉「幽香強い（確信）」

前回、幽香と戦って辛勝という形で勝利をおさめた俺は近くにあった家（おそらく幽香の家）にお邪魔させてもらっている

勿論、幽香治療して家にあつたベッドに寝かせてある

俺は幽香に事情を話すために幽香が起きるのを待たせてもらっている

お、この紅茶旨いな

今君たちが考えていることは、何勝手に人の家で勝手に紅茶入れて飲んでるんだよとか考えてるだろう

だって暇なんだから

あ、そうだ幽香が気絶してから結構経ってるなあ、向日葵無事かなあ

よし見に行こう（・ω・）

うーん、でもまあ大丈夫だろうちよつと水やらないだけで枯れるような柔な育て方してないだろう

杉「おお、元気そうだなあ……………ん？幽香？家で寝てるよ、悪かったな騒がしくして……………おお、水か？おしちよつと待ってる」

ん？何独り言言ってるんだって？違いし向日葵としゃべってんだよ

あ？なんでしゃべれるんだって？

能力だよ、創造する能力で『ありとあらゆる言葉を理解する程度の能力』を創造した

んだよ

おお、すまないな今いくよ

杉「ほらほら持つてきたぞー、今からあげるからなあ………お、もういいのか？じゃあ、次のやつだな」

まあ、水やつてるシーンなんてつまらないだろうからカットだな

杉「へえー、優しいんだなあいつは」

風「あら、あなたまだいたの？」

杉「お、幽香起きたのか、いや実はこいつらとしゃべってたら面白くつてな、つい話し込んでしまったよ」

風「こいつら？」

杉「目の前にいるだろう？ いっぱい」

風「まさかあなた、この子たちの声が聞こえるの!？」

杉「ああ、あんたへの信頼がめちやくちや厚いのが伝わってくるよ、そうだあんたがなかなか起きねえから水やつといたぞ」

風「あら、ありがとう、でなんでまだいるのかしら？」

杉「ん？ ああ実はなかくかくしかじかなんだよ」

風「まるまるうまうまなのね、わかったわ予備あるからそれあげるわ」

杉「おお、ありがとう、まあ実際は退治して尚且つ証拠品を持ってこいつて内容なんだが、退治したらこいつらが枯れるだけの運命を辿ることになる、それだけは避けたいからな」

風「そう、じゃあね縁があつたらまた会いましょう」

杉「おう、じゃあな」

ああ、いいやつだったなあ幽香

杉「さて、帰ってきたはいいけどどうしよう暇なだけだぞ、そうだ動物としゃべろう」
俺は暇を誤魔化すために外に出て、動物としゃべろうとする

外に出たら、近くに兎がいた

杉「こつちおいで、大丈夫捕つて喰おうつて訳じゃないさ、ん？わかるぞ、大抵のやつは聞こえる、友達？ああいいぞつれてこい」

そう言ったら兎はどこかに行き、帰ってきたらたくさんの動物がいた

りす、鳥、猫、犬その他にもいっぱいいた

とくに驚いたのは森に猫や犬がいることだった

杉「いっぱい連れてきたな、ところで聞いちや不味いと思うが犬と猫はどこから？、
やつぱり昔飼われてたやつかなんでこんなかわいいやつか捨てるかね、何？仕方ないつて？バカ言つてんじゃねえよ飼つたやつ捨てるなんてそいつはクズだ、え？捨てられたんじやなくて逃げてきた？そりやまたなんで、あ？暴力？それこそクズのやることだ動物に暴力を振るうなんざ頭がおかしいとしか思えないね、え？なんでそこまで言うのかつて？俺が動物大好きだからだよ、それ以外ねえよ、かぐや姫？ああ、あつたことあるぜかなり綺麗だったな、求婚？なんでそんな言葉知つてるんだよ！おかしいだろ！お、もうこんな時間かおめえらそろそろ寝ないと起きれねえぞ？それともうちに住むか

第漆話 難題、求婚した貴族の末路

前回のあらすじ

杉「動物捨てるやつはくずだと思おう」

前回、幽香と仲良くなって日傘をもらった

輝夜に見せたあとはこの傘どうしようかなあ、改造して仕込み傘にしようかなあ

よし、そうしよう（・ω・）

てか、そんなこと考えてるけど今何してるかと言うと、輝夜に難題の答えと言うかなんと言うか、まあ成果をみせにきている

ちなみに幽香との戦闘から結構経ってる

重ねて言うのと、難題を出された貴族たちは出された難題を探しにいつてなんでもいいから取ってきたみたいだ

て言うか不比等なんか蓬莱の玉の枝を取ってこいつてやつだけど、どこ探してもないから職人に頼んで贋作を作ったようだ

まあ俺への難題は幽香の討伐及び証拠品の提示と言うものだから難題はクリアされない

別に結婚に興味と言うものはない

と言うか俺にとって輝夜は妹？娘？みたいなものだから恋愛感情なるものは一切ない

おっと、どうやら全員揃ったみたいだ輝夜も来たみたいだな

輝「先程、皆さんの持ってきたものを拝見させていただきました、まず中納言石上麿足さんの持ってきた『燕の子安貝』はただの燕のフンでした

次に大納言大伴御行さんは取ってこれなかったようなので結婚はなしです

右大臣安部御主人さん取ってきた『火鼠の皮衣』は本来燃えないはずなのですが、あなたのはあつさりと燃えてしまいました

石作の皇子さんが取ってきた『仏の御石の鉢』は天竺まで行つたと仰いましたが、嘘ですね、あれは偽物でした

そして、藤原不比等さんの『蓬萊の玉の枝』ですが、あれも偽物です、先程作らされたと言つて、製作費を請求しに来た職人たちが来ましたので

最後に小倉坂春風さんの風見幽香の傘は本物ですが、風見幽香はまだ生きています、ということですが？」

杉「そうですねー、殺すのは勿体ないと思つただけですね」

輝「理由がどうであれ、達成ができていないのなら条件は成立しません

皆さんお疲れさまでした、今日はお帰りください」

そう言われて、貴族どもがトボトボと帰つていった

その内の一人が恨みがこもつた目で輝夜のことを睨みながら出ていくやつがいた
輝「はあー、疲れたわー」

杉「お疲れ、輝夜」

輝「あら、帰つてなかつたのね、まあいいわ暇だからちよつと付き合いなさい」

杉「はあ、拒否権はないんだろ？」

輝 「ないに決まってるでしょ？いいから付き合いなさい」

杉 「ハイハイ、わかりましたよ姫様、で、何をすればいいのですか？」

輝 「そうねえ、ゲームでもしましょう月でやってたやつを」

杉 「いやいや、あれは今の世にはありませんよ姫様」

輝 「それもそうね、じゃあ月にいた頃の話でもしましょうか」

杉 「それもそうですね、何の話をしましょうか？」

輝 「そうね、じゃああの時なんか・・・」

まあそのあとはいろいろ話したな

話し込みすぎてかなり遅くまで話したのはご愛嬌

第捌話 虐殺、月からの使者

前回のあらすじ

杉「貴族どもざまあああ!!」

前回、求婚しに来た貴族どもが見事に振られた
それはもうもの見事にバツサリとだ

屋敷出ていくときに輝夜のことを恨みがこもった目で見てるやつがいたが、多分、原作（竹取物語）で死にかけたやつがいたからそいつだろうな

後でぬつ殺しにいいこうかなあ（黒笑）

とまあ本音はさておき、いま何してるかと言うと、輝夜の屋敷で輝夜の愚痴を聞いて
いる

輝「ホントにもう、なんなのよ！結婚なんてしないって遠回しに言ってるのになんで求婚しに来るかなあ!?!おまけに帝まで来る始末………はあ、もうやんなっちゃうわ」

杉「ほらほら、輝夜そんなはしたない言葉は言っちゃダメだぞ、女の子はもつとおしとやかにな」

輝「そりゃあこんなことも言いたくなるわよ、しつこいっての！よく言うじゃない、しつこい男は嫌われるって」

杉「あははは、まあさすがは絶世の美女って言われてるだけあるな、求婚しに来る輩が尋常じゃないくらい多い」

輝「え、私ってそんな風と呼ばれてるの？」

杉「逆に今まで知らなかったの？」

輝「ほら、この服重いからさ」

杉「いや、まあ確かに十二単は重いだろうけどさ」

輝「そうでしょ？まあもうどうでもいいわ、近々月から迎えが来るって聞いたし」

杉「うえ？追い出されたんじゃないのか？」

輝「これでも不老不死なのよ？解剖とかしているいろいろ実験したいんじゃないの？」

杉「はははは、そんなことしてみろ俺が解剖したやつのも代まで呪ってやるからよ」

輝「発想が生々しいわ、殺すとかじゃないから余計生々しいわ！」

杉「まあ、本音はさておき」

輝「冗談じゃないのね」

杉「で、お前はどうかんだ？この地球に残りたいのか、それとも月に帰るのか？」

輝「冗談じゃないわ、あんなところ空気が汚くてやってられないわ、それに寿命がないから長くないと暇になつてくるのよ」

杉「よしじゃあ、俺が逃げる手助けしてやるよ」

輝「え、いいの？相手はあの月の軍よ」

杉「おいおい、俺を誰だと思ってるんだ？任せとけて、それよりもこの事じいさんたちには？」

輝「まだ言っていないわ、これから言うところよ」

杉「じゃあ、呼んできてやろう」

輝「ええ、お願い」

う
俺はよっこいせと立ち上がりじいさんたちを探しに行く、まあ適当に歩けば会うだろ

〽数時間後〽

杉「お、いたいた、おーい『翁』さーん、『嫗』さーん」

翁「おや、君は確か都で陰陽師をやってる」

杉「はい、小倉坂春風です」

翁「一体、何用かな」

杉「はい、輝夜が呼んでましたよ、大事な話があるって」

翁「ほう、そうですかでは早速いきましよう」

俺とじいさんたちは輝夜の部屋に向かった

輝「来ましたか、お爺様、お婆様」

翁「うむ、して話とは？」

輝「はい、実は私の身はこの国のものではございません、夜に浮かぶ月にある都の間なのです、近々月から迎えが来ます、この月の十五日に迎えが来ます、その日が別れの時です、私は悲しく思います」

翁「そうかい、どこかこの世のものとは思えなかったが、そうか月の人間か、ならば納得じゃ、輝夜はわしが拾ったとは言え大切なわしと婆さんの子じゃ、ハイそうですかと渡すわけにはいかんのう、春風さんや」

杉「なんでしょか」

翁「陰陽師のあなたに依頼ですじや、どうか輝夜を守ってくれやせんかのう」

杉「ふふふ、いいでしょう陰陽師春風、しかと依頼承ります、では帝様にも伝えておきますね、では」

俺はその場を後にした

そして、旧暦八月の十五日、月からの迎えが来る日だ
時刻は午前十時、輝夜の屋敷前は多くの兵が揃っていた

でも、俺と輝夜はそんなのに期待なんかしちやいない

なんせ、相手は月の変態技術で作られた武器を使い尚且つ俺が鍛えて強化された軍だ、かなうはずがない

まあ今日この日に都とはおさらばだからいいけどな

とかなんとかしてらうちにタイムリミットも近づいてきたな

杉「輝夜、別れは済ませたか？」

輝「ええ、もうここに未練はないわ」

杉「じゃあ、行ってこい俺は裏で待機しとくから」

輝「ええ、頼んだわよ」

さてと、仕込み入れておきますか

まずは変える能力で満月が昇ると完全な狼になるようにしてと、あ尻尾の数は九な

杉「それと、紫ーいるかー」

紫「はーい、久しぶりの出番よー」

杉「紫、この辺でいい隠れ場所ってないか？」

紫「隠れ場所？ああ、確か近くに竹林があるからそこなら大丈夫じゃないかしら」

杉「サンキュー、もうかえっていいぞ」

紫「え、私の出番これだけ!?(驚愕)」

さて、ともう時間がないな、そろそろ満月が昇る頃だな

すると、突然体の奥底が熱くなる

俺は悟った、これが狼になる前兆だと

杉「ぐっ！」

俺は苦しくなり、膝を着いた

紫は帰ったようだ

杉「がああああああ！」

俺は完全に狼へと姿を変えた

杉『ふう、思ったより視点が高いな、ってそれよりそろそろ出た方がいいだろう』

俺はこの姿のまま外に出た

外に出た瞬間、辺りが光に包まれて空から牛車が降りてきた

揃った兵士どももこれには敵わないと悟り、武器を捨て尻餅を着いた

それを尻目に俺は輝夜の横に歩み進む

輝「あら、ちょうどいいタイミングね智」

杉『おいおい、これでわかるのかよ』

輝「こいつ、直接脳内に!？」

杉『ネタはいい、それよりもおでましたぞ、て言うか永琳じゃん』

輝「あ、ホントだわ」

そんなことを話していると、永琳と軍が降りてきた

軍「我々は月の軍の五番隊である、大罪人・蓬萊山輝夜の身柄を確保します」

輝夜はその言葉を受けても微動だにせず永琳との再開を果たしている

俺はというと軍の前に立ちはだかり、威嚇している

軍「なんだこの犬は!?!殺せ！」

リーダーの号令と共に軍の光線銃が放たれる

俺はそれを避けずに（避けると言う選択肢はない）この状態で使える妖力を使い結界

を張り防御をする

永「姫、あの狼は」

輝「心強い味方よ」

永「？」

おいおい、輝夜そんな説明じゃわかんないぜ？

と、止んだな、さあ素敵なパーティしましょう？

杉「ぐるぐるるるるる、があ！」

俺は光線がやんだと同時に駆け出し、まずはリーダーの首を食いちぎる

不味い、それを見た部下たちは戸惑い狼狽える

それを見逃さずに、食い荒らす

首を食い、腕を食い、体を引き裂いた

月の軍はあっさりと全滅した

杉「・・・・・・・・・・」クルツ

永「！」スツ

輝「大丈夫よ、永琳、弓と矢をしまつて」

永「・・・・・・・・・・わかりました」

俺はそのまま二人に近づき、座る

輝「乗れつてさ」

永「ホントに大丈夫ですか？ 姫」

輝「大丈夫よ、私を信じなさい」

永「わかりました」

永琳は渋々と言った感じで俺に跨がってきた

二人が乗ったのを確認すると立ち上がり

竹林のある方へと駆けていく

竹林の奥地につくと、どこからともなく兎が近づいてきた、いつの日だったか会話した兎たちだった

杉（元氣だったか？そうかそうかよかったよ、それよりもお前さんの親分的な存在は誰だ？ちよつと話をしたいんだが）

そう聞くと、兎はさらに竹林の奥へと消えていき、数分後に戻ってきた
頭に兎耳を生やした女の子の抱かれながら

杉（そいつがお前さんの親分的な存在か？ちよつと話をしたいな）

？「あれ、この狼はなんだい？それと知らない人間が二人いるんだけど」

杉（ああ、すまないなちよいと聞いてほしいことがある）

? 「こいつ、直接脳内に!?!」

そのネタ流行ってるんですかねえ

杉 (このまんまじゃ話しにくいから、ちよいと人間に戻るは)

俺は変える能力で変えたものをもとに戻した

すると、狼姿の俺はたちまち人間の姿に戻っていった

杉 「ふう、さて話を続けようじゃないか」

? 「そうだね、と言うか君は人間だったのか」

杉 「そうだな、さてとりあえず自己紹介だな俺は小倉坂春風と言っても偽名だがな」

因 「へえ、そうなのか、私は『因幡てい』さ、よろしく」

杉 「ああ、よろしくな、それよりもこいつらをここに住まわせてほしいんだ
が………無理か?」

因 「うーん、別にいいけど条件があるよ」

杉 「何だ?」

因 「私は別として、他にウサギたちに知恵を与えてほしいんだ」

杉 「ふむ、どうだろうか、その銀髪の女性」

永 「ふえ? 何かしら」

杉 「だから、この竹林のウサギたちに知恵を与えてほしいと言うものなんだが、でき

るか?」

永「ええ、まあできないこともないわ」

因「じゃあお願いするよ、ついといでここよりさらに奥にいい隠れ場所があるんだ」

杉「だ、そうだが、どうする?お二人さん?」

輝「ええ、いきましよう、永琳」

永「え、あつはい姫様」

杉「ほんじゃあ、先に行つといてくれ俺はあの場の後始末があるから」

そう言つて俺は再び狼に変わり、輝夜の屋敷の方に駆けていく

く因幡てい s i d e く

さて、あの春風つてやつが行つたね

因「じゃあ、ついといで」

輝「ほら、永琳行くわよ」

永「わかりました」

さてとさっさと案内するかな

s i d e o u t

杉（さて、この腰抜けどもを始末するか）

俺は俺たちが竹林に行つてからも尚逃げ出さない兵どもを前にそう呟いていた

杉（まずは都に被害がいかないように結界を張つてと、さあSHOW TIMEだ！）

俺は一人の兵の体を狼の爪で切り裂いた

それを見てか、兵どもは忽ち我先にと都の方に駆け出した

しかし、都に続く階段の前で見えない壁にぶつかった

それに驚いた兵はすぐにその表情は都に帰れると言う安堵の表情からここで自分は

死ぬという絶望の表情に変わった

俺はその兵どもに容赦のない暴力を降りかざす

そこからは一方的だった（最初から）

体を裂き、内臓を抉り、肉を喰らつた

しかし、ここで全員殺しても帝が不審に思うだろうということで一人だけ（帝への連絡係を）生かし、この場での記憶をすり替えて帝の場所へ帰した

杉（さてと、輝夜のところに戻るか）

俺はそのまま竹林へと足を進め

翁「待つてくだされ」

ようとして翁さんに呼び止められた

杉（なんでしようか？翁さん）

翁「やはり、春風さんであつたか、おーい嫗ー」

嫗「何ですか、じいさん」

杉（嫗さんもぶじでしたか）

翁「春風さん、輝夜は」

杉（輝夜ならここからずっとまつすぐいったところにある竹林の最奥に思うんで）

翁「そうかい、無事なんだね狼に乗つてどこかに行つたと思つたら、その狼が帰つてきたんだからのう」

杉（会いに行きますか？）

翁「いや、よいよいワシももう歳だ（こうやつて立つて話すのもやつとなくらいにのう）」

杉（そうですか、ではさようならまたどこかで）

翁「ほっほっほ、さようなら狼さん、わしらの救世主どの」

俺はじいさんの最後に言葉を聞かずに竹林の方にかけていった

ところ変わって竹林の最奥部

そこには立派な和の屋敷が建っていた

一体何があったかと思うが、そこで俺は思い出した

そう言えば永琳ってスゴかったと

杉（ふう、ていーいるかー）

因「うん？ここにいますか？」

杉（おお、いたいた輝夜と永琳に俺が出ていくときに伝えてくれねえか？また会おうってな）

因「わかったよ、でタイミングは？」

杉（そうだなあ、俺があいつらに正体をばらしたあとに出てくから、俺が出てったあ

とに頼む)

因「了解したよ」

杉(さて、行くかな)

俺は懐かしの永琳と話すために屋敷へと歩みを進めるのだった

第玖話 再開、月の頭脳・八意永琳

前回のあらすじ

杉「最高にハイつてやつだああああ!!」

前回、輝夜をつれ戻そうとした月の軍を皆殺しにして、後に『永遠亭』になる屋敷ができたところだった

んで今は永琳と輝夜がいる部屋に向かつてるんだが、ていのやつ一人だけ先にいきやがって俺二人がどこにいるか知らねえんだぞ？

まあ今の姿では嗅覚が犬並みになるから別にいいんだけど、えーとこっちな

杉（到着、とりあえずてい、喰らえ！）

俺は部屋につくと同時に俺を置いていった犯人に向かつて前足による横薙ぎを繰り出す

困「door!!」

ていはドラゴ○ボ○ルのネタを言いながら吹っ飛んでいく

ちなみに爪は引っ込ませてある

杉（ああ、スツとしたぜつと、とりあえず小倉坂春風の姿になつてと）

俺はその場でバク宙をして人の姿になる

さてどうしたものか

杉「ども、自分あの都で陰陽師やってる小倉坂春風って言います」

永「え？ああ、はい私はこの方の側近をしている八意永琳よ」

杉「そうですか、どうぞよろしくお願いします」

永「こちらこそよろしくお願いします」

杉「さて、自分に課せられた依頼は達成しましたので、帰らせてもらいますね」

輝「あら、もう帰るのかしら？もうちよつといなさいよ（永琳と再開したのよ、本体出さんでどうする）」

杉「いえ、自分はただの陰陽師ですので、帰らせてもらいます（バカ言うな、二億は音信不通だったんだぞ、何されるかわかったもんじゃねえ）」

輝「いいじゃない、じゃあもうひとつ依頼よ（いいじゃない別に、そもそも一緒に月に来なかつたあんたが悪い）」

杉「はあ、なんでしょう？（あれはしやあねえだろ、俺が行かねえとロケットは発射されなかつたぜ？）」

輝「依頼はひとつ、私たちと交流を深めなさい！（それに関しては感謝してるわ、でも一緒に来なかつたのは解せないわ）」

杉「……はあ、わかりました、陰陽師春風、依頼承ります（それはすまなかつた、だが最後の方は俺一人でやってたからいいもの他のやつがいたら巻き込まれてたかもしれないんだ、それにあいつらの実力ではあの軍勢は相手にできなかつたんだ、仕方ないだろ）」

輝「さあさあ、こっちに来なさい（まあとにかくこの話は終わりよ、早くこっちに来

なさい！」

杉「はいはい、俺は逃げも隠れもしませんよー（へーへー、今行きますよー）」

永「……………」（何かこの男見たことあるのよねー、この姿はないけど言動とかは智にそっくりと言うかそのまんまなのよね）」

何か今永琳が何考えてるか気になって、盗む能力でみたらばれかけていたヤベエよマジで、そんなに変わってないか？

そんなことを思っていると、永琳が話しかけてきた

永「ねえ、あなた結構昔あったことないかしら？」

杉「!!いえ、そんなはずはありませんが」メソラシ

永「そうかしら」ジー

杉「え、ええ」ヒヤアセ

永「ジー

まじりまじりまじりまじり、失敗した失敗した失敗した失敗した
何してんだよ俺え！目え反らしたら嘘ついてるって証拠だろうがああああ！

永「はあ、あなたに演技は無理よ、智」

杉「ありや、気づいちやった？そっかあやっぱり向かないかあ」

永「当たり前よ、凶星だとすぐに目をそらして目を合わせようとしなくなる、バレバ

レよ」

杉「あちやー、練習すべきだなあこりや」

輝「ありやりや、ばれちやったか智ー、分かりやすすぎよー」

杉「すまないな、これは昔っから変わってないから」

永「というか、姫様は知っていたのですか？」

輝「ええそうよ、だって助けてくれって依頼したの私だもの」

永「そう………姫様、ちよつと来てくれますか？」（黒笑）

輝「え、何々？」

輝夜は笑顔の（目が笑ってない）永琳についていった

その後、輝夜の悲鳴が永遠亭中に響きわたった

こええ

杉「おーい、てーい」

因「何さ」

杉「あの二人に伝えといてくれよ、またなつて」

因「何だい、もういくのかい、わかったよ伝えとくよ」

杉「ああ、じゃあな」

因「ああ、また会えれば会おう」

こうして俺は永遠亭を去った

〳〵その後の永遠亭〳〵

永「はあ、全く姫様は……待たせたわね智つてあれ？智？」

因「おや、終わったのかい？さっきの智つてやつから伝言だよ、『いつかまた会おう』つてね」

永「そう、ありがとうえつと」

因「ああ、自己紹介がまだだったね、私は因幡でいだよ、よろしくね」

永「そう、私は八意永琳よ、よろしく、それであつちで白目剥いて気絶してるのが蓬萊山輝夜よ」

因「そ、そうかい、確か都で噂になってたね」

永「へえ、なんて言われてたの？」

因「確か、絶世の美女だとか言われてたかな？」

永「ぶつ、あつはははははは！あの子が？ふふふ、まあなるほど、こつちでも美し

いって言われてたからね、こっちでもちやほやされたみたいね」

因「あはは、まあうん、とにかく伝えたよ、あの人にも言つといてね」

永「はあ、全くあいつは、勝手にどっかいくわねほんと、まあ良いわあいつはそういうやつだものね」

因「じゃあ、なんかあつたら言ってくんな、相談にはのるさね」

永「ええ、ありがとう、てい」

そんな会話が智がいったあとにされた会話である

第拾話 出発、不死の山

前回のあらすじ

杉「その後、輝夜が目を覚ますことはなかった（大嘘）」

前回、永琳と再開してちよつと会話してから出てったところで終わったな
て言うか、この始まり方が最近になってTRPGみたいだと思っただが、そこそこ

ろどうだろうか

まあいい、で今どこにいるかと言うと

帝の命を受けて、不死の薬蓬菜の薬を燃やしに一番高い山に焼きにいくところを山の麓より少し離れたところで待機している

え？なんで麓で待機しないんだって？

そりゃあ、お前顧客がいるからだろ？

あれは確か不比等の娘の妹紅だったな

そう言えばついさつき思い出したけど、俺って転生して東方の世界に来たんだよな、て言うか原作知識を思い出してここに来たんだけど、やつぱりいた

まあ、だからここで岩笠率いる帝の命を受けた兵たちを待つている

おつ、来たみたいだな

俺の前を通過して山を登り始めた

あつ、妹紅も登り始めたな

さて、俺も行くかな

結論から言うのと隠れて追っていた妹紅がまだ子供故、体力が尽きたみたいで岩笠隊に助けられていた

その後登頂してきて燃やそうとしたところで木花咲耶姫が出てきて、この山でその薬を棄てるのだそうだと、変わりに向こうの八ヶ岳に棄てるのだそうだと

それをいったあと木花咲耶は光だし、収まると、あの場にいた兵どもは皆死んでいた。何が起きたかわからずに、木花咲耶も消えていたので、あきらめて下山している途中で小休憩をしているときに起きた出来事だった

〈妹紅 side〉

私は藤原妹紅、今岩笠つて人と山を下りてるところ

実は私、本当は親と仲良くない、正確に言うとお父さんとだ

いつも、というか外では仲がよく、人見知りか激しくて（これは本当）自慢の可愛い

娘だと言つて振る舞つてるけど、家ではいつも殴られる

それも服で隠れて、人には見えない場所をだ

だから私は家を飛び出して、不老不死つまり、化け物になればお父さんと離れられると思つて

だから帝様の命令でここに来るつて聞いて、山の下で待ち伏せしていたんだ

その人が来たら、殺して奪つてやろうと思つて

でも、予想以上に人がいたから取り合えずついていつてみたら、途中で体力がなくなつて倒れたんだ

そのあと目を覚ましたら、介抱されてたんだ

凄く優しい人だった、だからこんな人を殺すのなんか無理だと思つた

でも、それ以上にお父さんの家にいるのが嫌だから、その人、岩笠さんについていったんだ

でも、薬を燃やすつていうのを忘れてて、どうしようつて思つてたら、神様が出てきたんだ

そしたら、この山にはこの薬を棄てちゃダメなんだつて、向こうの山で棄てろつてさ、そしたら突然神様が光だして、岩笠さん意外の人が皆死んじゃつてたんだ

神様もいなくなつてたし、大人しく山を下りていると、私を氣遣つてか休憩をはさん

でくれた

岩笠さんと一緒に休憩しているときにふと岩笠さんの方を見ると崖の前で立ってたから、私は考えた

今なら、あの崖に突き落とせるんじゃないかって

私はそう思った時には動いていた

岩笠さん腰を思いつきり、押して突き飛ばした

岩笠さんは驚いて、こつちに振り向き私を見たあと、崖の下を見て絶望したような顔になり、こつちに手を伸ばしてきた

でも私はつかまなかった、突き飛ばしてその人を助けたら意味がないじゃないか

私はせめてできることがあればと思い岩笠さんが落ちるまで、見届けようと思った

岩笠さんが地面にぶつかると、体がバラバラになって、辺りが赤く染まり、内臓がぶちまけられた

私は正直言つて、吐きそうになった

でも、目的のためにグツと堪えた

私は近くに小さい壺があるのを見つけた

きつとこれが不老不死になる薬だと思い、一気に飲み干した

飲んだ直後は何もなかった

けど飲んでから、少したったあとに私の体全身に鋭い痛みが襲いかかる

私は叫んだ、叫ばなければ耐えられなかった

痛い、ただそれが頭を支配する

何も考えられない、ただただ痛い

痛い痛い痛い痛いイタイイタイ

でもその感覚もすぐに引いていった

私は自分の体を見て特に変わった点はないか探したけど、髪の色が黒から白に変わっ

ていただけで特には変わっていなかった

とにかくこれで不老不死、すなわち化け物になれたんだ！

そう思っていると、下の方からあのとときいた小倉坂春風さんが登ってきていた

s i d e o u t

第拾壹話 邂逅、藤原妹紅と逢萊山輝夜

前回のあらすじ

杉「妹紅がついに原作通りに」

前回、妹紅と岩笠隊についていって、妹紅が岩笠を崖に突き飛ばして、蓬萊の葉を飲んだところで終わったな

ちなみにこの始まり方はもう変える気はないんだぜ

というか、結構これで冒頭やって来たから変えれないのが正しい

でなんだっけ？ そうそう俺はそこで陰から出て妹紅に近づいていったんだよな

杉「おや、君は藤原ん所のお嬢ちゃんじゃないか、どうしたんだい？ こんなところで」

妹「!!? あなたは、あのときお父さんといた、えっと、春風さん？」

杉「まあ、そうとも言えるけど、今はそうじゃないかな」

妹「？」

不思議そうだな。妹紅

杉「俺は杉本智、小倉坂春風なんて名前じゃないよ」

妹「なんで、名前、変えたの？」

杉「かぐや姫が知り合いだったからな、古くからのな、んでばれちやまずいから名前

変えたわけ」

妹「かぐや姫と知り合い!? どこで知り合ったの？」

あり、そんな反応？ 確か原作ではあいつのこと恨んでなかったっけ？

杉「ありや、てつきりどこにいるか聞いてくると思ったよ」

妹「どうして？」

杉「だって、あいつのせいで君のお父さん、不比等は普通じゃなくなっただろ？」

妹「!!……………違うよ」

杉「ん?なんだって?」

妹「お父さんはかぐやにふられてからじゃない、ただその前よりひどくなっただけだよ」

杉「……………どういことだ?」

妹「お父さんは……………いつも、私を殴ってくるの、蹴ったり、悪口言ったり、私は嫌だったから家を飛び出して、ここに来たんだ」

杉「……………そうかい、あのとときのあれは仮面で実はあんなんじゃないってことか、俺が一番嫌いなやつだぜ、それ……………ぶつ殺してきてやろうか」

妹「ふえ?最後なんて言ったの?」

杉「いや、何でもないよ、ところで君は一体どうするんだ?」

妹「どうって?」

杉「君はその薬を飲んで変わっただろう?」

妹「そう、なの?あまり実感わかないけど」

杉「じゃあ、試せばいいじゃないか」

妹「え、試すって?」

杉「その辺の石は麓のよりも少し鋭いから、手首くらい切れると思うけど」
妹「そんなことすると、いたいじゃないか」

杉「だが、傷は一瞬でなおるはずだよ、その薬、蓬萊の薬は本物だからね」

妹「え？何で知ってるの、とかそんなこと名前だったのこれ」

杉「さあ、どうするんだい？やる？やらない？」

妹「私は……やらないよ、痛そうだもん」

杉「そうか、じゃあどうするんだ？家に帰るか、このまま逃げるだけの道を選ぶか、ね」

妹「……あそこは、嫌だなあ」トボトボ

妹紅が項垂れながら、下山していく

どうやら家に帰るようだ

杉「それと、もうひとつ言っておくよ」

俺が声をかけると、立ち止まり振り向いて聞いてきた

妹「何？」

杉「化け物の世界へようこそ、俺たちはいつでもお前を歓迎するぜ」

その言葉の意味を理解せぬまま妹紅は帰っていった

杉「さて、妹紅の選択肢はひとつじゃなかった、ここで化け物と気づいて、俺についてくるか、家にかえって罵倒されながら自分が化け物と気づくか、お前は最悪な道を選

んだようだな、そんなんじやすぐに追い出されるぞ」

その言葉は、多分妹紅には届いていないと思うが、俺は眩かなければならない気がした

＼妹紅side＼

私はあの人智さんに言われた通りに、家にかえつて来た
不「おい、どこにいつていたんだ、屑が、早く入れ」
妹「はい、わかりました」

やっぱり帰ってきたんだ、この忌々しい場所に

そして、時間は過ぎ、そのときがやって来た

不「全く、お前は他の兄弟たちとは大違いだな！可愛いげもないし、仕事もできん、家事もできん、本当にお前なんか生まれてこない方がよかつたんだ!!」ドガツ、バキツ、ボコツ

妹「痛い、痛いよ！やめてよお父さん！」

お父さんは助けを求める私に構わず殴つたり蹴つたりしてくる

でも、お父さんが手を休めるとその暴力でつけられた傷は忽ちなおつていった

それを見て、お父さんは勿論私も驚いていた

不老不死つてただ死ななかつたり、歳をとらないだけじゃないんだつて

本当は死んでも回復する

まるで、死ぬことを許さないとばかりに

不「お前、まさか、あの薬を飲んだのか!？」

妹「うん、そうだよ、棄てに行つた人を崖に突き落としてから飲んだんだ」

不「貴様、何てことをしたんだ！そんなことがばれば私は殺されてしまうではないか！もういい、お前はもううちの子ではない！今すぐ出ていけ！」

その言葉を聞いて私はこう言つたんだ

妹「ああいいき、こんな家こつちから願ひ下げだ！」

こうして私は家、家族を失い都を歩き回るいわゆる家なしになったのだ

そこではお父さん・・・・不比等から聞いたのか、都の人が石を投げつけてくる

たまに石が鋭くて皮膚、もつといけば目に当たって血が出るときもあつたけど、それもすぐに回復した

都の人たちは驚き、皆一様に化け物と叫んでいた

化け物、そう言えばあの人もそんなことを言っていた気がする

化け物の世界へようこそってそれにこうも言っていた

俺たちはいつでもお前を歓迎するぜって

俺たちちって言うのは誰のことなんだろうか

そう思いながら私は耐えきれなくなり都を飛び出した

一心不乱に走っていた

疲れたから休憩のために少し立ち止まった時だった

妖『ぐがあああああ!!』

妖怪が襲ってきたのは、私は恐怖した

初めて見る異形のもの、私達人間とは全く違う姿をした生物を

私はたまたま逃げ出した、走って走って走ってハシツテ

でも、相手は人間とは全く異なる種族どちらかと言えば獣に近い感じのやつそんなやつから逃げられるわけもなくとうとう、追い付かれてしまった

私はもう動けなかった、尻餅をつき、涙を流した

その中でも妖怪は近づいてくる

一歩一歩、私を食べようとして

でも、あと一歩のところまで妖怪は消滅した

どうして？私は思った、なぜ？妖怪は消えた？

その答えは予想もしていなかった人が答えてくれた

杉「ありやりや、やつぱりこうなったか、だからやつとけつて言ったんだ」

その人はあの山であった、杉本智さんだった

s i d e o u t

さて、とりあえず妹紅が山を下りてから俺も飛んで妹紅をつけていた
ん？都の上をどうやって飛んだかつて？

そんなの能力使って存在感を極限まで薄めただけだ、これだけで誰も気づかない
さて、今は妹紅が都を出て行って妖怪に襲われているのだが、正直言うとなんか助
たい、でもすぐにいって来てもずっと近くにいるってばれるだろう？

だから敢えて、食われる直前に助けるのだ

そろそろかな、俺は地面に降り立ちいつも自分の隙間に入れてある、弓を取り出した
霊力で矢を作り、闇を纏わせる

杉「すべてを飲み込み、すべてを消し去れ、喰らいな、ダークアロー！」ビュン！
矢は物凄い勢いで飛んでいき、妖怪に命中

纏った闇が妖怪を飲み込み消滅させた

妹紅から見れば、妖怪が急に消えたみたいに見えるだろう

杉「ありやいや、やっぱりこうなったか、だからやとけって言ったんだ」

「素晴らしいながら俺は近づいていく

妹「あ、あなたは」

杉「よっ、さつきぶりだな妹紅」

妹「どうして、ここに？」

杉「都を飛び出したお前を見て気になったからついてきた」

嘘は言っていない

妹「どうして、助けたの？私は化け物だよ？」

杉「俺も化け物だよ、妹紅以上にな」

妹「でも、そんなの証拠が」

杉「見せてやろうか？よつと」クルン

俺はバク宙をして、以前なった狼になった、九尾の狼に

杉『どうだ？これでわかったろう、俺は半妖、お前とは種族が違う』

妹「そんな……」

杉『で、どうする？俺にはお前を引き取ってくれそうなやつは心当たりがあるんだが』

妹「そんなひといるの？」

杉『ああ、お前と同じ不老不死だ、かく言う俺もなんだがな』

妹「じゃあいくよ、て言うか智さんも不老不死だったの!？」

杉『ああ、言ってなかったな、まあとりあえずついてこい』

俺は目の前にある竹林に向かって歩き始める

妹「あ、待って〜！」

妹紅も急いでついてくる

さて、とりあえずついたな

杉『おーい、輝夜か永琳ーいたら返事してくれー、返事がなければ勝手にはいるがい
いかー・・・返事なし、よし、入るか、妹紅、ちよつとこつちにこい』

妹「何？智さん」

杉『ほいと』

妹「え、きやああああ!!?」

妹紅は悲鳴をあげながら落ちていった

俺が開いた隙間によって吸い込まれるように落ちていった

杉『おいおい、そんな悲鳴をあげるようなもんじゃないだろ、と』
俺も隙間に飛び込んだ

隙間から出た先は永遠亭内のどこかの部屋だった

杉『さて、無事(?) ついたな』

妹「何が無事ですか!?! なんですとかあれ!」

杉『俺の能力の一種だ』

妹「さつきから聞いてるけど、能力って何」

杉『その個人が持つてる、特殊な力だ、俺ならありとあらゆるものを操る程度の能力だな、まあ他にもあるんだがな』

妹「え、能力って一人一個じゃないんですか?」

杉『いや、まあ俺の本来のて言うか一番最初の能力がありとあらゆるものを創造する程度の能力でよ、それでいろいろ能力を創造したんだ』

妹「あはははは、規格外な能力ですね」

杉『おいおい、そう言うこと言ってくれるな、軽く凹む、とここだな』

俺は前足を使って器用に襖を開けた

杉『おーい、輝夜ー、永琳ー、勝手にあがらせてもらってるぞー』

ちなみに去り際またなとか伝言伝えたけど、昨日今日で戻ってくつてどうよ、とかツツコムのはなしだ

永「あら、意外と来るのが早かったわね、なんのようかしら智」

杉『いやな、ちよいと引き取ってほしいやつがいるんだ』

永「へー、誰かしら?」

杉『おお、こつちだこつち入ってこい』

妹「ど、どうも」ヒヨコ

杉『こいつだ、妹紅って言うんだ（……こいつの親は屑でよ、逃げ出すために蓬萊の薬を飲んだらしいんだ）』

永「そうなの、私は八意永琳よ、よろしくね」

妹「はい、私は藤原妹紅って言います」

永「だったら姫様も呼ばなきやね、ちよつと待っててね」

永琳はそれだけ言うと、輝夜を呼びにいった

妹「あの、姫様って……?」

杉『ああ、お前も一回見たことあると思うぜ』

妹「それって……」

永「お待たせ、さ、姫様こつちです」

輝「もー、永琳ー私は動きたくないって言ってるでしょー」

杉『相変わらずみたいだな、輝夜』

輝「その声は智!」

杉『んで、永琳から話は聞いてると思うが、今日からここに住まわせてほしいやつがこいつだ』

輝「あら、そうなの？ 私は蓬萊山輝夜よ、よろしくね」

妹「あ、はい、私は藤原妹紅って言います、えとあなたは、まさかかぐや姫ですか？」

輝「あら、私のこと知ってるの？ そう言えば藤原って前に蓬萊の玉の枝の贋作作って

持ってきたやつじゃない、そいつの娘さん？」

妹「あ、はい藤原不比等は確かに私の父でした」

輝「今は違うのね？」

妹「はい、勘当されました」

輝「どうして？」

妹「それは……」

杉『はあ、妹紅俺から説明するぞ？』

妹「……うん」

杉『まずこいつは蓬萊の葉を飲んだ蓬萊人だ』

輝「……」

杉『そして、それを飲んだ理由が親つまり不比等から逃げるための策として』

輝「それってどういう……」

杉『人間って言うのは自分達とは違うものは排除する対象に入る、人間一人一人は弱

い、だからこそ群れてその対象を排除しようとする化け物だと罵りながら、それは都の

やつらや不比等もその例に漏れない、傷がついてもすぐに治る妹紅を見て化け物だと罵り、妹紅を都から追い出したんだ』

輝「そんな……」

杉『それに不比等は屑だ、初対面のやつには愛想よくて言うか外に歩くと愛想よく、家に変えると妹紅に虐待をするっていう、俺が最も嫌いな人種だ』

永「……」

杉『これがすべてだ』

妹「あはは、気持ち悪いよねこんなやつ家に置くなんて」

輝「いや、それは違うわ!」

妹「嘘はいらないよ!私はまだもう必要ないんだよ!」ダツ

杉『妹紅!』

輝「なんなのあの子」

杉『まあ、仕方ないか外では優しい父さんが家では殴る蹴るの虐待に加え、お前は産まれてこなければよかったなんて罵倒してくるんだ、そりやあ人はみんな何かしらの嘘をついているって思い込んでもしかたないよなあ、しゃあない探しにいくか』

俺は隙間を開き、中に入ろうとすると

輝「ちよつと待ちなさい!」

杉 『何だ？』

輝 「私も行くわ、会ってちゃんと話さないかね」

杉 『そうかい、じゃあ行くか』

輝 「ええ」

第拾弐話 追え！藤原妹紅の涙

前回のあらすじ

杉「人は何かしら嘘をついているのはあながち間違いじゃないかもしれない」

前回、妹紅と輝夜を会わせて妹紅を永遠亭に住まわせようとして妹紅が逃げちまうて、俺と輝夜で探しにいったところで終わったな

さて現在妹紅を探して竹林を搜索中だ

しかし搜索中と言っても、ここは迷いの竹林、何が言いたいかって?

探そうにも何処に行つたかわからないのだ

杉『くそっ!何処にいつたんだ妹紅!』

ここは兎の臭いが強いから妹紅の臭いだけを嗅ぐのなんて至難の技だ

極限まで集中すればいいけど、それやつちまうと近づいてきた妖怪に気づけなくなる

どうすればいいんだ!

妹「きやああああああ!!」

杉『今のは!?!妹紅か!』

俺は声が出た方に走っていった

く妹紅sideく

はあ、何てことしちゃったんだろ私、別に飛び出さなくていいじゃんか、ましてや私のことを受け入れてくれそうだったのに

はあ、もう戻れないよね、あんなこと言ったんだし

でも、智さんは私と同じだって言ってたけどそれでも私は怖い、それが私を安心させるための嘘なんじゃないかって疑ってしまう

輝夜さんも同じなのかもしれない、でもそれは私の夢想到にすぎない

妹「はあ、私はどうすればいいんだろう」

そんなことを聞いても答えてくれる人はいない、帰ってきたのは

妖「きしやあああああ!!」

蜘蛛みたいな妖怪の威嚇の声だけだった

妹紅 side out

智 side

俺は今全速力で声がした方に走っている

竹林の竹何て関係なく竹をなぎ倒しながら向かっている

何があったのかはわからないがとにかくあの声は助けを求める声のような気がした
二分程走つただろうか、そのくらい走つて見えてきたのは蜘蛛のような妖怪が妹紅を
庇つた輝夜を刺しているところだった

それを見た俺は全力で妖怪を殺すべく現状で解放できる妖力を全て出し、蜘蛛のよう
な妖怪に突つ込み吹き飛ばす。

杉『おい、輝夜!大丈夫か!』

輝「大丈夫よ、不老不死だつてこと忘れたの?」

杉『そんなわけないだろう、だが、自分の妹みたいなやつが刺されてみる、こうなる
だろう例え不老不死でもな』

輝「あら、私のこと妹みたいに見てたんだ、それは初耳だわ」

杉『とにかく先に永遠亭戻つてろ』

輝「わかつたわ、死ぬんじゃないわよ」

杉『そつちこそ不老不死だつてこと忘れたのか?』

輝「ふふふ、心配は不要つてことね」

俺は隙間を開き輝夜と妹紅を永遠亭に飛ばした

杉『さて、覚悟はできてんだろうなあ!』

俺は蜘蛛の妖怪に向かっていった

蜘蛛の妖怪はその八本の足の内四本をこちらに向けて突いてきた

俺はそれを回避して蜘蛛の妖怪の目に前足の爪を食い込ませる

妖「きしやあああああああ!!?!」

妖怪は悲鳴のようなものをあげる

その隙に俺は人間の姿になり、幽香にもらった日傘の持ち手を握り、一気に引く
すると、中から俺がよく使っていた刀の刀身が姿を見せる

杉「てめえはこれで屠ってやるよ

一刀流劍技 壺乃型 暗黒斬！」

見た目はS A Oに出てくるバーチカル・アークなのだがその後の反応が違う

バーチカル・アークはただV字に斬るだけだ

だが、これは切ったあとにその切った場所から闇が溢れてきて妖怪を包み消し去る技だ

妖「きsh」

妖怪は悲鳴のようなものをあげる前に闇に飲み込まれ消え去った

杉「ふう、終了つと、さて帰るか」

俺は隙間を開き永遠亭に飛んだ

杉「おーす、帰ったぜー」

永「あら、おかえり智、今は狼じゃないのね」

杉「おう、永琳ただいま、妖怪殺すのにあれじやちよつとな」

妹「あ、智さん」

杉「おー、妹紅、輝夜いるか？」

妹「うん、こつちにいるよ」

杉「そつか、妹紅ちよつと一緒に来い」

妹「う、うん」ビクッ

杉「そんなに怯えるな輝夜を交えて話をするだけだ」

俺は輝夜のいる部屋に行った

杉「おーい、輝夜ー生きてるかー」

輝「私が死ぬわけではないじゃない、バカなの？」

杉「そりゃそうだ、じゃあ話そうかまず妹紅」

妹「！」ビクッ

杉「だからそんなにビクつくなくて、妹紅人の話はちゃんと最後まで聞くもんだ」

妹「・・はい」

杉「じゃあ、改めて輝夜、妹紅を住まわせてもいいか？」

輝「何言ってるの？いいに決まってるじゃない、同じ体質を持つてるんだから勿論、永

琳もよ」

妹「ふえ？」

輝「気づかなかったの？腹を貫かれたら血の出すぎで死んじゃうじゃない、でも私は生きている、奇跡とかじゃない死なないからよ」

妹「・・・・・・・・・・・・・・・・」

杉「でさ、前に俺も不老不死だって言ったよな、あれは本当だ」

妹「!!智……さんも?」

杉「ああ、なんなら試してやろうか?」

俺は刀を仕込んだ傘をちらつかせる

妹「いや、いいよ」

杉「そうか?別にやってもいいのに」

俺は薄ら笑いを浮かべながら、傘を隙間にしまう

杉「で、妹紅、なんで人のことを信じれない」

妹「そ、それは」ビクッ

杉「別に理由は言わなくていいさ、だいたい察せるからな、大方不比等関連だろ?常にあいつの顔を見てたから人の本質をわからなくなつたのか?」

まあ、俺から言わせればアホらしいとしか言えないな」

妹「なっ、何を言い出すんだよあんな!」

杉「言葉通りだ、アホらしいとしか言えない」

妹「あんたに何がわかるんだ!実の親に殴られて、蹴られ、挙げ句の果てには産まれてくるなって罵倒されるんだ!そんな私の気持ちがわからないくせに!」

杉「そんなのわかるわけないだろう、人の気持ちを完全に理解できるやつなんていない、心を読めたとしても本人の気持ちを理解する訳じゃない

その事があつたつて言う事実を知るだけだ

自分の気持ちを少しでもわかってもらいたいなら自分の心情を吐露すればいいんだ別にすべてを話せとは言わん

だが人に話した方が気が楽になるもんだぞ？」

妹「……私にはだつて普通の家に、藤原みたいな貴族の家じゃない、普通の家に産まれたかつた

そりやあ最初は藤原に産まれたのを誇りに思つてたときがあるさ

でも私がこの歳になる一年前からお父さんからの虐待が始まつたんだ

そりやあ最初は泣いたさ、お父さんに助けも乞うた、でも聞き入れずに殴ってくる今年になつてから蹴られて罵倒も加わつた

それが今までずっと続いてきたんだ

毎日毎日、お前は産まれてこない方がよかつたんだ、なんて言われてたんだそんなの自分の生きる意味、産まれた意味がわからなくなつてきたんだ

だから、私は生きる意味を探し続けるためにその蓬莱の薬を飲んだんだ」

杉「……それは違う、不老不死になると言うことは死なない、つまりただ生きていくだけになるんだ

長く生きすぎると、発狂してただ生きていく感情のない存在するだけの物になつてし

らでも頼つてもいいんだぞ？

だから、今は思う存分泣け、大人になってくると泣けなくなってくるからな泣けるのなんて今しかないぜ？」

妹「うう、う、うわああああああ！」

私だつて、私だつて、こんなことにはなりたくなかつたよおおお！

お父さんもお姉ちゃんもお兄ちゃんたちも私がひどいことされてるの知つてて何もしなかつたんだ、お母さんも、家族みんな」

杉「そうか、辛かつたら？もう気にすんなそいつらはもうお前を縛ることはないんだからな」

妹「うわあああああああん」ポロポロ

その後数分は妹紅は泣き止むことはなかつた

設定 竹取編

名前・・・小倉坂春風（例の如く偽名）

種族・・・人間？

年齢・・・二億一千万とちよつと

性格・・・何故か性格がコロコロ変わる

残忍であつたり、フレンドリーであつたり、可愛いものに目がなかつたりと様々
ただ、やはり仲間や動物、人を物扱いするとブツチする

だが基本は面倒臭がり陰陽屋（という名の何でも屋）でありながらのこの性格どうした
ものかという次第

実際、作者は自分のキャラなのにまだ方向性を掴めてなかつたりなんだつたり

外見、服装人間時↓髪は黒に少し白を混ぜた感じで神主が着るような服を着ている、

色は青と白を基調とした色で所々に黒が入っている

妖怪時↓見た目はまんま狼だが尻尾は九本で本編でも描写されたが大人二人は余裕で乗れる大きさ

毛色は黒に白を混ぜた感じ

尻尾の先端は白い

毛並みは尻尾はふわふわしていて、体はさらさらしている

骸骨時・第一形態↓特に変更なし

第二形態↓両腕を覆うくらいのところまで来ており足も両足の太股の真ん中辺りまで覆っている

武器は相変わらず変わらない

はいる筋も変化なし

私はあと二回変身を残している、この意味がわかるか？

戦闘スタイル・・・基本は刀、幽香との戦闘以降は傘（仕込み傘）を用いて戦闘する銃も能力を創造したことにより使用可能にだが本人は21世紀にならないと使わな
いらしい

弓もその能力のお陰で完璧に使いこなせるようになった

妖怪になると妖怪特有の鋭い爪や牙それと九本の尻尾を使う

基本は爪で切り裂きながら戦う、相手が手強いと牙や尻尾も使う

骸殻は拳に装備されたガントレットで殴る

能力・・・転生したときに神に貰ったものその能力で創造したもの

『ありとあらゆるものを操る程度の能力』

能力名通りあらゆるものを操れる

最近はまだこの能力は使っていない

『ありとあらゆるものを創造する程度の能力』

二次創作ではお馴染みの能力

作品によって能力概要は様々だがこの作品ではなんでも創れる能力でも作れる

『ありとあらゆるものを盗む程度の能力』

初登場は紫と初めて会ったとき紫の心を盗むために創造し使用した

またこの能力は心を盗むだけでなく、人の目を『盗んで』行動できるなど応用性も多

い

これは某緑のつなぎさんの能力を参考に考案した

『ありとあらゆるものを変化させる程度の能力』

物質を別のもので変えたり、種族を変えたりなどができる

また体の素材を変えて硬度などを強化できる

操る能力と合わせて硬度をダイヤモンド以上にできる

『ありとあらゆる言葉（言語）を理解する程度の能力』

名前の通り言葉や言語を理解できる

花やや動物の声を聞いたり、外国の言語を理解し話することができる

『武器を扱う程度の能力』

智が刀や弓以外の武器を使おうと思ひ創造した能力

これにより銃等といった近代の武器、斧や槍といったものもつかえるようになった
さらに刀や弓も前よりの使えるようになった

また、これらの武器は自分の隙間に入れてある

『伝える程度の能力』

春風が能力で創った能力の一つ

他人に聞かれたくないことを伝えることができる、所謂、こいつ、直接脳内に!?!である

だいたい人が人ではなく動物に伝えるために使う

剣技・術・技・奥義・・・智が使う技

『妖怪化』

変える能力により自分の容姿を獣型の妖怪にできる

狼や猫、狐や鳥にもなれる

尻尾のある妖怪は尻尾が九本になる

『炎の鎧―フレイムアーマー―』

骸骨第二形態以降から使用可能

使用者の体から炎が湧き出て体を覆う

これは他の属性でも使用可能

炎は攻撃力が上がるが防御力が少し下がる

水は瞬発力が上がるが最大速度が少し下がる

土は防御力が上がるが攻撃力が少し下がる

風は最大速度が上がるが瞬間最大速度が少し下がる

氷は瞬発力と防御力が少し上がるが攻撃力と最大速度が少し下がる

雷は攻撃力と最大速度が少し上がるが防御力と瞬間最大速度が少し下がる

光は瞬間最大速度が大幅に上がり、最大速度が少し上がるが攻撃力と防御力が下がる

闇はが攻撃力が大幅に上がり、防御力が少し上がるが最大速度が大幅に下がる

第五章 平安編

第壹話 旅出、目指せ平安京

前回のあらすじ

杉「やつぱり妹紅も年頃の女の子だもんな」

前回、妹紅の心の内をさらけだして大泣きしたところで終わったな

て言うか最近前回のあらすじがあらすじじゃなくなってる気がするんだが気のせい
か？

まあ、いい

はてさて、俺は今どこにいるかわかるか？

わからないか？教えてやろう

俺は今・・・・・・・・どこだったっけ？

いや、冗談だ

今いるのは妖怪の山だ

何故かって？そりゃあ平城京の次の都はどこだった？

・・・・・・・・・・そう、平安京だ

その平安京の情報を聞くために妖怪の山に来ているんだ

杉「で、風雅、銀杏、平安京・・・・・・・・人間の都の情報なんかないか？」

風「いきなりだな・・・・・・・・人間の都の情報か、確か前回と同じように絶

世の美女がいて、人間の一番上にたつものと結婚しているとかいう噂だな」

銀「おいおい、どうせ体目当てだろ？もしそいつが妖怪だったときは退治されるんだ

ろうな」

風「お前は！なぜそんなひねくれたことを言うんだ！」

杉「確かに人間は醜い、汚い、でもいいやつは一杯いるぜ？まあ、帝が全員が綺麗とは言えないんだがな」

銀「だろう？」

風「それは、そうだが」

杉「で、その都はどこにあるんだ？」

銀「確か、この屋敷の裏から山を下りて真っ直ぐ進めば着いた筈だ」

杉「サンキュー、そうだ、椀と文は元気か？」

風「ああ、二人なら天狗の哨戒部隊の訓練をしているところだ」

銀「文は鴉天狗の中で、椀は白狼天狗の中で頭ひとつ飛び出てるからな、すぐにのし

あがるだろうな」

杉「そうかさすがは天魔と白狼大天狗の娘たちだな」

銀「そんなに褒めんな照れんしろ」

風「別にお前を褒めているわけではないだろう」

杉「それだけ聞ければいいんだ、俺はもういくぜ」

風「そうか、ではまたいつか会おう」

銀「都で早々にくたばんなよ？」

杉「お前こそ椀に抜かされても知らねえぞ」

そんな言葉を交わしながら、俺は風雅の屋敷を出た

さて、風雅と銀杏の二人に都の場所を聞いて今から向かおうとしているんだが

鴉1「おい、てめえ、どの面下げて帰ってきやがったんだ、ああん!!」

鴉2「調子乗ってんじゃねえぞ、ごらあ!!」

ただいまめんどくさいやつにからまれてるでありんす

何なの、俺はこの山の天狗じゃねえよただの風雅と銀杏の友達だよ

ただの人間だよ

いや、今は半人半妖だった

でも能力で変えられるから別にいいんだけどな

杉「・・・・・・・・何?」

鴉1「だから、俺たちのこと騙してこの山に住んでたやつにここに来る資格はねえつ
つってんだよ!」

杉「・・・・・・・・逆に聞くがお前たちは疑問に思わなかったのか?他種族間
での婚約及び結婚は重罪、良ければ追放悪ければ死刑だ

ではなぜ今になって違反者の子供が公になって出てきたんだ?とかな」

!

杉「残念ながらハツタリなんかじゃないぜ？この傘は俺の能力で改造した特別製の仕込み傘だ

ほら持つところ引つ張つたらこんな綺麗に銀に輝く刀身が出てくるじゃないか、それでもやるってえのかい？したつぱさん？」

鴉2「・・・・・・・・・・」ガクガクブルブル

杉「懸命だ、お前は若いこんなところでこんな糞みたいなやつのために命散らせるのは勿体ねえからな、じゃあな」

鴉1「おい！てめえ！」

杉「なんだよ、俺は機嫌が悪いんだよお前のせいで生かしといてやるってんだから大人しくしとけや」ギロツ

俺はそう言い鴉1にかなり多目の殺気を当てる

鴉1「・・・・・・・・・・」シロメ

杉「はあ、何やってんだろ、俺」

俺はその場を去って都の方に歩いていった

今は都に向かって歩いてるんだが

杉「……………」カァー、ワンワン、ニャー

どうしてこうなった

いや犬と猫はわかる、でもなんで鳥も来んの!?

しかも鴉だし、いや俺って動物と会話できるから受け入れる人間って俺だけなのかな

杉「なあ、鴉よ、なぜお前は俺の頭の上に乗ってるんだい?、いや重くはねえけどよ」
ちなみにこいつ雌らしいわ、犬は雄で猫は雌

そうだ、いいこと思い付いた

杉「なあ、お前からこれから俺についてくるってんなら俺の式にならねえか?このままだとお前たちはいつか死んじゃう、だが式になると俺の力がいくらかお前たちに流れるようになる、特に鴉、お前は妖怪の山で妖気に当てられてたから半分妖怪化してるだろ?この際だ半妖って言うのは種族的に疎まれる存在だ

だったら完全に妖怪になった方がいいだろう

犬と猫はお前たちの自由だ、強制はしない
お前らじっくり考えろよ」

その後数分たったあとに三匹の答えを聞いた

杉「で、お前ら全員式になるってこといいんだよな、OK
じゃあ、この札を体に貼ったら式になれる

この札は貼ったら体に溶け混み主の力が流れるようになる

そのせいでお前たち、犬と猫が妖怪になるかもしれないが、いいか？よし決まりだな
お前たちは今日から俺の式だ」

こうして俺の仲間に三匹の動物が加わった

第弐話 到着、鳴くよウグイス平安京

前回のあらすじ

杉「鴉天狗つて屑が多いのかな？（～言～）」

前回、絡んできた鴉天狗を軽くあしらってから都の方に歩いて行って、鴉、犬、猫が式になって仲間になったところで終わったな

まさか三匹も増えるとはな

あ、ちなみに妹紅にはついてくるかと聞いたが妹紅は「自分で修行していつかは智さを越えるんだ！」なんていつてたが……あいつ何処で修行する気なんだ？

まあいい、さて今は何してるか気になるか？読者諸君、いるとは思ってないが教えてしんぜよう、俺たちは今人間の都にいる！

……いや、君たちが言いたいことはよくわかる、ここまでの道中はどうしたんだって言いたいんだろ？

そんなものはカットした

あまり面白いことがなかったんでな

精々、鴉たちが人化できるようになっただけだ

え？それが一番面白いイベントじゃないかって？

いいじゃないか、あ、ちなみに三匹の名前は鴉が黒、犬が柴、猫が三毛になったえ？理由？鴉は体毛が黒だから、犬は犬種が柴犬だから、猫は種類が三毛猫だからだ

安直すぎる？知らん、作者のネーセンの問題だ

そんなことはどうでもいい重要なことじゃない

俺は都で万屋を開こうと思う

て言うか開いた

杉「暇だなあ、なんかないか？黒」

黒「そうですね、ありませんね」

杉「柴ー、何かないかー？」

柴「ありません、依頼に来るように何かしてきてください」

杉「おいおい、柴は相変わらず堅いなあ、三毛は何かねえか？」

三「……………フルフル

杉「お前は無口だねえ」

とまあ、暇で暇で仕方がないんだ

あれ？何か説明し忘れてる気が……………

あ！そうなんだこいつらが人化できるのか説明してなかったな

こいつらはまあ黒は妖怪の山で百は生きてるんだ、妖怪になってもおかしくない

そんで、俺の式になって俺からいく霊力が加わって、人化できるようになったんだと

柴と三毛は単純に前の都で一緒に暮らしはじめてから半人半妖になったから言う

か元々妖力持ってたけど出してないってだけだった、でも半妖になってから俺が人間の

時に出てた霊力の半分が妖力で出るようになったんだ

それに当てられ続けて、妖怪に近くなって俺の式になってから靈力もらい続けたから
こうなったようだ

杉「はあ、仕方ない、依頼来るようにどうにかしてくる」

黒「じゃあついてきましようか？」

杉「いや、大丈夫だ、俺だけで十分だ、行ってくるよ」ガチャ、バタン

柴「いつてらっしゃいませ、主様」

三「・・・・・・・・・・・・・・・・」フリフリ

黒「三毛ってホントに無口よね」

柴「そうですね、少しでも喋らないんですか？」

三「・・・・・・・・・・・・・・・・」ウーン

黒・柴「・・・・・・・・・・」ジー

三「・・・・・・・・／／／／／べ、別に・・・・・・・・喋らないわけじゃ・・・・・・・・ない／／／／／カアアア

黒「(なにこの子すつごい可愛いんだけど)」

柴「(何でしょう三毛が物凄く可愛く見える)」

三「・・・・・・・・何か・・・・・・・・言ってくれない／／／／」

黒・柴「「可愛い(です)！」」

三「ふえ!? ううううう／／／／」

そんな会話が俺が出てったあとにされたものだそうだ

杉「ふーむとはいったもののどうすればいいんかねえ、お客が来るようにするには、か……店の前に依頼できる内容書いとくか？よしそうと決まれば実行あるのみ」

俺は早速店の前に戻り、看板をたてた内容は

『万屋杉本、殺し以外は何でも受け付け！妖怪退治もやってるよ』

こんな感じである

よし店に戻るか

杉「たっだーまー」

柴「お帰りなさいませ、主様」

黒「お帰りー主様ー」

三「お帰り……主様」

杉「おう、て言うか三毛がようやくしゃべったか！」ワシヤワシヤ

三「・・・・・・・・・・うにゆう／＼／」

杉「(可愛い)」

柴「それよりもちゃんと対策してきましたか？」

杉「おう、バッチリだ！これで来る筈だ」

黒「それでも筈なんだねえ」

柴「全く、あなたはいつもいつもそうやって・・・・・・・・」

杉「大丈夫だって、来るって」

柴「だからそう言うのを直してくださいって・・・・・・・・」「すみません」え？」

杉「ほらな？はーい、どうぞー」

「あ、はい」

杉「えーと、依頼、ですか？」

「あ、はい、あの私が飼っている猫を捜してほしいのですが」

杉「ふむ、猫は自由気ままな動物ですが・・・・・・・・いつ頃いなくなったのですか？」

「えっと、四日前からですかね」

杉「四日前ですか、わかりました万屋杉本、依頼承りましょう、猫の特徴を教えてください」

「ありがとうございます！特徴は黒い猫で足の先が白かったです」

杉「了解です、黒、柴、三毛、仕事だ、黒猫の搜索、特徴は足の先が白い猫だ」

柴・黒・三「了解です（了解ーい）（・・・了解です）」

杉「よし、行くぞ仕事開始だ」

俺たちは黒猫の搜索に当たった

杉「お捜しの猫はこちらでしょうか？」

「そうです！ありがとうございます！」

杉「はい、どうぞ（そこが嫌になったらいつでもこいよ？待ってるぜ）」

猫が小さく頷いた気がした

第参話 邂逅、白面金毛九尾・玉藻前

前回のあらすじ

杉「どうだ、客来ただろう！」

前回、時間が飛んで都に到着して、万屋杉本を開いた
そんで、初依頼を成功させたところで終わったな

さて、俺は今都を歩いて情報収集をしている

何の情報かって？傾国の美女がどこにいるかだよ

歩いて都の人が話していることを聞いている限りは一番でかい屋敷が帝の屋敷でその一室にいるらしい

と言うか幽閉されているらしい

こいつは俺の物つてか？ぶつ殺してやろうか

杉「さて、ここがその一番でかい屋敷だろうな」

うーん、どうやって入ろうか

とりあえず帰るか

杉「おーす、ただいまー」

黒「おかえりー」

三「……おかえりなさい」

杉「あれ、柴は？」

黒「主が出掛けてるときに依頼が来て出てるよ」

杉「どんな依頼だ？」

黒「えーと、何だっけ？」

三「……えつと……確か、どこかのお店の手伝い、だった気がする」

杉「へえー、そっか、あそうだ、俺夜ちよつと出るから」

黒「へー、何処に？」

杉「都の一番えらい人の家に」

く夜く

杉「さて、夜だ、早速行こうかな」

俺は能力で體質を透明人間に変えて帝の屋敷に向かう

杉「さて、侵入成功な訳だが、臭いでわかるかな？」

俺は種族を獣人にして、狼の嗅覚を使う

杉「これは……こつちの方だな」

俺は何か『魚介類のような臭い』がする方に向かっていく

ある一室の前につくと何か聞いてはいけないような声が部屋から聞こえてくる
なんだよ、完全にヤツてんじやん

何をとは言わないけど

こりや出直すか

俺は店に戻っていった

〳翌日〳

さて、今帝の部屋の一室にいる

正確には前にいる

さて、今は夕方情事をヤルには早すぎる時間だから昨日のようなことはないだろ
う・・・・・・・・多分

杉「さあ、入るか」コンコン

? 「はーい、なんでしよう?」スウウウ

あ、ちなみに俺は今昨日のように透明人間になっている
だから、襖を開けても何もいない

俺は開け放たれた襖から隙を見て入る

? 「なんだ誰もいないじゃないか」 スウウトン

俺はそのタイミングで体質を透明人間から不老不死に戻す

ちなみに種族も半人半妖にした

狼の半妖に

それとこの部屋だけに防音結界を張っておく

杉「やあ、昨日はお楽しみだったみたいだが・・・どれだけいつでも帝様はお盛

んなのかね？」

? 「なつ、誰だお前は!？」

杉「俺か? 俺は杉本智、都で万屋やってる者さ」

? 「・・・・・・」 ジー

杉「おいおい、そんなに警戒しないでくれ、ほら油揚げ」

? 「いただこう」

うおっ、こいつ変わり身速えなおい

さすが油揚げ、狐の大好物

? 「ほはえはなひほひにほほへひはんだ?」

杉「いや、何言ってるかわかんねえし」

? 「……んっ、お前は何をしにここへ来たんだ?」

杉「ああ、俺はあんたに会いに来た、それだけだ」

? 「ほう、で私に会った感想は?」

杉「うーん、正直言つて輝夜の方が綺麗つていうか美しいつて言つたらいいのか? あんたも美しいに入るけどな」

? 「なっ、なんだと! 貴様、それは本音か!」

杉「大真面目だ」

? 「はあ、まあいい、人それぞれなものな」

杉「さてさて、あんたの名前お聞かせ願おうか」

玉「ああ、そうだったな私は『玉藻前』だ、よろしく」

杉「へえ、そうか、じゃあ俺は帰らせてもらうぜ」ガラッ

玉「おい、まさかそこから出る気じゃないだろうな」

杉「そのまさかですよっ」とタンッ

俺は飛び出す瞬間に結界を解いて、体質を透明人間にした

玉「なっ、おい!」

玉藻が窓に寄ってくる

しかし、窓の外には何も見えない

人が落ちた形跡も無いし、まさか飛べるとは思っていないようだ
玉「なっ、どこにいった！・・・まあいいか」

玉藻はその後は気にせずいつも通りの時間を過ごしたそうだ

第肆話 看破、玉藻前の正体

前回のあらすじ

杉「変わり身速いなおい」

前回、帝の屋敷に行つて、玉藻前に会つてきたところで終わったな
それから四日に一回のペースで行っている

たまに帝にたいしての愚痴を溢すときがある

でも最近玉藻が妖怪じゃないかって噂が流れ始めているんだ

まあ妖怪なんですけどね

かの有名な白面金毛九尾なのだから

俺は最初に会ったときから気づいてるけどね

それにしても暇である

杉「なあ、柴ー何か面白いことないかー？」

柴「はあ、開店当ても言ってますませんでしたっけ？特にありません、玉藻様のところにも行けばいいじゃないですか」

杉「やだよ、一昨日行ったもんね明明後日にならないと行かねえよ」

柴「どうしてそういうところは真面目なんですか、四日に一回は守ってなんで仕事は

お気楽なんですか？」

杉「お気楽でもちゃんとやってんじやん、くーろー、何かないかー？」

黒「ふえ？何かって言われましても……あ、そう言えば帝様が何か陰陽師を集めてるって、何でも妖怪っていう噂の自分の妻を退治させるためってどこいくの!?!主様?!」

俺はそれを聞いたと同時に店を飛び出した

俺が向かった先は帝邸、しかしついた瞬間玉藻の部屋の窓が割れ影が森の方の走って
いくのが見えた

一瞬金色の毛が見えたのは気のせいであってほしい

その後陰陽師が五人ほど後を追っていった

杉「一歩遅かったか！」

俺は陰陽師たちがいった方向に走っていった

玉藻前 side

くそつ、何故ばれた

わからない、いつだいつ見られた？

油揚げを食べているときか？一人で部屋にいるときか？ダメだ思い付かない！

しかし今は逃げなければ、陰陽師が追ってきている

本調子の私ならばなんともないが、部屋で不意打ちされた時に札が一枚ついてしまつた

そのために動きが鈍ってしまふ

クソツ、追い付かれてしまった

どうやら私はここまでのようだ

そう考えた時には私の体を五本の矢が貫いていた

そこで私は意識を失った

倒れる瞬間、九尾の狼がこちらに走ってくるのが見えた

side out

俺は今全速力で玉藻と陰陽師を追っている

そろそろつくはずだ……！！

追いついた、だがまたもや一步遅かった

そこで見たものは

五本の矢に貫かれた玉藻の姿だった

ふむ、帝に腹は立てるが今はこいつらに一番ムカついている

何故だろうか、まあいいとりあえずこいつらは始末すればいい

俺は一人の陰陽師の背後に音もなく近づき、鋭い爪で体を裂いた

それで他の陰陽師たちも俺の存在に気付き応戦しようとするが、反応が遅すぎる

俺は早く構えた陰陽師から順に裂いていった

結果できたのは裂けるチーズの肉塊 v e r .

そんなことよりも

杉『ゆかりー!』

紫「何かしら? 呼び出しなんて、ってどうしたのその子!？」

杉『陰陽師にやられた、息があるから永遠亭に連れていってくれ俺も後で向かう』

紫「ええ、了解任されたわ」

紫はスキマを開き、永遠亭に行った

さて戻って出る準備して永遠亭に向かおうか



第五話 旅出、まずは目指せ永遠亭

前回のあらすじ

杉「玉藻の運命やいかに！」クワツ

前回、玉藻前が妖怪だつてばれて退治されけたところを助けて永遠亭に送つたところ
で終わったな

てか、あれでまだ息があるってどんだけだよ
まあ、さすがは大妖怪だな

今は永遠亭で診てもらってるとこだ

無事であつてくれ

だが、今すぐには見に行けない

何故なら俺にはやることがあるからだ

それは………

杉「柴、黒、三毛、そろそろ次んどこ行くぞ」

柴「早いですね、まだ半年くらいしか経ってませんけど」

黒「ご主人ー、あのあとどうなったの？」

杉「あのあと? …… ああ、俺が飛び出したあとの玉藻のことか、結果的に言

うとあいつは妖怪だった

それも九尾の狐のな」

柴「九尾の狐………ということはかなりの大妖怪ですね」

杉「ああ、大陸の方の妖怪だが俺でも噂は聞いたことあるよどんなのかは忘れたけど」

柴「でしょうね」

杉「それよりも片付けるぞ、このままで出ていく気はないからな、ちようど空いてた

このボロ屋買い取ってここまでしたんだ

最後はこれ売っ払おうと思うから綺麗に片付けるぞ」

黒「うえー、めんどくさーい」

柴「黒、あなたは女の子なんですからはしたないことはダメですよ」

黒「ぶー、柴のお母さん」

杉「まったくこいつらは仲いいんだか悪いんだか」

三「にやあ……」

杉「三毛はちゃんとやってるな、偉いぞ」ナデナデ

三「ふにやあ／＼」

杉「(かわいい) ほらお前らも喧嘩してないでさっさと片付ける」

二人「はーい(わかりました)」

杉「まったく……」

三「？」コテン

杉「何でもないよ、さあ俺たちもやるか」

三「にや」コクン

このあと一時間くらいかかって片付けが終わった

杉「さて、出るか」

三人「うん（はい）」コクン

杉「おーい、門番さーん」

門「む？主らは旅のものではないか、どうしたのだ」

杉「いえ、そろそろ新しい土地に向かおうかと」

門「そうか、いや柴君にはよく門番の手伝いをしてもらっていてね、少し寂しくなるね」

柴「御一緒にいるときはとても楽しかったですよ」

門「ははは、そうかいそいつはよかった、通りな」

杉「ありがとうございます」

俺たちは開かれた門を潜った

潜つてから少し歩くと、物凄い風が吹いた

門「うおっ！何だ!?!」

門番さんがあまりの強風に飛ばされるに耐えている

門「なんだったのだ、一体」

風が止んだときには俺たちの姿はなかったそうだ

杉「さて、スキマで永遠亭に行くわけだが、何か質問は？」

柴「特には」

黒「スキマって目が悪くなりそうな場所？」

三「・・・フルフル

杉「黒、別に目が悪くなりそうな場所って訳だはないんだが……まあいいか、じゃあ行くぞー」

俺たちは俺が開いたスキマで永遠亭へと飛んだ

杉「よしついたな、おーい、永琳ーいるかー」

永「あら来たのね、いらつしやいあなたが寄越した玉藻前つて妖怪は無事よ」

杉「おおそうか、よかつたよかつた」

助けたのに死なれたら後味悪いしな

さてと

杉「紫」

紫「何かしら」

杉「お前の何だ、人と妖怪が共存させたいつてやつ手伝つてやるよ」

紫「あら、それはありがたい、じゃあこれつけて」

杉「いや別に式になりたいつて訳じゃねえよ、て言うか師匠式にするつてどうい

こつた？」

紫「あなたが式を知つていたのに驚きよ」

杉「俺の後ろの三人がそうだしな」

紫「あら、知らない人がいると思つたらあなたたちは智の式なのね私は八雲紫、よろ

しく」

柴「私はこの方の式神の柴です」

黒「同じく式神の黒だよ」

三「……式神の……三毛」

杉「で、後は何が足りないんだ？」

紫「ええ、土台と人間の里と里の守り人と弱小妖怪は入れといたから、後は強い妖怪ね、面白そうなやつがいるのよ大陸よりも向こう『ヨーロッパ』ってとこにね」

杉「ヨーロッパか、どんどこかは知らんが行かせてもらおう」

紫「そう、じゃあこのスキマを越えたらヨーロッパよ」

杉「おっけい、よし聞いてたかお前ら次は外の国だ、何があるかわからんが気引き締めていけよ」

三人「はい（わかった）」コク

杉「よし、行くぞ」

俺たちは紫のスキマの中に入っていった

設定 平安編

杉本 智

性別は男で、性格は面倒臭がり、でもやるときはやる仲間や動物、人間に理不尽なこと（主に捨てるなどといったこと）をすると容赦がなくなる

例えそれが自分の上司に当たる人物でもだ

犬の柴、猫の三毛、鴉の黒を式神として使役しているが、本人は主従関係ではなく家族のように接している

（柴と三毛との出会いは竹取物語編で一緒にすむことになった犬と猫が今の柴と三毛である）

戦闘時に使う武器はポジションによって異なる

前衛で前に出るときは刀と銃を二丁

遊撃でどちらにも動く場合は銃を二丁とサバイバルナイフを一本

後衛で援護するときには弓と銃何丁かの場合によっては狙撃銃を使うことも

使う銃の種類はベレッタM92とデザートイーグルだ

狙撃銃はドラグノフ狙撃銃を使用する

ベレッタM92は主に前衛で出るときに使う

デザートイーグルは遊撃時にいろいろ動くので威力はあった方がいいのでこれを使う

ドラグノフ狙撃銃は言うまでもなく敵との距離が空いているときに使う

また、たまに魔法を使うときがある

種族は現時点では半人半妖とされている

能力はいっぱいある

まずはありとあらゆるものを創造する程度の能力だ

これは名前の通り何でも創造することができる

但し命あるものは創造できない

できたとしてもそれは形だけの骸だ

元々はこれともうひとつの能力だけだったが利便性も考えこの能力で必要だと思われる能力を創造した

ありとあらゆるものを操る程度の能力

これは上記の創造する程度の能力と同じく最初から持っていた能力である
名前の通り何でも操れる

これには使っていくうちにより強大なものを操れるようになっていく
現在は世界の理さえ操れるようになっていく

最早只のチートである

しかし本人は世界の理は滅多に操らない

変える程度の能力

これは創造する程度の能力で創造した能力のひとつだ

文字通り変える、つまり物質の形状だけでなく物質そのものを他の物質に変えることができる

またこの能力は種族をも変えることができるようだ

今まで人間を貫いてきたがさすがにここまで生きれば人間ではないだろうという結論に至り種族を半人半妖にしたようだ

完全な妖怪化も可能

これまでで変化した種族は狼の妖怪のみ（何故か尻尾は九本）

盗む程度の能力

この能力も創造する程度の能力で創造した能力のひとつだ

この能力はかなり応用がきく

人の心の声を『盗んで』読み取ることも可能

人の目を『盗んで』行動が可能

つまり罨などを張るときは有効的な能力だ

武器を扱う程度の能力

これは智本人が刀や弓以外の武器も使ってみたということ創造した能力だ
文字通り武器を扱える銃などの武器が主に使えるようになった武器だ

ぶつちやけるとこの能力は銃を使うために創造した能力だ

ありとあらゆる言葉（言語）を理解する程度の能力

これは文字通り何でもわかり会話もすることができる

花や動物たちや外国の言語までもが理科し、話すことができる

正直言つてこれは動物たちと話したいがために創造した能力だったりする

うつつ程度の能力

これは能力を他の人に渡したり、能力をコピーしたりできる

この能力を使って柴、三毛、黒に空間を操る程度の能力を渡した

その他多数存在はまだ使っていないためここでは紹介できない

柴

性別は男で、性格は真面目で誰に対しても敬語で話す

しかし、主と敵対する者には冷たい表情で容赦がなくなる

まだ犬の時に助けられた（というより拾われた）恩義を感じている

戦闘時に使う武器は短剣と長剣

まあ、これから先に出てくる白玉楼の庭師が使う楼観剣と白楼剣を思い浮かべてくれればそれだ

短剣の方で主に銃弾等の遠距離攻撃を捌き、長剣で敵の首をとりに行くスタイルだ
種族は犬の妖怪だが能力を使えば犬科の妖怪になる

能力は三つ目は持っている

一つ目は犬科の動物になる程度の能力だ

これは文字通り犬科の動物になることができる（といっても妖怪のだが）

犬科の動物なので他の動物になったあとにもとに戻ることができる

二つ目は主の智から能力を授かり

空間を操る程度の能力だ

これは武器を他のスキマのような空間にしまうことによつてどこでも武器を取り出せる

またこの能力は主の智の能力で渡された能力だ

三つ目は剣術を扱う程度の能力だ

これは白玉楼の庭師の能力と同じ能力だ
なので説明は割愛

三毛

性別は女で、性格は無口で時たま喋る

しかしこれは恥ずかしいのが四割の理由で残り六割は自分の周りの智、柴、黒以外の他の人間や人型の妖怪にたいしての恐怖症のようなものになっている

最初の方も黒とは一言も喋らなかった

最近になって黒にもなれてきて喋るようになった

柴と智は竹取物語編から一緒に住んでいたのになれている

でも、黒が近くにいると喋らなかつた

戦闘時は基本的に前衛で前に出る

武器は短剣二本と銃を二丁持っている

使用する銃はベレッタM92である

ベレッタM92で牽制しながら敵に近づき短剣に持ち変えて一気に仕留めるスタイル

ルだ

種族は猫の妖怪だが能力によって猫科の動物になれる

能力は三つ持っている

一つ目は猫科の動物になる程度の能力だ

文字通り猫科になれる（虎やライオン等）

また柴と同じように他の猫科の動物になってももとに戻れる

二つ目は柴と同じように空間を操る程度の能力だ

効果は柴と同文である

三つ目は銃を扱う程度の能力だ

これは文字通り銃系統の武器を扱うことに長けている能力だ

庭師の能力の銃版

黒

性別は女で、性格は智と同じでお気楽なやつで誰に対してもフレンドリーだいつも無口な三毛に仲良くなろうと話しかけていたがいつも返事を返してくれなかったので陰でしょぼくっていた

戦闘時は三毛と一緒に前衛で前が出る

武器は槍で相手の間合いに入る前に攻撃を仕掛けることができる

突進と見せかけて風ぎ払い等といったことをよくやる

また相手との距離が空いていると槍投げの要領で投擲する

種族は鴉の妖怪（鴉天狗ではない）能力で他の鳥科の動物になれる

能力は三つ持っている

一つ目は鳥科の動物になる程度の能力である

これは柴や三毛と同様他の鳥科の動物になることができる（鷲や鷹など）

この能力も柴と三毛の能力と同様元の鴉に戻ることができる

二つ目は二人と同じ空間を操る程度の能力だ

この能力も二人と同じなので割愛する

三つ目は槍術を扱う程度の能力

文字通り槍を扱うことに長けている能力だ

まあ、白玉楼の庭師の能力の槍版とでもいった方が早いだろう

第六章 中世ヨーロッパ・紅魔館編

第一話 おい、妖怪の山の門番だけ堅物じゃねえかby.
智

前回のあらすじ

杉「いざ、ヨーロッパへ」

前回、玉藻が無事だと言うことがわかり、紫の頼みでヨーロッパにわたったところで終わつたな

で、渡つて出てきたところは町があるとところからかなり離れたところだった

とりあえず旅のものを装つて町に入ることに成功した

杉「さてと、噂にあつた吸血鬼に興味があるつて理由で町に入れたがどうする、ヴァンパイアハンター協会的なやつに協力するつて吸血鬼に会いに行くか？」

柴「まあ、紫様の依頼では吸血鬼に接触してほしいというのがありますから、いった方がいいでしょうね」

杉「だよな」

黒「それで、そのヴァンパイアハンター協会？つて言うのはどこにあるの？」

杉「今検索中だ……見つけた、ここから遠くないな四、五メートルくらいか？」

三「……遠くない？」

柴「それは遠くないですね、ここから四、五メートルくらいのところは……あれですかね」

柴はそう言つて石煉瓦造りの大きな十字架のついた建物を指差す

杉「そうあれだつて普通に十字架ついてんじゃん」

黒「どういうこと？」

杉「十字架は吸血鬼の弱点として知られるもののひとつだ、他にはニンニク、聖水、聖銀 e t c、まあとにかくそういうことだ」

そんな話をしてしていると、道行く男に話しかけられた

？「あんた吸血鬼について詳しいな、ヴァンパイアハンターでも目指してんのかい？」

杉「いえ、これは自分の知識ですね」

？「そうかいそうかい、でももし吸血鬼を実際に殺つてみたいってんなら、あの十字架の建物にいくといいよ

あそこはヴァンパイアハンターの拠点だからね」

そういうと男は去っていった

杉「なんだったんだ？あいつ」

柴「それよりも行きましょう、主様曰がくれてしまいます」

杉「そうだな、行くか」

俺たちは十字架の建物に向かった

杉「よーし入るぞー、すみませーん」

ハンター1（以後ハ1、2等と記述）「なんだい？ここはヴァンパイアハンターの拠点だよ、用件は？」

杉「いえ、実は私たちがヴァンパイアハンターの仲間に入れてほしいのです」

ハ1「ほう、それは何故？」

杉「ただの興味本意です」

ハ1「で、興味本意で吸血鬼を殺ろうなどと抜かすな、死ぬぞ」

杉「いえいえこれでも実力は有るゆえ」

ハ1「ほう、では示せ」

男がそういうと集団の中から四人の人が出てくる

ハ1「こいつらを倒せば入っても構わん」

杉「そうですか、ではやらせていただきます……いくぞ、お前ら」

三人「御意」

俺たち三人はヴァンパイアハンターの四人と勝負を始めた